仮面ライダーオーズ/ＯＯＯｆｅａｔ．ＤＯＧ ＤＡＹＳ 姫と勇者と赤き不死鳥

ＦＯＸ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダーオーズ／ＯＯＯｆｅａｔ．ＤＯＧ　ＤＡＹＳ　姫と勇者と赤き不死鳥

【Ｎコード】
Ｎ２９５０Ｙ

【作者名】
ＦＯＸ

【あらすじ】
仮面ライダーオーズ、火野映司が相棒のアンクと共に、真木博士による“世界の終末”を阻止してから半年あまり。映司はいなくなったアンクと再開できる事を信じ、旅を続けていた。
時は流れ３月の中旬、映司はかつての仲間とお花見をするため一足速く日本に帰国し旅をしながら夢見町を目指していた。そしてその旅の途中、ある町に訪れた際ある少年と出会う。この出会いから映司の新たなる戦いと旅が幕を上げる。

誘いと帰国と落とし穴（前書き）

初投稿になりますＦＯＸと言います。

初めてなので温かい目で見ていただくと幸いです。

話しはオーズ最終回の後からですが、この物語は、仮面ライダー×仮面ライダー　フォーゼ＆オーズ　ＭＯＶＩＥ大戦ＭＥＧＡ　ＭＡＸの物語を無視しています。ご了承下さい。

誘いと帰国と落とし穴

かつてある戦いがあった。

その戦いは世界の終焉を望む一人の科学者、真木清人が起こしたものだった。

しかしそれを阻止した青年がいた。

青年の名は火野映司。

火野映司はこの戦いの中で相棒であり、欲望の怪人グリードであるアンクを失った。

しかしアンクは最後、満足していた。満たされることが無い自分が死ぬとこまでこれたということに。

この戦いの後、火野映司は止まっていた旅を再開した。その手には2つに割れたタカのコアメダルがあった。映司は再び相棒であるアンクに会えることを信じ、今日も明日のパンツを持って旅を続けいく・・・。

――――――

3月中旬、日本、紀乃川市。現在、火野映司はこの町にいた。本来ならまだ海外にいたはずだが、とある理由により日本に戻ってきていた。

その理由は今から約数日前までさかのぼる・・・。

・

・

・

・

「お花見ですか？」

『そうよ！映司君、たまにはみんなでパーッとやりましょうよ！』

映司は画面中にいる女性に花見に行かないか？という誘いを受けていた。

この女性の名前は白石知世子。多国籍料理店クスクシエの店長であり、以前映司が日本にいたときにお世話になっていた。現在も日本に帰った時はお世話になっている。

ちなみに画面の中いる理由は、これがテレビ電話だからである。映司はこのテレビ電話を定期的に利用し連絡を取り合っている。

「いいですよ。やりましょうよお花見。」

『じゃあ決まりね！日時は後でメールで送るから！』

「わかりました。ちなみに参加者は？」

『参加者は、私に後藤さんに伊達さん。あと里中さんと鴻上会長も。あ！あとちゃんと比奈ちゃんと信吾さんも来るわよ！』

「そうですか。わかりました。じゃあまたお花見の時に。」

『待ってるわよ～。』

・

・

・

・

というやりとりがあったのだ。

ちなみに映司はメールで送られてきた日時より早く帰ってきていた。

本来なら花見の日の前日でも良かったのだが、映司はあえて１０日以上早くきて、旅をしながら向かうのもいいだろうと考え今にいたる。

「結構いいとこだよな～ここ。」

映司は歩きながらこの町の感想を言っていた。

「ん?、あれは・・・中学校かな?」

映司は左手に見えた建物を見てそう言った。

「今の時期だと、ちょうど3学期の終了式あたりかな?」

そんな予想しながら映司は中学校の校門の前まで来た。今時間帯だからか、校庭には誰もいない。その隣にある体育館らしき建物からマイクを使って喋っている人の声が聞こえる。

どうやら映司の予想が当たったようだ。

「本当に終了式やってるんだ・・・ん?。」

その時、映司は校舎の屋上を歩く少年を目撃した。屋上といっても２階ほどの高さの場所である。その少年は馴れているのか、足どりは軽い。外見は遠くからではわかりにくいが、金髪であることはわかった。

「馴れているんだろうな～。足どりが軽いし。」

映司はしばらくその少年を見ていたが、ふと視界にあるものが映った。

「あれ・・・犬だ。なんであんな所に？あの子をまってるのかな？あれ・・・剣をくわえてる！？」

普通、剣をくわえた犬などいるだろうか？映司は考えていると、遂に少年が屋上の縁に来た。

「・・・嫌な予感がする。」

映司はそう言うと、校門を乗り越え、剣をくわえている犬に近づく。慎重に近づき、犬まであと数十メートルの所になった時、少年が華麗に屋上から飛び降りた。

次の瞬間、犬はくわえていた剣を地面に突き刺した。剣が地面に突き刺さると、ピンク色の魔法陣のようなものが現れ、その中心に穴が現れた。

「危ない！」

映司は身を隠していた花壇から飛び出した。穴の位置は少年が飛び降りた時、ちょうど着地する場所にできていた。そのため少年は吸

いこまれるようにして穴に向かって落ちていった。

「間に合えーーー！」

映司は穴のある場所に向かって飛び込み穴の中に手を伸ばした。

そして・・・

・

・

・

・

「なんとか・・・間に合った・・・。」

映司の手はしっかりと少年の手を掴んでいた。

「君、大丈夫！？今引き上げるから！」

「あ・・・ありがとうございます！」

少年は穴ができた事に驚いていたが、さらに映司に助けられた事にも驚いていたようだ。

映司は少年を引き上げようとする。が・・・

ドス！

「へぇ？」

何かがぶつかってきた。

そして・・・。

「「!?、うぁーーー!」」

映司と少年は一緒に穴に落ちていった。映司はその時、自分達が落ちた後穴が閉じる瞬間先ほどの剣をくわえた犬が飛び込んできたの見た。

おそらく先ほどの音はあの犬が自分の背中に突進した音だったのだろうと映司は思った。

そのまま2人と1匹は穴の中に消えていった。

決断と空間と3つの光（前書き）

第2話です。

書くの難しい・・・。

決断と空間と3つの光

ここは、異世界フロニャルドにあるビスコッティ共和国。

フロニャルドには、地球の人々とは違い動物の耳や尻尾を持った人々が生活している。

このビスコッティ共和国には犬耳や犬の尻尾を持つ人々が暮らしている。

そのビスコッティ共和国の中にあるフィリアンノ領。その中にフィリアンノ城は存在する。

現在は夜。このフィリアンノ城の一室である会議が行われていた。

その部屋には重苦しい空気が流れている。

「やはりガレット獅子団は、ミオン砦に攻めて来るようですね。」

1人の男性が発言した。

すると今度は緑色の髪を持つ少女が発言する。

「ガレットは本気でこの城まで侵攻してくるのでしょうか？」

「ガレット獅子団のレオンミシェル閣下は勇猛な方じゃが、かような無茶をされる方じったかのう。」

「理由はどうあれ、この最近の戦はひたすら負け戦じゃ。」

「せめて、ダルキアン卿やテンコ様が居てくれたらのう・・・。」

3人の老人は口々に言う。

この老人達が言っているように、現在ビスコッティ共和国は隣国であるガレット獅子団と戦をしているのだが、ここのところ敗北が続き後が無くなっているのだ。

「騎士ブリオッシュやユキカゼにも使命がありますれば。」

「ともあれ、この戦をしくじれば最悪、このフィリアンノ城まで・・・。」

「させません！」

老人の1人が不安げに言うと、緑色の髪の少女が叫びながら立った。

「姫様の為にも！ビスコッティの民の為にも！この戦我々が！」

「エクレ、今はその姫様の御前でありますよ。」

「あ・・・失礼しました。」

栗色の髪の少女が緑色の髪の少女を静めた。そして緑色の髪の少女は席につく。

すると・・・。

「ありがとう、みんな。我がビスコッティの苦しい戦況、よく分かりました。今度は本当に負けることはできない戦です。ですから・・・最後の切り札を使おうと思います。」

ピンク色の髪の少女の発言にその場にいた者全員がざわめく。

「ビスコッティ共和国代表、ミルヒオーレ・フィリアンノ・ビスコッティの名において、我が国に勇者を召喚します！」

ピンク色の髪の少女、ミルヒオーレは力強く発言した。

しかしこの時、彼女は気づいていなかった。この勇者召還をしたが為に、何の関係の無い人を巻き込んでしまうことに・・・。

ーーーーーーーー

場所は変わって、日本、紀乃川市にあるとある学校。

現在この学校は終了式の真っ最中である。

1人の教師が体育館に向かっている途中、ある生徒とすれ違う。

「ん?、おいイズミ、どうした?」

教師がそう言うと、イズミと言われた生徒が振り返る。

「ちょっと飛行機があるので！」

「そうか。気をつけていけよ。」

「はい！」

そしてイズミと言われた生徒は教室に戻っていった。

彼の名はシンク・イズミ。

この学校に在学するアスレチックスが大好きな少年である。

教室に戻ってきたシンクは、帰り支度を済ませ教室の窓を開けた。開いた窓からは良い風が入ってくる。

そのままシンクは窓の外に出た。屋根の縁を歩き、教師用の玄関の屋上まで歩いて行く。

ちなみにシンクが何故速く帰るのかは、彼の実家にある。彼の実家はイギリスのコーンウェールにあるのだ。シンクは春休みを実家で過ごす為、速めに自宅に帰り、支度をしなければならいのだ。

そうこうしているうちに屋上の縁に来る。

「よっと！」シンクは華麗に飛び上がった。そのまま綺麗に着地と思われた。が・・・

「てぇ？、えーーーーー！」

シンクは驚愕した。

何故なら、自分の着地する場所に穴が開いていたのだから。

「うぁーーーーー！」

シンクはそのまま穴に向かって落ちていく。落ちる・・・そう思った時だった。

パシ！

何かがシンクの手を掴んだ。

シンクは下を見た。下には何とも言えない空間が広がっている。そして、上を見た。そこには・・・自分の手を掴んでいる・・・青年がいた。

「君、大丈夫！？今引き上げるから！」

青年はそう言った。

「あ・・・ありがとうございます！」

（助かった・・・。）

シンクは安心した。そして引き上げられ始める。しかし・・・

ドス！

何かが何かにぶつかった音がした。

（何だろう？）

そう思った矢先。なんと青年が落ちてきた。

「「！？。うぁーーーーー！」」

シンクは青年と一緒になって叫んだ。

（一体何が起こったんだ！？）

シンクは思った。しかしそれはすぐ解消された。

穴が閉じる瞬間、犬が１匹飛び込んで来たのだ。

（まさか・・・あの犬が！？）

おそらく、自分を引き上げようとした青年を押したのだろう。そしてさっきの音は犬が青年を押した音だったのだろう。

そのまま、シンクと青年と犬は不思議な空間の中に消えていった。

ーーーーーーーー

あれからどれくらい時間が過ぎただろう・・・。映司はぼんやりと

考える。

あの穴に落ちてからというもの、映司はずっとこの不思議な空間をさまよっていた。

助けようとした少年と剣をくわえた犬は落ちている途中にはぐれてしまい、どこにいるか分からない。

「はぁ・・・これからどうしよう・・・。」

映司はポツリと呟いた。

とりあえず辺りを見渡してみる。

しかし、　何も無い。本当に何も無い。

「困ったな・・・。」

映司はどうすればここから脱出できるか考え始めた。

・

・　・

・　・　・

「駄目だ・・・何も浮かばない。」

映司はため息をついてしまう。

「こんな時にアンクが居てくれたら・・・。」
映司はポケットから割れたタカのコアメダルを取り出す。
アンクならこんな時どうするか。考えてみたが・・・。
「はぁ・・・。」
しかし、出るのはため息だけだった。
その時。
「ん？何だろ・・・この感じ？」
映司は何かを感じ取った。
「懐かしい・・・。」
懐かしい・・・。とても懐かしい感じがした。
映司はその懐かしさを探し始める。辺りを見渡す。
「・・・あれは？」
映司の先には・・・赤く光る３つの物体があった。映司はそれに手を伸ばす。
「あと・・・もうちょっと・・・。」
映司は必死に手を伸ばした。

そして、遂にその３つの光を掴んだ。

次の瞬間、映司は真っ赤な光に包まれる。

そしてそのまま、映司を包んだ光はどこかに飛び去っていった。

連絡とアンテナと降ってきたパンツ（前書き）

第3話です。

今回はビスコッティ側の話しになります。
映司が登場するのは次回あたりになります。

連絡とアンテナと降ってきたパンツ

現在ビスコッティ共和国は、歓喜の渦に包まれていた。

何故か？、それは隣国であるガレット獅子団との戦に勝利したからである。

ビスコッティはここ最近、ガレットとの戦で負け続け、後が無くなるという事態になった。

この現状を重く見たビスコッティ共和国代表領主、ミルヒオーレ・フィリアンノ・ビスコッティはこの現状を打開すべく、最後の切り札である勇者召喚を使用したのだ。

そうしてビスコッティに呼ばれた勇者、名はシンク・イズミ。

勇者シンクの活躍は目覚ましく、一般兵を倒しまくりポイントを量産。更にはビスコッティ騎士団親衛隊隊長、エクレール・マルティノッジとの連携によりガレットの代表領主、レオンミシェル閣下を撃破するなどの活躍ぶりであった。

しかしある事態が起こった。

勇者シンクとミルヒオーレは、なんと勇者召喚した勇者は帰還することが出来ないことを知らなかったのである。

その事実にショックを受けるシンク。

この事態に責任を感じたビスコッティ王立学術研究院主席、リコッ

タ・エルマールは学術研究院生と共に勇者を帰還させる方法の調査を始めるのであった。しかし結局見つからず。

そしてシンクは、その問題はひとまず置いといて別の用件をリコッタに頼のだった。

ーーーーーーー

ここはフィリアンノ城から少し離れた浮島の1つ。

この浮島に3つの人影があった。ビスコッティ騎士団親衛隊隊長のエクレール・マルティノッジ。

ビスコッティ王立学術研究院主席のリコッタ・エルマール。

そしてビスコッティが召喚した勇者、シンク・イズミ。

の3人である

彼らは現在、浮島にある召喚台にいた。

「くぅ・・・。うぁ！」

「だから言ったろ。帰れないって。」

シンクはピンク色の魔法陣に手を突っ込み何とか帰ろうとしたのだが、手は弾かれてしまう。

エクレールは短剣をかざしながらそれをため息混じりに見ていた。
「うぅ・・・やっぱり駄目なのか・・・。」
「だから何度も言っているだろう。」
シンクは心が折れそうになる。
すると・・・。
「勇者様ーー、準備できました！」
後ろからリコッタの元気な声が聞こえ、シンクとエクレールはリコッタがいる周波増幅器のところへ。
シンクは帰れないならせめて連絡をさせてくれといい、召喚台で携帯を使えばつながるのでは？と考え今にいたる。
そして電波を出すために使われるのが、この周波増幅器である。
ちなみにこの周波増幅器はリコッタが5才の時に発明したらしく、今ではフロニャルド全域で使われているらしい。
「それじゃお願い。」
「了解であります！」
シンクの合図でリコッタは周波増幅器のスイッチをいれる。
シンクは携帯を開きアンテナが立つか見る。
「・・・あ！立った！」

その声にリコッタが近寄ってくる。

「何がでありますか？」

「ほら、携帯のアンテナ！」

シンクは携帯の画面に表示されているアンテナを見せる。

「よし！じゃ早速・・・。」

シンクはアンテナが復活した携帯を使い、地球にいるレベッカや家族・親戚に連絡をとり始めたのだった。

シンクが家族や親戚と連絡をとりあっている時、エクレールは今回の戦を思い返していた。

（今回は勇者のおかげで勝つことができた。しかしあれは・・・止めよう。考えただけで恥ずかしい。）

エクレールは今回の戦で物凄く恥ずかしい思いをしていた。

ちなみに、エクレールが恥ずかしい思いをしてしまったのはシンクのせいである。

（・・・この後に、もし再びガレットと戦があったら・・・我々はまた勝てるだろうか・・・。）

エクレールがそんな事を考えていると・・・。

「ん?、なんだ・・・あれは?」

空をひらひらと舞っている変な物を見つけた。

今エクレールは暇なので、その空を舞っている物を目で追う。

そして・・・悲劇は起こった。

ボフ。

エクレールの顔になにかが被さった。

「!?。な、なんだ一体!?」

急いで顔に被さったもの取る。

被さってきたものにエクレールは戦慄した。

それは・・・

「お、男のパンツだと!?しかも蝶柄!?何故こんな物が!?」

エクレールは素っ頓狂な声を上げる。しかしすぐに黙り込む。

シンクは電話に集中している為か気づいておらず。リコッタはシンクの携帯に夢中である。

(よ、よかった・・・気づかれていない。・・・しかし、何でこんな物が空から降ってくるんだ?)

エクレールは、パンツが降ってきた空を見上げた。だが何故パンツが落ちてきたのかはさっぱり分からなかった。

脱出と紛失と始まる追いかけっこ（前書き）

第４話です。

今回は映司メインになります。

脱出と紛失と始まる追いかけっこ

ここは、地球と異世界であるフロニャルドの間にある不思議な空間。
この不思議な空間を突き進む赤い光があった。
「一体どこに向かっているんだろう・・・。」
赤い光の中で火野映司は、今どこに向かっているか考えている。
しばらく進んでいると、視線の先に光が漏れ出している所を見つける。
「もしかして・・・あそこに向かっているのかな？」
映司は今、自分が向かっている場所がその光が漏れ出している場所ではないかと予想する。
最初こそ小さい光だったが、進むにつれだんだん大きくなっていく。
映司の予想は確信に変わる。
「やっぱり光に向かってる。あそこが出口なのかな？」
光が出口ではないか？映司は心の片隅で期待を膨らませる。
ようやくここから出られると。
そして、映司は光の中へと消えていった。

光に突入し、映司は不思議な空間から脱出する。
次の瞬間、目にした光景に映司は我が目を疑った。

「てぇ・・・嘘！？」

何故なら・・・

そこは大空だったのだから。

見渡せばそこには雲があり、下を見れば大地が見える。

つまり、映司は大空に放り出されたのだ。当然パラシュートは着けていない。勿論、生身の人間は飛行機などに乗らない限り飛ぶ事など出来ない。

今の映司は丸腰。つまりどうなるか？

「うぁーーーーー！」

映司は落下を始めた。

もう落ちるのは本日2回目である。

「こ、こんなの聞いてなーーーい！」

映司は某探偵事務所の女所長のようなセリフを叫ぶ。しかしその叫

びは虚しく大空に消える。

更に映司を追い討ちするかのごとく、悲劇が襲う。

「あーーー！明日のパンツがぁーーーーー！」

ポケットに入れておいたパンツが、ポケットから出てしまったのだ。しかもそれは、映司お気に入りの蝶柄パンツである。

そのまま蝶柄パンツはひらひら舞ながら、映司は反対方向に行ってしまった。

「そ、そんな・・・。俺の・・・明日が・・・。」

映司はとてつもない絶望感に襲われる。

そのまま映司は大地向かって落ちていく。その先に、ある一国の象徴である城があることを知らずに・・・・・。

ーーーーーーーー

ここは、フィリアンノ城にあるビスコッティ王立学術研究院。

現在研究院では、『召還した勇者の帰還方法』の調査の真っ最中である。

ビスコッティ周辺では、基本的に召還された勇者は元の世界に帰れないとされているのが一般的な考えである。

なのだが、ビスコッティの代表領主であり勇者を召還したミルヒオーレ姫と勇者シンクはこのことを知らなかった。

このことに責任を感じた王立学術研究院主席のリコッタは帰還方法の調査を名乗り出てたのだ。

そして現在にいたる。

ちなみに今、主席でありこの調査の責任者のリコッタは勇者シンクと別の用件で留守になっている。

だが、主席であるリコッタがいない中でも学院生が調査を続けているのだ。

「なかなか見つからないな・・・。」

学院生の1人が呟く。

「でも絶対見つけるぞ！」

学院生は気合いを入れ直す。

それから数分後。

「ねぇ～みんな。そろそろ休憩しない？」

違う学院生が他の学院生に呼びかける。

「そうだね。さっきから本棚に向かいっぱなしだしね。」

「喉乾いた～。」

「主席はいつ戻られるんだろう・・・。」

学院生たちが口々に呟き、休憩しようと中央のロビーに向かおうとした。

その時・・・

ズドーーーーン！！

何かが学院の屋根をぶち破って落下してきた。

辺りに煙りが充満する。

「な、なんだ！？」

「え！？一体なに！？」

「ゲホ、ゲホ。煙りが・・・。」

「うぅ・・・目が開けられない・・・。」

この事態に驚く学院生達。中には砂煙りを吸い咳き込む者や、目に砂埃入り目が開けられない者もいた。

「一体なに事だ！？」

扉が開きこの事態に気づいた数人の親衛隊の騎士が駆けつけてくる。

「どうした！？一体なにがあった！？」

騎士の１人が学院生に訪ねる。

「わ、分かりません。何かが学院の屋根を壊しｔ「おい！あれは何だ！」」

学院生が事情の説明を始めようとした時、別の騎士の１人が声をあげた。

そこは中央のロビーだった。

そして、ここにいる者全員が中央のロビーに注目した。

「なんだ・・・あれは？」

騎士の１人が呟いた。

そこには・・・

赤く光る物体があった。

騎士達は細心の注意をはらい、その物体に近く。

すると突然、物体を纏っていた赤い光がまるで鳥の翼のように開いた。

翼のように開いた赤いた光は、そのまま羽になり辺りに散らばる。

「うぁ～。綺麗～。」

学院生の1人が呟く。

「一体何が・・・・。」

騎士の1人が言った。騎士は落ちてきた羽を手にのせるが、羽は光となって消えた。誰もがその光景に見とれていると・・・

ドス！

辺りに鈍い音が響いた。

今の音で我にかえった騎士達は剣を持ち、光があった所に向かって構える。

そこにいたのは・・・

「痛ててててぇ・・・ん？」

不思議な格好をした・・・青年だった。

ーーーーーーーー

火野映司は現状を掴めずにいた。

不思議な空間から抜け出したと思ったら空中で、更に落下途中に明日のパンツを無くしてしまい散々な目にあった。

それがどうだろう。今は甲冑を着た男達に囲まれているではないか。おまけに剣が向けられている。

「あ、あの～・・・・。」

「動くな！」

映司は立ち上がり、とりあえず目の前の男に話しかけるが、見事にスルー。更には動くなと言われた。

「貴様、何者だ！何が目的だ！答えろ！」

「い、いや・・・何者と言われても・・・・。特に目的とかは無いし・・・・。」

男の質問に答える映司。何者かと言われてもなんと答えたらいいか分からない。目的も特に無い。映司は正直に答えるが・・・・。

「嘘をつくな！目的も無しに屋根をぶち破って空から落ちてくるやつが何処にいる！」

（いや・・・ここにいるけど。）

映司は思った。

（ん？まてよ？今この人は何て言った？空から落ちてきた？）

映司はそう言われやっと自分の現状が分かった。

おそらく、自分はパンツを無くした後この建物に落下してきたのだろう。

だがそこで疑問が。

（だとしたら、何で俺無傷なんだ？）

今自分は無傷である。普通あの高さから落ちたらひとたまりもないはずだ。

「いいから答えろ！一体貴様は何なんだ！突然赤い光を纏って落下してきて！」

さっきとは別の男の質問。

（赤い光？俺はそれのおかげで無傷だったのか？なるほど・・・納得。）

心の中で1人納得する。

ただし男達のイライラは高まる。

「早く答えろ！」

痺れを切らした男が剣を映司に向けて叫ぶ。

（まずいな・・・どうしよう。何か良い策は・・・。）

映司は思考をフル回転させる。その間にも男は剣を持って迫ってくる。

（・・・やってみるかな。）

映司は賭けに出た。

「・・・う！お腹が・・・急に。」

「！？、おい大丈夫か？」

映司は突然腹を押さえ痛がり始めた。

すると、突然の腹痛を心配したのか、さっきの男が近寄ってきた。

（・・・今だ！）

映司はとっさに立ち上がり、男に突進する。

「ぐほぉ！」

男は不意を突かれ、映司の突進を受けて倒れてしまう。

「ごめんなさい！」

映司は突進した相手に謝罪しながら扉に向かって走った。

「まて！」

何人かの男達が後を追うが、甲冑を着ているため、走りにくい。その分映司は身軽な為速く走れる。男達は映司の逃走を許してしまう。

「くそ！逃がした！」

「まて。ここは一度引こう。」

「何を言っている！やつは・・・。」

「今この装備では追いつくのは無理だ。それに人数も足りない。」

「うっ・・・確かに。」

映司を追いかけようとした男を別の男がなだめる。

「一旦騎士団詰め所に戻るぞ！そしてロラン騎士団長に報告だ！」

男達はこれからの方針を固め、学院を後にする。

「あ、学院生の皆さんは非難しておいて下さい。念のために。」

最後の１人が学院生にそう告げ学院を後にした。

火野映司とビスコッティ騎士団、両者による追いかけっこが今始まろうとしていた。

疑惑と逃走と初変身（前書き）

第5話です。

最後はなんかグダグダに・・・
終わり方も中途半端です。

疑惑と逃走と初変身

「よし。連絡完了っと。」

家族や親戚、知り合いなどの連絡が完了し携帯を閉じて一息つくシンク。

だがここでシンクは、背後から強烈な視線を感じた。

振り向くとそこには、目を輝かせている・・・リコッタがいた。

「えっと・・・何？」

「いや・・・勇者様の持っているその携帯、というのを調べさせて欲しいでありますよ～。」

どうやらシンクの携帯が気になるようだ。

「まぁ、良いけど・・・どうやって？」

「大丈夫であります！ちょっと分解して中の構造を見るだけでありますから！」

「ぶ、分解！？じょ、冗談じゃないよ！？この世界、保険適用されないんだから！」

「大丈夫でありますよ～。このリコッタ・エルマールが保証するのでありますから！さぁ！」

「ちょ！？まって！止めてよ！」

「ふっふっふ～無駄であります～。自分は未知の機械を見るとすごく調べたくなるでありますから！」

シンクとリコッタが携帯を巡って騒いでいる中、エクレールはそれを呆れたように見ていた。

「全く・・・リコはともかく、勇者は子供か？」

「ちょっ！そんな事言わないで助けてよ！」

シンクはエクレールに助けてを求める。

「まぁなんだ・・・頑張れ。」

「見捨てられたーーーーー！」

シンクの叫びがこだまする。

するとリコッタが・・・

「ところでエクレ、その右手に持っている布はなんでありますか？」

「ん？、あ～これか。これは・・・はぁ！」

とっさに右手を後ろに回し布を隠すエクレール。

「ん？エクレ、今何隠したの？」

「な、何だ勇者！お前のき、気にする物じゃな、ないぞ！」

「エクレ、明らかに動揺してない？」

「ど、動揺などしていない！」

「いや、してるでしょ。」

「してない！」

「いやだって・・・。」

「してないものはしｔ「取ったでありまーす！」あぁーーーーー！！」

エクレールがまるで、この世が終わりとばかりに叫ぶ。

リコッタはエクレールから奪った布をシンクに持って行く。

「はい♪勇者様♪」

リコッタに布を渡されるシンク。

「ありがとう。さてこの布の正体はと・・・え？」

「こ、これは！」

シンクとリコッタが驚愕の声を上げる中、エクレールはその場に体育座りをした。顔はうつむいている。

「これ・・・男性用の下着だよね。しかも下半身の。」

「エクレは・・・男性下着を集めるのが趣味だったでありますか！？」

するとエクレール。顔をばぁ！と上げ一言。

「そんなわけ無いだろ！！誰が男の下着など集めるか！！！！！」

「いや・・・だって・・・。」

「実際ここにあるでありますよ？」

シンクとエクレールは呟く。

「違う！それは空から降ってきたんだ！」

「・・・エクレ正直にはこう・・・楽になるよ。」

「そうでありますよエクレ。例えエクレにそんな趣味が合っても・・・自分はエクレの味方でありますよ。」

シンクとリコッタはエクレールに正直になれと促す。

「違うんだ・・・それは空から・・・。」

エクレールは今にも泣きそうな感じになる。

すると・・・

トゥルルル。
電話の着信音のような音が鳴る。
エクレールは周波増幅器に付いている受話器を取る。
「はいっ。こちらエクレール。」
さっきの表情が嘘のように消え、いつもの表情に戻る。
『エクレか？私だ。』
「兄上？どうかなされましたか？」
『あぁ。重要な要件だ。』
重要な要件という単語に反応したエクレールは表情を引き締める。
「それで、要件とは？」
『あぁ。すぐに勇者殿と主席を連れて騎士団詰め所に戻ってきてくれ。大至急だ。』
「何かあったのですか？」
すぐに戻ってきて欲しいと言われ、何か起こったと推測するエクレール
『そうだ。緊急事態だ。フィリアンノ城に侵入者が現れた。』

「侵入者！？」

侵入者と言われ驚くエクレール。

『数分前に学院の屋根を壊して侵入したようだ。幸い怪我人はいなかったが、今騎士団詰め所に捜査本部を設置して、捜索にあたっている。すぐに戻ってきて捜索に合流して欲しいのだ。』

「分かりました。すぐに戻ります。」

『頼んだぞ。』

「はっ！」

そうして受話器を置いた。

「エクレ・・・。」

シンクがエクレールを呼ぶ。

「何だ？」

エクレールも振り向く。そこにはさっきとは違い真面目な表情のシンクとリコッタがいた。

エクレールはシンク達に状況を説明する。

シンクとリコッタは侵入者の存在に驚く。

そして侵入者が学院の屋根を壊したと話すと、

「学院の屋根を！？みんなは無事なのでありますか！？」

「あぁ。幸い怪我人はいなかったらしい。」

「よ、よかった・・・であります。」

やはりリコッタは学院の話をすると、他の学院生の安否をきづかった。

「だとすると、急いで戻らないと。」

「当然だ。」

「もちろんであります！」

こうして3人は急いで騎士団詰め所へと戻っていった。

ーーーーーーーー

「待て！逃げるな！」

「観念しろ！侵入者！」

ここは、フィリアンノ城の中。今ここでは壮絶な追いかけっこが行われていた。

「あ～もう！しつこいな！」

武装した騎士達から逃げる映司はうんざりしていた。
かれこれもう数十分こうして追われている。
（何とかして振り切らないと・・・。）
映司は走りながら、追っ手を振り切る方法を考える。
すると目の前に、通路が右、真っ直ぐ、左に別れている。
（どうしよう。どれに行けば・・・）
映司は迷うが、
（ん？あれは・・・よしこれでいこう。）
映司は右に曲がる。
「右か！」
「逃がさん！」
騎士達も映司を追い右に曲がる。が・・・
「何、どこに消えた！？」
そこに映司の姿はなかった。
「とりあえずこの先に進もう。」

「そうだな。今度会ったら絶対捕まえる！」

騎士達はそう呟き、そこから立ち去って行った。

すると・・・

ガタ、

「ふぅ～、何とかやり過ごしたかな。」

置いてあった樽から映司が出てきた。

実はあの時、右の通路に樽を見つけた映司は、賭けで右に曲がり樽の中に入ったのだ。

「でも、樽の蓋開いててよかった。」

正直開いてなかったら捕まっていただろうと考える。

「とりあえず移動しよう。」

映司は再び移動を始めた。

場所は変わり、騎士団詰め所。現在ここは、侵入者捜査の拠点となっている。

そして今この侵入者捜索を指揮しているのは、ビスコッティ騎士団騎士団長ロラン・マルティノッジ、つまりエクレールの兄である。

「どうだ？侵入者はいたか？」

「駄目ですね。見つけたとしても振り切られてしまってます。」

「そうか・・・。」

どうやら侵入者はかなりのやり手のようであり、騎士達の追跡を交わし続けている。

「手強いな・・・。」

まさかここまで苦戦するとは思っていなかったため、ロランはまいってしまっている。

すると、

コンコン。

ドアを叩く音した。

「良いぞ、入ってくれ。」

「失礼します。」

入って来たのはロラン待望の人物だった。

「エクレ、よく戻ってきた。早かったな。」

「はい。緊急事態ですから。」

入って来たのは妹のエクレールだった。実はあそこからかなり飛ば

してきたのだ。

「主席と勇者殿は？」

「リコは避難している学院生の元に、勇者はそれに付き添って行きました。」

「そうか・・・。分かった。」

「兄上、現状は？」

エクレールは今どのような状況か質問する。

「騎士達が捜索しているが・・・思った以上に難航している。」

「分かりました。私も行きます。」

「頼んだぞ。エクレ。」

「了解。」

状況を把握したエクレールは映司捜索の為、ロランのいる部屋から出て行き、映司がいるフィリアンノ城に向かった。

場所は再びフィリアンノ城。

騎士達の捜索は今も続いている。

「はぁ・・・何時まで続くんだろう・・・これ。」

映司はため息をつく。

はっきり言ってもう止めにしてほしい位である。

映司は追っ手から次々と逃れ、通路を歩き続けている。止まれば見つかりやすくなる。そう思い映司は歩き続ける。すると開けた場所にでた。そこは庭園のような場所だった。

「うぁ～綺麗だな・・・。」

その庭園はとても整備されており、花も綺麗に咲き誇っている。噴水もあり水が絶え間なく出ている。

この光景は、明日のパンツを失った映司の心を癒やしていった。

が、それは長くは続かなかった。

「見つけたぞ！お前が侵入者だな？」

映司は思わず振り返った。先ほどまで自分を捜索していたのは男のはずだ。

なのに今聞こえたのは男の声ではなかった。

「お、女の子？」

「女の子で何が悪い。」

そう、女の子だ。

緑色の髪の少女だ。

映司は緑色の髪の少女、エクレールの出現に動揺する。

「何で女の子が・・・」

「それは、私も騎士だからだ。今の私の任務は侵入者であるお前を拘束することにある。多少の損傷はしょうがないが、ここでお前を捕まえる！」

エクレールは背中の鞘から2本の短剣を取り出す。右手で普通に持ち、左手は逆手持ちにする。

「・・・行くぞ！」

エクレールはそのまま映司に向かって走り切りかかる。

映司はそれをギリギリで回避する。

エクレールはすぐさま次の動作に入り、映司を追撃する。

映司は追撃を受けるも、それもかろうじて回避する。

「ちょこまかと！」

エクレールは更に攻撃を仕掛ける。

映司はそれさえもよける。

（く・・・早く何とかしないと！）

焦る映司をよそに、エクレールの攻撃は止まらない。

「ぐぁ！」

エクレールの剣による攻撃をよけ続けた映司だっが、ついに不意打ちの蹴りをくらい、後ろに転がりながら倒れる。その時、映司のポケットから何かが飛び出したが２人は気づかない。

「・・・観念しろ。」

エクレールが剣を構えながら近づいてくる。

（くそ・・・どうすれば・・・。）

映司は後ずさりながら思考をフル回転させている時だった。

カチ。

何かが映司の右手に当たった。
本来なら石か何かだろうと思い気にしないが、映司は右手に当たった物を手に取った。

それは・・・赤いメダルだった。

（これって・・・まさか・・・。）

映司はその後ろを見る。

そこには、自分の拾った赤いメダルと同じような赤いメダルが２枚落ちていた。

（・・・やるしかない。）

映司は早速行動に移した。

急いで後ろに向かって走り、残り2枚を回収し、エクレールと対峙する。

そして、映司は懐からオーズドライバーを取り出し、腰に装着する。

オーズドライバーが腰に装着されると、映司はさっき回収した3枚の赤いメダルを左から1枚ずつ入れていく。

（こいつは一体何をしてるんだ？）

エクレールには何をしているかさっぱり分からない。

映司は全てのメダルを装填を終える。

そしてメダルが装填されている部分を斜めにし、オースキャナーを持つ。

辺りに電子音が響き渡る。

そしてオースキャナーを使い装填されたメダルをスキャンした。

「・・・変身！」

《タカ！クジャク！コンドル！　タ～～ジャ～～ドル～～～！！！》

すると映司の身体の周り、頭、胴体、脚にそれぞれ5色（赤、青、黄、緑、灰）の動物が書かれた円形エフェクトが回転しながら現れる。

そして、その中赤い円形エフェクトに書かれているタカ、クジャク、コンドルが一つになり、映司に合わさる。

次の瞬間映司は一瞬にして赤を基調とした戦士に変わったのだった。

・　・　・　・　・

戦闘とけものだまと不完全な姿（前書き）

第６話です。

皆さんに質問なんですが、この作品のＯＰは、
オーズのＡｎｙｔｈｉｎｇ Ｇｏｅｓ！
ＤＯＧ ＤＡＹＳのＳｃａｒｌｅｔ Ｋｎｉｇｈｔ
どっちが良いと思いますか？

戦闘とけものだまと不完全な姿

フィリアンノ城内のある庭園。

ここに2人の人物が向かい合いながら対峙している。

1人はビスコッティ騎士団親衛隊隊長、エクレール・マルティノッジ。

そしてもう1人は、全身に赤い鎧を身につけ、ちょっとのお金と明日のパンツさえあれば良いという旅人、火野映司。

またの名を・・・

仮面ライダーオーズ。

（姿が変わった？）

エクレールは表情には出していないが、心の中では驚いていた。

（変身とか言ってたな・・・まぁ、奴がどんな姿になろうと私の目的は変わらない。）

エクレールは考えるのを止め、再び剣を構えた。

一方で、オーズのタジャドルコンボとなった映司は違和感を覚えていた。

（何だろ・・・この感じ。何時もと違う気がする・・・。）

何時ものと違う。映司は思った。

何時もなら物凄い力が体の中に溜まってくる感じがしたが、今回はあまり感じなかった。

タジャドルコンボになったと言うよりも、この感じはタトバコンボに近かった。

「来ないのならこちらから行くぞ！」

痺れを切らしたエクレールが一気にオーズに近づく。

「てぇ、うぉ！」

オーズは右に転がりこれを回避する。

エクレールは攻撃を回避されるが、すぐに体勢を立て直す。

「はぁ！」

エクレールが再びオーズに攻撃を仕掛ける。

「くっ！」

オーズはこの攻撃を防ぐべく、左腕を前に突き出す。

すると、胸のオーラングルサークルが輝き、タジャスピナーが現れる。

タジャスピナーはオーズの左腕に装着され、そのままエクレールの剣による攻撃を防ぐ。

2本の短剣とタジャスピナーから火花が飛び散る。

「何っ！」

「せいやぁ！」

オーズはエクレールを振り払う。

そのまま振り払ったエクレールにタジャスピナーから火炎弾を発射する。

エクレールは火炎弾をギリギリで回避する。

（何だ、あの盾は。突然現れて私の攻撃を防いだだけじゃなく火炎弾も出せるのか！？）

エクレールはオーズの持つ盾、タジャスピナーに驚愕する。

（それだけじゃない。あの盾・・・かなりの強度だぞ！？それにあの火炎弾は紋章砲じゃない・・・一体何なんだ？）

エクレールは一度しかタジャスピナーに攻撃していないが、タジャスピナーには相当な強度があると直感した。

（だが・・・ここで私がやらねば！）

エクレールは未知の敵、オーズとの戦いに気を引き締めるのだった。

（危なかった・・・でもあの子、本気だ。こっちも気を引き締めないと。）

オーズはエクレールが本気で戦いにきているのに気づき、こちらも気を引き締める。

しばし沈黙が辺りを支配する。

「「はぁ！」」

オーズとエクレールは、ほぼ同時に動いた。

エクレールは2本の短剣を駆使し攻撃する。

オーズはタジャスピナーを使い短剣による連続攻撃を防ぐ。

「でりゃ！」

「ぐがぁ！」

タジャスピナーで連続攻撃を防いでいたオーズはコンドルレッグに装備された、ストライカーネイルを使い回し蹴りを放つ。

エクレールはもろにそれをくらってしまいダメージを受け、地面を転がる。

オーズはエクレールを追撃しようする。

だが、その時たまたま噴水の水に映った自分を見てオーズは・・・

「え・・・嘘！？どういう事！？」

驚いてしまった。

何故なら、

本来タジャドルコンボならタカヘッドはタカヘッド・ブレイブだが、現在の姿でのタカヘッドは普通の状態だった。

それだけではない。

胸にあるオーラングルサークルに描かれている図柄も違っていた。

本来なら不死鳥が描かれているはずだが、今のオーラングルサークルにはタカ、クジャク、コンドルが他のコンボ同様に別々に描かれていた。

「そんな・・・こんな事って・・・。」

まさかの姿に困惑するオーズ。

「隙あり！」

「ぐぁあ！」

困惑するオーズをエクレールは見逃すはずはない。そのままオーズに攻撃した。

オーズは2本の短剣による斬撃をタジャスピナーでガードすることができず、斬撃を浴び、膝を地につけてしまう。

「トドメだ！」

エクレールが再びオーズに攻撃を仕掛ける。

「こんな所で・・・やられてたまるかーーーーー！」

「！？っ」

オーズはタジャスピナーを構え、火炎弾ではなく火炎放射を放つ。

エクレールは突然の火炎放射に怯み、後退する。

「まだ動けたのか・・・。」

「こんな所でやられたら、仲間との約束が果たせないからね。負けるわけにはいかない！」

「仲間との・・・約束？」

エクレールはオーズの言い放った、“仲間との約束”という言葉に反応する。

「まて、それｈ「隊長！ご無事で！？」なぁ！お前達！？」

“仲間との約束”の意味を聞き出そうとしたエクレールだが、運悪く騎士達の増援がやって来る。

「隊長、後は我々に任せて下さい！「まて、今は・・・」全員突撃！」

エクレールは騎士達を制止させようとするが、騎士の１人であるエミリオの指示で騎士達はオーズに攻撃を開始する。

「増援か！こんな時に！」

オーズは増援の騎士達と戦闘を始める。

次々と攻撃を仕掛けてくる騎士達。

オーズはタジャスピナーとストライカーネイルを駆使し、これに対処する。

「あ～もう！しつこい！」

オーズは火炎放射を放ち騎士達と間合いをとる。

「行くぞみんな！」

「「「「「「おぉーーーーー！！！」」」」」」

騎士達が一つになりオーズに迫る。

「くっ！こうなったら！」

オーズはオースキャナーを手に取り、オーズドライバーにセットされた3枚のコアメダルを再度スキャンする。

《スキャニングチャージ！》

メダルを再度スキャンすると、コンドルレッグに装備された、ストライカーネイルを炎が纏う。

「はぁぁぁぁぁ・・・」

騎士達とオーズの距離がどんどん狭まる。

そして。

「せいやぁぁぁぁぁぁ！」

「「「「「「ぐわぁぁぁぁぁぁぁ！」」」」」」

オーズは炎を纏った回し蹴り、プロミネンススパイクを放つ。

プロミネンススパイクを受けた騎士達は大爆発を起こした。

「・・・はぁっ！し、しまった！」

この時オーズははっとした。

いくら武装しているとはいえ、相手は普通の人間である。

普通の人間がオーズのスキャニングチャージを受けて生きているはずがない。

「お、俺・・・人を・・・。」

殺した・・・。と言おうとした時だった。

煙がなくなり、オーズは煙があった場所を見る。

「えっ・・・何あれ？」

オーズはてっきり、騎士達の死体が転がっているかと思ったが、あったのは死体ではなく・・・犬のような玉だった。

「なんだお前・・・けものだまを知らないのか？」

「け、けものだま？」

オーズはこちらに向かって歩いてくるエクレールの言葉に首を傾けた。

「この場所ではフロニャ力が働いている。例え倒されても死にはしない。」

「そ、そうなんだ・・・良かった・・・。」

よく意味は分からなかったが、死んでいない事にオーズは安心した。

「今まで戦ってきて思った。お前は強い。はっきりいって今、我々の騎士団に欲しいくらいだ。」

「それは・・・。」

「だが、今はまだ敵同士だ。今ここで・・・決着をつける！」

エクレールは2本の短剣を構える。

「・・・分かった。決着を着けよう。」

人が死なない事が分かったオーズは、エクレールの期待に答えるべく、タジャスピナーを構える。

オーズ（火野映司）ＶＳエクレール

決着を着けるべく第2戦目が始まる。

紋章と決着とパンツの持ち主（修正版）（前書き）

第7話の修正版です。

紋章と決着とパンツの持ち主（修正版）

騎士団詰め所。

現在は侵入者捜索の拠点である。

「エクレール隊長は大丈夫でしょうか・・・。」

「大丈夫だ。エクレならきっと何とかしてくれる。」

1人の騎士の心配事を、騎士団騎士団長であるロランがまるで安心させるように言う。

「しかし・・・先ほどの報告では、侵入者は突然姿を変えただけではなく、数十人の騎士達を一瞬で倒しています。隊長が勝てるかどうか・・・。」

騎士が言うように、侵入者は突然姿を変え、さらに数十人の騎士達を一瞬で倒してしまっている。

「今はエクレを信じるしかない。」

今実際、エクレールを1番心配しているのは兄であるロランである。

それは騎士団の皆が分かっている事である。

だが、ロランはエクレールと兄妹だからこそ信頼し、きっと侵入者

を捕まえてくれると信じていた。

（・・・頼んだぞ、エクレ。）

ロランは心の中で妹の事を思うのだった。

ーーーーーーー

フィリアンノ城に張り詰めた緊張感が流れる。

「行くぞ！」

エクレールがオーズに向かって斬りかかる。

「何の！」

オーズはこれを、タジャスピナーでガードする。

「っ！やるな！」

「君だって！」

互いの武器から火花が散る。

エクレールは一旦オーズから離れ、間合いを取る。そして、もう一度斬りかかる。

「はぁ！」

「せい！」

オーズはエクレールの2本のダガーに対し、タジャスピナーではなく、コンドルレッグのストライカーネイルで対抗する。

ダガーとストライカーネイルが音をたてぶつかる。

「久し振りだ！こんなに楽しい戦（いくさ）は！」

「こっちはあまり楽しくないけどね！」

オーズはストライカーネイルでエクレールのダガーをはじく。

そして、タジャスピナーから火炎弾を発射しエクレールを攻撃する。

「くっ。」

エクレールは火炎弾を避けるが、一発が肩にかすってしまう。かすった部分は一瞬で焼け焦げ、肌が露出する。

「このっ！」

エクレールは接近して攻撃したいが、オーズのタジャスピナーによる火炎弾によって接近できない。

「よし。このまま・・・。」

「あまり調子に乗るな！」

「てぇ、嘘！？」

タジャスピナーによる火炎弾でこのまま押し切ろうとしたオーズだったが、ここで思わぬ事態が。

何と、エクレールが2本のダガーで火炎弾を斬りつけながら接近してきたのだ。

思わぬ事態にオーズは怯んでしまう。

「はぁ！」

「ぐはぁ！」

エクレールの接近を許してしまったオーズは、そのままエクレールの一撃を受け膝を地に着ける。

「これで！」

「っ！まだだ！」

エクレールは再びダガーを振るうが、オーズも負けじとその場で回し蹴りを放つ。

ダガーはストライカーネイルにより弾かれる。

ダガーを弾かれたエクレールは後ろに後退し、再びダガーを構える。

オーズもすぐに立ち上がり、タジャスピナーを構える。

「やはり、そうそう勝ちは譲ってくれないか・・・。」

「悪いけど、こっちにも譲れないものがあるからね・・・。」

「“仲間との約束”か？」

「そうだね。その為にも・・・ここで負けるわけにはいかない！」

「ならばこちらも・・・ビスコッティ騎士団親衛隊隊長の名にかけて・・・お前を倒す！」

エクレールは再びオーズに向かって斬りかかる。

オーズはそれをタジャスピナーでガードし、右手でエクレールの左腕を掴む。

「このぉ！」

「うわぁ！」

オーズはエクレールをタジャスピナーから引き剥がし、右に向かって投げ飛ばす。

エクレールはそのまま、地面を転がる。

「はぁぁぁぁ・・・」

オーズはタジャスピナーを構え、力を込める。

「このっ！」

エクレールは再びオーズに向かう。

そしてオーズの目の前にきた時。

「はぁあ！」

「！？っ」

オーズは力を込め、炎を纏ったタジャスピナーでエクレールを殴りつける。

エクレールはとっさの判断で2本のダガーを身体の前でクロスさせ、タジャスピナーをガードする。

だが、それでも凄まじい衝撃が走り、エクレールは後ろに向かって吹き飛ばされる。

「はぁ・・・はぁ・・・。」

エクレールの息が上がる。

「防がれた！？」

オーズは今の一撃を防がれた事に驚く。

（驚いたな、今の一撃をとっさに防御するなんて・・・やっぱり、その何とか騎士団の親衛隊の隊長をやってるだけあるな・・・。）

オーズは心の中でエクレールを賞賛する。

（今の一撃・・・まともに受けたら一溜まりもなかった。それに、そろそろ決めないとこちらが危ういな・・・。）

エクレールはオーズの一撃に驚愕しながら、そろそろ決めなければと思う。

エクレールは再びダガーを構える。

すると、エクレールの背後に巨大な紋章が現れる。

「な、何だ！？あの紋章！？」

オーズは驚きの声を上げる。

「もう後がないからな・・・私の得意技で行かせてもらう！」

エクレールは自身の得意技に全てをかける。

「・・・そっか。なら・・・俺だって！」

オーズも、そのエクレールの思いに答えるべく、タジャスピナーを自身の身体の前で構え、オースキャナーを右手で持つ。

「烈風・・・」

エクレールのダガーにエネルギーが集まる。

《ギン！ギン！ギン！ギン！ギン！ギン！ギン！・・・ギガスキャン！》

オーズは、オースキャナーでタジャスピナーの中にあるセルメダル7枚をスキャンしギガスキャンを発動させる。

タジャスピナーにセルメダルのエネルギー弾が精製される。

しばし、沈黙が辺りを支配する。

・

・

・

・

・

「十文字ぃっ！！」

「せいやぁぁぁぁぁ！！」

エクレールは、紋章砲である烈風十文字を。オーズは、ギガスキャンにより精製されたエネルギー弾を放った。

烈風十文字とエネルギー弾は、オーズとエクレールのちょうど中間でぶつかる。

「この・・・！」

「くぅ・・・！」

両者とも引く気は無い。

そして・・・

その時は来る。

バキン！

凄まじい音と共に・・・烈風十文字は圧殺される。

「何っ！」

「せいやぁぁぁぁ！」

エクレールは烈風十文字が敗れたことに驚き、オーズは更に力を込めた。

そのまま、烈風十文字を圧殺したエネルギー弾がエクレールに迫る。

「くっ！」

エクレールはダガーをクロスし、防御体勢になる。

が、

「ぐわぁぁぁぁぁ！」

ダガーがそれに耐えきれず、エクレールは吹き飛び、壁に叩きつけられた。

「はぁ・・・はぁ・・・やったか？」

オーズはエクレールを確認する為、壁に叩きつけられたエクレール

に近づく。

「・・・・・・私の負けだ・・・」

エクレールは近づいてきたオーズにそう言った。

どうやらダガーでガードした分ダメージは軽減されたようだ。

たが、それでもダメージは大きくこれ以上戦うのは不可能だった。

「ふ・・・やはり・・・お前は強いな。」

「いや、そんな事は・・・君も強かったよ。」

「そうか・・・だが、戦ってて分かって事がある。」

「分かった事?」

「あぁ・・・、お前、その力が本来の力ではないんだろ?」

「え・・・?」

オーズは驚いた。確かに今この力は不完全だ。

だが、オーズと今回初めて戦った者がそれに気づいたのはオーズ、否火野映司にとっては驚きだった。

「ふ・・・図星か。おそらく、私のように普通の人と戦う事が初めてで心に迷いを生んだんだろうな・・・。」

「心の・・・迷いか・・・」

確かにそうかもしれないとオーズは思った。

今まで数多くのヤミーと戦ってきたが、普通の人と戦うのは初めてだった。

その事で心に迷いが生まれ、力が十分に発揮できなかったんだとオーズは思った。

「まぁ・・・そう言う事だ・・・ぐっ！」

「大丈夫？・・・ん？」

エクレールはそう言い立ち上がろうとするが、ダメージが残っていた為か、壁に寄りかかる。

オーズはそれを心配したが、ある物が目に入った。

それは、エクレールのすぐそばに落ちていた・・・布だった。

「これは？」

「！？っ、ま、待ってくれ！それは！」

エクレールが焦り始める。

そんな事を知らないオーズは、そのまま落ちていた布を拾った。

「こ、これ・・・！」

「・・・終わった。何もかも・・・。」

エクレールはそう思った。

だが・・・

「これ・・・俺のパンツだ！」

「そう、お前の・・・って、何っ！？」

エクレールは更に驚く。

「ま、待て、そのパンツはお前のなのか！？」

「そうだよ！間違いない！これは俺が無くした明日のパンツだよ！」

無くしたパンツを見つけ、まるで子供のような歓喜の声を挙げるオーズ。

それに対し、エクレールはポカンとしていた。

「いや～良かった！一時はどうなるかと思った！」

「そうか・・・それは良かったな・・・」

エクレールは何だか、ばかばかしく思えてきた。自分はこんな奴と戦っていたのかと・・・。

「ねぇ？」

「・・・何だ？」

オーズがエクレールに質問する。

「もしかしてさ・・・パンツを保護してくれたのは君？」

「あぁ・・・そうだが。」

エクレールがそう答えると・・・

「いや～本当にパンツを保護してくれてありがとう！あ、そうだ！」

オーズはオーズドライバーを水平し、変身を解除する。

そして、オーズではなく元の火野映司に戻る。

「何か、ずっと変身した状態で喋ってたね。ごめんごめん。」

映司はエクレールに謝罪する。

「別に気にする事では・・・っ。」

「てぇ、大丈夫？」

エクレールは歩こうとしたがふらつき、慌てて映司がそれを支える。

「・・・すまない。」

「いいって。」

映司に支えられたエクレールが謝罪するが、映司は気にしない。

「・・・そうだ！」

「何だ？」

「そういえば名前教えてなかったね。俺は火野映司。君は？」

「・・・・・・」

エクレールは答えるか迷ったが。

「・・・エクレールだ。エクレール・マルティノッジ。」

「へぇ～エクレちゃんか。いい名前だね。」

「あ、ありがとう・・・／／／。」

自分の名前を誉められ照れるエクレール。

すると、

突然映司は背を向け、身体をしゃがめた。

「何をしている？」

「いや～、エクレちゃん怪我してるでしょ？おぶって行こうと思って。」

「別にいい。それに今お前は侵入者扱いだぞ。詰め所に行けば捕まるんだが・・・。」

エクレールは拒否するが、

「別にいいよ。俺が逃げちゃったのもあるし。投降するよ。」

「しかしだな・・・」

「それに、エクレちゃんは俺のパンツを保護してくれたからね。それの恩も返したいからさあ。ねぇ？」

「・・・分かった。好きにしろ。」

遂にエクレールが折れる。

そのままエクレールは映司に背負われる。

「で、その詰め所ってどこ？」

「あっちだ。」

エクレールの指示で映司は騎士団詰め所がある方向へと歩いて行った。

エクレールが拾った、映司の明日のパンツと共に。

タジャドルコンボ不完全態　説明（前書き）

タイトルのとうり、タジャドルコンボ不完全態の説明です。

タジャドルコンボ不完全態　説明

タジャドルコンボ不完全態

スペック
身長：１９４ｃｍ
体重：８７ｋｇ
パンチ力：５．５ｔ
キック力：１３ｔ
ジャンプ力：１５５ｍ
走力：４．５ｓ／１００ｍ

構成メダル
ヘッド：タカ
ボディ：クジャク
レッグ：コンドル

使用武器
タジャスピナー

変身者
火野映司

火野映司が、地球とフロニャルドの間にある不思議な空間で手に入れた、タカ、クジャク、コンドルを使い変身した姿。

本来ならば、通常のタジャドルコンボになるはずだが、ビスコッテ

ィ騎士団親衛隊隊長であるエクレール・マルティノッジ戦ではこの不完全態になった。

火野映司の、武装しているとはいえ普通の人にオーズの力を使って良いのか？という心の迷いにより生まれた形態。

スペック的には、オーズの基本コンボであるタトバコンボと本来のタジャドルコンボの中間のスペックを持つ。

タジャドルコンボとの外見的な違いは、
タカヘッドがタカヘッド・ブレイブではなく、通常のタカヘッド。
胸にあるオーラングルサークルに描かれている図柄が、タジャドルコンボ特有の不死鳥ではなく他のコンボ同様タカ、クジャク、コンドルが別々に描かれているという点が上げられる。

能力は限定されており、
クジャクウイングによる飛行の不可。
クジャクの尾羽を模した羽手裏剣、クジャクフェザーの使用不可などである。

必殺技
プロミネンススパイク。（スキャニングチャージ）
タジャドルコンボ不完全態の必殺技。コンドルレッグのストライカーネイルに炎を纏わせ、回し蹴りを放つ。威力はプロミネンスドロップに劣るが、広範囲を攻撃できる。
威力は６０ｔ

セルメダルエネルギー弾。（セルメダル７枚によるギガスキャン）
タジャスピナーによるギガスキャン。基本は通常のタジャドルコンボ時と同じ。

説明と気迫とビスコッティ騎士団（修正版）（前書き）

第８話の修正版です。

説明と気迫とビスコッティ騎士団（修正版）

現在、映司はエクレを背負い騎士団詰め所に向かっていた。

先の戦いで映司は勝利こそしたが、パンツをエクレが保護していた為恩返しのつもりで、未だ戦いのダメージがぬけないエクレを背負い騎士団詰め所に向かっているのだ。ちなみに映司は投降する予定である。

「ところでさ・・・エクレちゃん。」

「何だ？」

映司に背負われているエクレが映司に呼ばれた為返事を返す。

「ずっと気になってたんだけど・・・。」

「あぁ。」

「・・・何でコスプレなんてしてるの？」

「・・・はぁ？」

「いやだってさ、その耳とか尻尾ってコスプレの一種でしょ？さっきの騎士の人達もしてたけど・・・もしかして流行ってるの？」

映司の問いに唖然とするエクレ。とりあえず質問に答える事に。

「いや、この耳と尻尾は我々の身体の一部だ。ちゃんと血液だって流れている。尻尾だって自分で意識すれば動かせるが・・・。」

「・・・本当に？」

「あぁ、本当だ。」

今度は映司が唖然とする。

「どうした？」

エクレが映司に訪ねる。

「いや・・・何でもない。」

映司はとりあえず落ち着こうとして、深呼吸した。

そして、次の話題に移る。

「そういえば、このお城綺麗だよね。こんなに綺麗なお城見たの初めてだよ！」

「そうだろ。何せフィリアンノ城だからな。」

「へぇ～フィリアンノ城って言うのか・・・。」

映司がフィリアンノ城に感心していると

「そういえば・・・えっと・・・。」

「映司で良いよ。」

「分かった。それで、映司はどこから来たんだ？耳と尻尾は見当たらないし、あまり見られない服装をしているが・・・。」

「あぁ、そうだね。俺は日本から来たんだよ。」

映司は日本から来たと言った。

「ちょっとまて、今何て言った？」

「ん？いや日本って言ったけど。なんで？」

エクレは日本と言う言葉に嫌な予感がした。

「映司、一つ聞いていいか？」

「別に良いよ。答えられる範囲内ならだけど。」

「分かっている。映司は“何という世界”から来た？」

エクレの質問に映司は、

「えっと・・・それはどういう意味？」

「とりあえず自分の住んでいる星の名前を言ってくれ。」

「え？それなら“地球”だけど・・・。」

「やっぱり・・・。」

エクレの中で何かが確信に変わる。
そして、真実を伝えるべく喋りだした。

「・・・映司、良く聞いてくれ。」

「うん。」

「まず、ここは“地球”という場所じゃない。」

「うん・・・へぇ？」

映司がポカンとする。

「ここは“フロニャルド”と言う“地球”とは違う世界だ。つまり、“地球”から見たらここは別の世界、異世界だ。」

「えっと・・・つまり、今俺は異世界にいるって事？」

「・・・そういう事になる。現にこの世界には、私のように耳と尻尾を持っている人しかいない。そして何より“フロニャ力”がある。」

エクレの発言に映司は・・・

「ははぁ・・・また冗談を・・・」

完全に頭が着いて行けてなかった。

「真実だ。どうやってフロニャルドに来たかはしらないが・・・・。」

エクレとどめの一撃。
そして、映司は・・・・

「てぇ・・・嘘おおおおおおおおおおおおおおおお！？」

頭がようやく追いつき、エクレの言葉を理解し絶叫した。

ーーーーーーー

場所は変わり、騎士団詰め所。

「・・・遅いですねぇ隊長。」

「あぁ・・・・。」

詰め所の外で2人の騎士が会話をしている。

彼らはエクレが指揮する親衛隊のメンバーである。未だ帰らない自分達の隊長を心配していた。

「もしかして・・・やれちゃったのかな・・・・。」

「ばかか！隊長がやられるわけないだろ！」

「だと良いんだけど・・・。」
「ん？・・・おい！あれ！」
騎士達が会話をしていると、別の騎士が叫んだ。
「どうした？」
1人が叫んだ騎士の先を見ると・・・
「なぁっ！あれは！・・・侵入者！？」
この言葉に反応した騎士達が集まってくる。
「侵入者だって！？」
「あぁ！間違いない！」
その場が騒がしくなる。
「俺、ロラン団長に報告してくる！」
「・・・いや！ちょっとまて！」
ロランに報告に向かおうとした騎士を、別の騎士が止める。
「何故止める！」
「侵入者のやつ・・・何か背負ってるぞ？」

別の騎士が何かを背負っているのを見つける。

「背負っている？一体何を？」

「ここからでは分かりにくい。双眼鏡を貸してくれ！」

双眼鏡を要求し、それを使い侵入者を見る。

そして、騎士達は驚愕した。

「なぁっ・・・あれは・・・隊長！？」

「な、何だって！？」

「本当か！」

騎士達が見たのは、侵入者に背負われている・・・自分達の隊長であるエクレであった。

「全員、臨戦態勢！隊長が敵に捕らわれている！これより隊長を奪回する！」

その言葉を聞いた騎士達は自分達の隊長を奪回すべく臨戦態勢に入った。

・・・・・

「あれかな?騎士団詰め所って所。」

映司はようやく、エクレが言っていた騎士団詰め所にたどり着いていた。

そのエクレは戦闘で疲れていたのか今はぐっすりと寝ていた。

「騎士って言っても、やっぱり女の子なんだな・・・」

映司はエクレが女の子である事を再認識する。

(さっきは驚いたな・・・まさかここが異世界だなんて。)

映司は、先ほどの事を思い出していた。

確かに始めは驚いたが、これも旅の延長線と考える事にし、これを受け入れた。

「さぁ、後ちょっとだ。」

映司は騎士団詰め所に足を踏み入れた。

しばらく歩いていると、やはり予想していた事が起こった。

「止まれ!侵入者!」

「隊長を解放しろ!」

騎士達が槍を構え映司を取り囲む。

「すいません。医務室はどこですか？」

映司は騎士の1人に聞くが・・・

「止まれ！医務室だと？そこに何の用がある！」

当然スルーされる。しかし映司は、

「もう一度聞きます。医務室はどこですか？この子を連れて行きたいんだけど。」

「黙れ！大人しく隊長を解放しろ！」

それでも取り合ってもらえない。

だが、映司は・・・

「大人しく医務室を教えて下さい。俺はこの子に怪我をさせてしまった。だから俺はこの子を医務室まで連れて行く責任があります。投降もします。だから・・・そこをどいて下さい。」

映司の強気な発言、鋭い目つきに騎士達は後すざる。

ここにいる騎士全員が映司の気迫に押されていた。

その時、

「全員、武器を収めろ。」

「き、騎士団長？」

騎士達は驚き、急いで武器を収める。

「・・・。」

映司は騎士達の奥にいる男・・・ロランを静かに見る。

ロランは口を開く。

「・・・君が例の侵入者かい？エクレをどうするつもりだい？」

ロランの問いに映司は、

「先ほども騎士の皆さんにも言いました。俺はこの子を医務室に運びたいだけです。」

「その答えに、偽りはないな？」「ありません。」

映司はきっぱりと言い切る。

「・・・分かった。君は嘘をついてはいないようだな。着いてきくれ。」

「はい。」

「ちょ、ちょっと待って下さい騎士団長！この男を信用するんですか！？」

騎士の1人が異義を立てる。

「彼は嘘を言ってはいないさ。それに悪い侵入者がエクレを怪我をさせてしまったからと言って敵の拠点まで背負ってくるかい？」

「そ、それは・・・」

「それに、彼の眼は嘘をついている眼ではないよ。」

「・・・」

遂に、騎士は黙り込む。

「待たせたようだね。」

「いえ。」

「自己紹介がまだだったね。私はビスコッティ騎士団騎士団長のロラン・マルティノッジだ。」

「俺は火野映司と言います。マルティノッジってまさか・・・。」

「あぁ、君が背負っているエクレール・マルティノッジの兄だ。」

「そうですか。エクレちゃんの・・・。」

映司は納得する。

「さぁ、遅くなったな。医務室に案内するよ。」

「分かりました。」

歩き出したロランに着いて行く映司。

そのまま2人はエクレを連れて医務室に向かった。

また、映司にとっては、まともに話ができる人が現れた瞬間でもあった。

出会いと聴取と晴れる疑惑（修正版）（前書き）

第９話の修正版です

久しぶりにミルヒ登場です。

出会いと聴取と晴れる疑惑（修正版）

「それで、君は“地球にある日本”から来たと。」

「はい。そうです。」

現在、騎士団詰め所の一室では騎士団長であるロランと映司がテーブルを挟み、話し合いをしていた。

話し合いと言っても、ロランによる侵入者だった映司への事情聴取だが。

ちなみに、映司はロランの妹であるエクレを背負っていたが、先ほど医務室にエクレを預けたので今はいない。

「そうか。ではここが“君がいた世界ではない異世界”というのは認知しているかな？」

「はい。エクレちゃんを背負っている時に彼女から聞きました。」

映司はエクレを背負っている時に、この世界の事を大まかに説明して貰っている。そのため、ここが自分のいた地球ではなく、異世界“フロニャルド”であることは認知していた。

「そのわりには、だいぶ落ち着いているね？」

「はい。俺は地球では旅をしていたんですよ。最初は驚きましたけど、今はこれも旅の延長線と考えています。」

映司は自分の考えを口にする。

「それなら大丈夫そうで何よりだ。」

ロランは安心したという顔をする。

「だが、これだけははっきりさせて欲しい。」

「？」

「君は我々の“敵”ではないんだよね？」

「はい。誓ってでも。」

ロランの問いに、映司ははっきりと答えた。

「うむ。では最後に聞きたい事がある。いいかな？」

「何ですか？」

「君は、一体どうやってフロニャルドに来たんだい？普通は、めったな事がない限りこちらには来れないんだが。」

ロランの問いに映司は、

「あぁ、それなんですけど・・・確か変な剣をくわえた犬が作った穴に、エクレちゃんくらいの男の子が落ちそうになったから、それを助けようとして・・・それで手を掴んで引き上げようとしたら、その犬に押されて穴に落ちちゃったんですよ。」

「・・・まて、その話しは本当か！？」
突然ロランが驚いたように聞いてくる。
「え？はい。そういえばあの男の子どこ行ったんだろ・・・」
映司は本当だと言い、未だ行方の知れない少年を心配する。
「・・・もしかして、その少年は金髪ではないか？」
「よく知ってますね！そうですよ。」
映司がそう答えると、何故かロランは顔面蒼白になる。
「えっと・・・ロランさん？大丈夫ですか？」
映司はロランを心配し、声をかける。
すると、
「な、何という事だ！我々は取り返しのつかない事を・・・映司殿！」
「は、はい！」
突然ロランに呼ばれ、思わず背筋を伸ばす映司。
「すまない・・・我々は君に取り返しのつかない事をしてしまったようだ。」
「え、えっと・・・。」

ロランの突然の謝罪に困惑する映司。

「今から私はこのビスコッティ共和国の代表領主の元に行く。映司殿も来てくれ。」

「え、あ・・・わ、分かりました。」

ロランはそう言うと、部屋を出て行った。映司もそれに着いて行くのだった。

ーーーーーーーー

ここは、騎士団詰め所の医務室。

この医務室のベットの一つにエクレールはいた。

「だから、そう心配するな。ちょっと疲れが溜まっていただけだ。」

「心配するでありますよ！もしエクレの身に何かあったら・・・」

「そうだよエクレ。エクレに何かあったら僕も心配するよ。」

現在エクレは2人の人物と対面していた。

学院主席のリコッタと勇者のシンクである。

この2人は、先ほどまで違う場所にいたが、エクレが医務室に運ばれたと聞き飛んできたのだ。

「はぁ・・・2人とも。私は大丈夫だからそう心配するな。今日の夕方頃には復帰できるから。」

「・・・本当でありますか？」

「あぁ、本当だ。」

「本当に？」

「本当だと言ってる。」

エクレの言葉にリコッタ、シンクが順番に聞く。エクレはそれに大丈夫だと答えた。

「それなら良いんだけど・・・そういえばその“侵入者”は今どこにいるの？」

シンクがエクレに質問する。

「ん？あぁ、“映司”の事か。今兄上から事情聴取を受けているはずだが。」

「“映司”？それが侵入者の名前でありますか？」

映司と言う、聞き慣れない言葉に？を浮かべるリコッタ。

「あぁ、フルネームは“火野映司”だ。私は映司と呼んでるがな。」

リコッタの疑問に答えるエクレ。

「あ、そういえばエクレ。あのパンツはどうしたの？」

突然思い出したようにシンクが言った。

「あのパンツか？あれは映司のだったからもう返却したが。」

「えっ！そうだったのでありますか！？」

「ん？そうだが・・・そういえばものすごく感謝されたな。」

映司に感謝された時を思い出すエクレ。

「そうだったのか・・・。」

「そうだったでありますか・・・。」

「まて、何でそんなに残念そうな顔をしている。」

何故か残念と思う2人であった。

ーーーーーー

「・・・暇だなぁ。」

映司は思った。

映司は現在、フィリアンノ城の応接室にいた。

あの後、ロランに着いて行ったが『この部屋で待っていてくれ』といいどこかに行ってしまった。それから既に数十分待たされている。

「でもさすが一国のお城だな～。ソファーから何までいかにも高級って感じがする。」

実際、映司がこの城を詳しく見るのは初めてである。

騎士達から逃げていた時は詳しく見れなかった為、映司は歩きながら壁などを見ていた。

「すいません。遅くなってしまいましたね。」

後ろから声が聞こえ振り向くとそこには・・・エクレと同い年くらいの少女がいた。

「初めまして。私はこのビスコッティ共和国代表領主のミルヒオーレ・フィリアンノ・ビスコッティと申します。」

「・・・。」

「あの・・・どうかなされましたか？」

「あ。いえ別に。初めまして、火野映司と言います。」

映司は目の前の少女、ミルヒに自己紹介をした。

「あ、お座りになって下さい。今お茶をご用意しますから。」

「ありがとうございます。」

映司が席に着くと、数名のメイドがお茶や茶菓子を映司とミルヒの前に置いていく。

お茶や茶菓子を置き終えるとメイドは一礼して部屋から出て行った。

「良かったら飲んで下さい。このお茶はこの国の名産なんです。」

ミルヒが笑顔で映司に話しかける。しかし映司はこの笑顔に違和感を感じた。

「あの、姫様。」

「何ですか映司さん？」

「その、失礼かも知れないんですが・・・無茶してませんか？」

「え？」

映司が感じた違和感。それはミルヒの笑顔が無理をしているのでは？と言うものだった。

「・・・分かりましたか？」

「はい。」

そう言うとミルヒの表情が曇る。どうやら的中したようだ。

「その・・・良かったら教えてくれませんか？今、俺が置かれている状況。」

「・・・分かりました。」

ミルヒは重い口を開くのだった。

現状とお見舞いとお姫様（前書き）

第１０話です。

最近友達からガチャガチャのアストロスイッチのスモークをもらいました。

現状とお見舞いとお姫様

「その・・・良かったら教えてくれませか？今、俺の置かれている状況。」

「・・・分かりました。」

ミルヒの重い口が開く。

「その前に、今我が国の状況から説明しますね。そちらの方が分かりやすいと思うので。」

「そうですか。」

どうやら映司の状況より、まずビスコッティについて話すようだ。

「我々ビスコッティ共和国は少し前から隣国のガレット獅子団に幾多の戦を仕掛けられ敗戦が続いていました。」

「・・・侵略戦争ですか。」

「はい。」

今の話しを聞いた映司は、その戦が隣国からの“侵略”と解釈し、ミルヒもまたそれを認めた。

「でも・・・分からない事があるんです。」

「分からない事？」

ミルヒの言葉に?を浮かべる映司。

「実は、ついこの間まではガレット獅子団とは仲は良好だったんです。それがなんでいきなり・・・。」

「・・・難しいですね。」

「はい・・・。」

ミルヒの曇っていた表情がさらに曇る。

「あ、すいません。話しがそれちゃいましたね。話しを戻します。それで我々ビスコッティ共和国は敗戦を重ね後が無くってしまったのです。」

「なるほど。」

「そこで、私は“最後の切り札”を使う事にしました。」

「最後の切り札?」

普通の切り札なら分かるが、最後の切り札と言う言葉に反応する映司。

「はい。代表領主のみに許される“勇者召喚”です。」

「勇者召喚?」

映司はポカンとする。実際、勇者召喚なんてゲームやマンガの話し

だと思っていたからである。

「私は勇者召喚をし、シンク・イズミさんに勇者になってもらいました。勇者様のおかげで重要な今回の戦は勝利する事ができました。」

「そうですか。（あの子シンク・イズミって言うのか・・・）」

映司は金髪の少年の名をここで初めて知った。

「でも・・・ここで問題が発生してしまいました。」

「・・・もしかして、召喚された勇者は帰れない。とか？」

「はい・・・。」

映司の勘が当たった。

「そしてもう一つ問題が発生しました。はっきり言って、こちらの方が重大です。」

「・・・。」

ミルヒの言う、重大な事に映司は静かに聞こうとした。

「その問題は・・・火野映司さん、あなたの存在です。」

どうやら映司に問題があるようだ。

「俺が？」

「はい。」

映司は驚きを隠せない。

「映司さん、あなたがこちらに来る前に、金髪の少年を助けようとして犬におされて穴に落ちた。そうですよね？」

「はい。間違いないです。」

「その犬はあの子ではないですか？」

ミルヒが横を向き、映司もつられて横を向く。

そこには、忘れる事のない“あの犬”がいた。

犬は映司に気づくと、映司に近づいた。しかし犬に元気はなく、落ち込んだようだった。

「本来、勇者召喚の対象は1人なんです。映司さんは勇者召喚の枠には入っていませんでした。いえ、いないはずでした。しかし今、映司さんはここにいます。我々は映司さんを・・・勇者召喚に巻き込んでしまいました。」

「・・・。」

映司はただ静に聞き、現状を理解した。

「その・・・ごめんなさい！」

立ち上がり、映司に謝罪するミルヒ。

「私が・・・もっと・・・しっかり・・・して・・・いれば・・・こんなこと・・・には・・・本当に・・・ごめんなさい・・・。」

謝罪をするミルヒだが声が途切れ途切れになり、頬を涙が伝い始める。

「・・・いいじゃないですか。」

「・・・え？」

映司の突然の言葉に驚くミルヒ。

「立派ですよ。その年でそんな判断ができるなんて。それに姫様はこの国の為にした事でしょ？だったら誰も何も言いませんよ。少なくとも俺は言いません。」

「映司さん・・・。」

「だから、あなたは胸を張って下さい。そんな顔じゃあみんなついて来ませんよ。それに、そんなんじゃあ可愛いお顔が台無しですよ。だから・・・あなたは笑って下さい。」

映司の言葉に驚くミルヒだが、この言葉で少し気が楽になった気がした。

「映司さん・・・ありがとう。」

ミルヒは映司に感謝し、再び席に着く。

「それで、映司さん。映司さんは何日後ぐらいにご帰還したいとお思いですか？」

「そうですね・・・１６日後くらいには。仲間との約束があるので。」

映司の答えにミルヒは、

「そうですか！それなら希望が持てそうです。」

「そうなんですか？」

「はい！今、学院で召喚した勇者の帰還方法を探しているんです。」

どうやら、帰還方法は捜査中らしい。

すると、ドアが開きメイドが入ってきた。

「姫様、そろそろ。」

「え、もうですか？」

メイドが何かをミルヒに伝えると、ミルヒは立ち上がる。

「すいません、映司さん。今日はここまでみたいです。」

どうやら時間らしい。

「あ、こちらこそ。時間をとらせてしまって・・・。」

「いえ、こちらこそ・・・そうだ！」

ミルヒは突然何かを思い出したように手を叩いた。

「実は今日、戦の勝利祝いに私のコンサートをやるんです。良かったら見に来て下さい。」

「分かりました。必ず行きます。」

映司は笑顔で答えた。

そしてミルヒはメイドに連れられ、部屋を出て行った。入れ違いでロランが部屋に入ってくる。

「どうだった？姫様は？」

「えぇ、すごいですよ。あの年でもう一国の代表なんて。責任感もありますし。」

映司は素直に答えた。

「そうか・・・それは良かった。」

ロランは安心したように言った。

「それより映司殿。これからの事だが、行動の制限はなしになった。」

「本当ですか！？」

「無論だ。」

行動の制限がなくなる事に映司は喜んだ。

「これからどうする気だい？」

「とりあえず、エクレちゃんのお見舞いに行こうと思います。」

「そうか。エクレも喜ぶだろう。」

そう言うと映司は部屋から出て行き、騎士団詰め所にある医務室に向かうのだった。

ーーーーーーー

「全く・・・なんであんなに残念そうな顔をするんだ。」

エクレは先ほどのシンクとリコッタの表情に不快感を覚えていた。

実際あの後、『せっかくエクレの弱みを握ったでありますのに・・・』とか『エクレをいじるネタが・・・』とか言っていた。

「あ～不愉快だ。」

今、医務室にはエクレ1人である。

リコッタは学院の様子を見に行き、シンクはトイレに行った。あの急ぎようはおそらく大きい方だろう。

「それにしても・・・暇だ。」

だが、この2人がぬけた途端に部屋が静まり返り暇になった。

「・・・大人しく寝るか。」

エクレは寝ようと身体を横にした時、

扉が開いた。

「失礼します・・・。」

「映司？」

入ってきたのは映司だった。エクレは起き上がり映司を確認する。

「あ、エクレちゃん。どう調子は？」

「夕方頃には復帰できそうだ。」

「それなら良かった。」

映司はホッとした。

「何か用か？」

「ん？いや～お見舞いに来たんだよ。はいこれ。」
「これは？」
「見て分からない？果物だよ。」
映司はお見舞い用に果物を持参していた。
映司はナイフで果物の皮を剥き始め、食べやすい大きさにカットした。
「食べる？」
「・・・いただく。剥いてもらったからな。」
エクレは果物をいただく事にした。
「はい。じゃあ・・・。」
「まて。どういうつもりだ？」
「何って、食べさせてあげようかと。」
「何でそうなる！」
どうやら、映司がエクレに果物を食べさせてあげようとしたらしい。
詳しく言うなら、『はい、あ～ん』である。
「自分で食べるからいい！」

「いやだって、怪我人にはこうして食べさせてあげると、俺の仲間が言っていたんだけど・・・」

ちなみに、こんな知識を映司に与えたのは、“自称戦う医者であり、おでん大好きで1億稼ぐ事に成功した某〇達”である。

「誰だそんなの教えた奴は・・・まぁ、その・・・どうしてもと言うなら・・・別にいいが・・・／／／。」

エクレは頬を赤くしながら言った。

「そう？じゃあ・・・はい、あ～ん。」

「あ、あ～ん／／／」

エクレが映司から食べさせてもらった果物を口に入れたその時。

「ふぅ～スッキリした。てぇ、あれ？」

タイミング悪く・・・シンクがトイレから帰ってきたのだ。

「※@£％＃℃〒！？」

果物に邪魔をされ、エクレは変な悲鳴を上げるのだった。

「あれ、君って！」

「あ！あの時の！」

驚きの声を上げる映司とシンク。

今、ここにビスコッティの勇者　シンク・イズミと仮面ライダーオーズ　火野映司が再会した。

再開と講義とパンツの必要性（前書き）

第１１話です。

今回は短めです。

再開と講義とパンツの必要性

「あれ、君って！」

「あ！あなたは！」

互いに驚きの声を上げる映司とシンク。

「・・・なんだ？お前達知り合いなのか？」

口にあった果物を食べ終えエクレが質問する。

「そうだよ。と、言っても今日の朝方会ったばかりだけどね。」

「でも、良かったですよ！落ちた後あなたが見当たらなかったので。」

どうやらシンクも映司の行方が気になっていたようだ。

「そうだ！僕、シンク・イズミと言います。」

「俺は、火野映司。よろしく、シンク君。」

「はい！映司さん。こちらこそ！」

互いに握手を交わす2人。

「そういえば、シンク君はこの国の勇者なんだって？」

「えっ！何でそれを！？」

シンクが驚く。

「さっき、ここのお姫様とお話してきた時に教えてもらったんだよ。」

「なるほど～。」

映司の説明に納得するシンク。だがここで、新たなる疑問が。

「映司さんはエクレといつ知り合ったんですか？だいぶ親しそうでしたけど。」

シンクの新たなる疑問。それは映司とエクレの関係だった。

「あ～、仲良く見えた？」

「見えますよ～。果物を食べさせてあげるんですよ？」

「それもそうだね！」

「そうですよ～。」

ハハァと互いに笑う映司とシンク。エクレは着いていけない。

「それで、どんな関係なんですか？」

「特に特別ではないよ。そうだな・・・しいて言うなら“好敵手”かな？」

「好敵手？」

シンクの頭に？が浮かぶ。

「俺、最初エクレちゃんと会った時は敵同士だったんだよ。」

「そうなんですか！？」

最初は敵だったと言う映司。エクレはそれに腕を組み、うんうんとうなずく。

「まぁ、その時俺は侵入者扱いだったんだけどね。」

「じゃあ・・・侵入者って・・・。」

「そう、俺だよ。」

シンクは驚き、そして唖然とする。

先ほどまでの侵入者騒ぎの元凶がここにいる事にも驚いたが、それより映司が侵入者だった事の方が驚きだったようだ。

「いや～。エクレちゃんは強かったな～。」

「何を言う。映司は私に勝っているじゃないか。」

「えっ？エクレ負けたの！？」

「だからこうしてベットで寝てるんだが。」

何を言っていると言う表情のエクレ。シンクにまた驚きが一つ。

「じゃあ、蝶柄のパンツの持ち主は・・・映司さん!?」

「そうだよ。俺の大切な明日だよ!」

パンツの話しになり、テンションが上がる映司。

「何でパンツなんか持ち歩いているんですか?」

シンクは気になったので質問する。

「実は子供の時祖父に、『男はいつ死ぬか分からないから、パンツだけは常に一張羅はいておけ』って言われてね。それに感銘を受けたんだよ。」

「そうだったのか・・・知らなかった。」

エクレは軽く呆れ顔になる。

しかし、シンクは違った。拳を握りしめ、わなわなと震えている。

「どうした?勇者?どこか悪いのか?」

エクレが心配するが・・・

「・・・っこ・・・い。」

「ん?何だって?」

「かっこいい！！」

「！？」

突然かっこいいと言ったシンク。それに驚くエクレ。

「かっこいいです！映司さん！」

「シンク君。分かるのかい？パンツの素晴らしさが！」

「はい！」

何か変なテンションになってくる2人。

「お、お～い。2人共～戻ってこ～い！」

エクレは2人を呼び戻そうとするが・・・

「映司さん！是非僕にパンツの極意を教えて下さい！」

「よし、それじゃあ講義を始めよう。」

時既に遅く。映司はどこから持ってきたか分からないホワイトボードを使い、シンクはベットをイス代わりにしてメモ帳とペンを持っていた。

ちなみにホワイトボードには、“明日のパンツの必要性について”と書かれていた。

「・・・・・・。」

ポカンとするエクレ。

すると、

「ん？どうしたエクレ？」

ロランが現れた。

「兄上！あの2人を止めて下さい！なんか変な事を始めました！」

「変な事？」

エクレは必死にロランに訴えかける。

「パンツについて講義を始めているんです！早く止めさせて下さい！」

「あ、ロランさん！」

シンクがロランに気づいた。

「勇者殿、映司殿これは一体・・・。」

「見て分かりませんか？“明日のパンツの必要性について”の講義ですよ！」

「ロランさんもどうですか？」

シンクと映司がロランを誘う。

（兄上なら大丈夫のはずだ。兄上なら！）

エクレは心の中で祈ったが・・・

「面白そうだな。私もいいか？」

「兄上ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

ロランは流された。ロランはシンクからペンとメモ用紙を受け取るとベットに座り、映司の講義を受け始めた。

エクレの叫びがこだまする。

「オンドゥルルラギッタンディスカァァァァァァァァァァァァ！」

エクレの叫びは思わずオ〇ドゥル語になってしまった。

ちなみにこの講義はエクレの復帰予定である、夕方頃まで行われたのだった。

お怒りと露天と姫様誘拐（前書き）

第１２話です。

若干オリジナルになってます。

お怒りと露天と姫様誘拐

時刻は夕方を少し過ぎた頃。

ビスコッティ共和国の象徴、フィリアンノ城全体を眺める事ができる丘。

ここに４つの人影があった。１つは男、３つは女の人影。

この人影にはビスコッティの人々が持つ、犬の耳や尻尾を持っていない。

男はどこか獅子を思わせる耳と尻尾を持ち、ビスコッティの勇者であるシンク・イズミとあまり変わらない年頃だろう。

女に関しては、１人は黒猫を彷彿とさせる耳と尻尾、もう１人は虎柄の耳と尻尾を持ち、最後の１人に限っては上記のように猫系ではなく兎である。

「なぁ、その勇者ってのは強いのか？」

男が呟く。

「まぁ、戦ってみれば分かるか・・・頼んだぜ。」

男がそう言うと、３人の女はフィリアンノ城に向かって行った。

そして男は、女達とは反対の方向に向かって行った。

ーーーーーーー

「・・・・・・。」

「あの～、エクレちゃん？」

「・・・何だ。」

「やっぱり・・・怒ってる？」

「当たり前だ！」

フィリアンノ城の廊下、ここに2つの人影があった。1人はビスコッティ共和国騎士団親衛隊隊長であるエクレール・マルティノッジ、通称エクレ。

そしてもう1人は、仮面ライダーオーズであり元侵入者の火野映司、通称映司。

ちなみにエクレは先ほどまで医務室のベットで寝ていた身である。

「その・・・本当にごめん。」

「反省してるのか？」

「・・・はい。」

何故映司が謝っているのか？それは、約数時間前までさかのぼる。

エクレがまだ医務室で寝ていた時、映司はお見舞いに訪れた。その際にシンクと再会、盛り上がった2人は映司のパンツの話しになり、遂にはパンツの講座まで始めてしまったのだ。エクレの目の前で。

しかも、エクレの元に訪れたロランをも巻き込み講座は続いた。終わったのは夕方頃、つまりエクレの復帰予定の時間だった。

講座が終わった後、『地球に帰ったら一張羅買うぞ！』と意気込むシンクや、『パンツは天日干しがいいのか・・・うむ、勉強になった。』と感心するロラン。

もはや、おかしな状況になっていたのだ。

この講座のせいでエクレは完全に参ってしまい（主に精神が）、講座を終えた映司に怒りをぶちまけたのだ。

映司は必死に謝っているが一向に許してもらえず、今にいたる。

「本当にごめん！パンツの事分かってもらえてその・・・嬉しくて・・・つい。」

「そのせいで私がどんな思いをしたと思っている！」

エクレの怒りは収まらない。

そこで映司は・・・

「本当に・・・すいませんでしたぁっ！」

「なぁっ！」

遂に、土下座した。

「本当にごめん！今度1日何でもするから！」

「何でも？本当か？」

「本当に！あ、でも『死ね』とかは無しね。」

「分かっている・・・よし、今回は許そう。」

「本当に！？」

映司がバァッと顔を上げる。

「あぁ・・・でも今度何でもしてもらうからな。約束だぞ。」

「分かったよ！エクレちゃん！」

ようやく映司はエクレに許しをもらったのだった。

「ほら、さっさと来ないと置いて行くぞ。」

「あ、ちょっと待ってよ。」

先に行こうとするエクレ。今この2人はビスコッティの代表領主であり世界的歌手であるミルヒオーレ、通称ミルヒのライブ会場に向かっている途中だった。

「ん？・・・あれは・・・」

エクレを追いかけようとした映司は、ふと右側に見覚えがある物が一瞬見えた。

「早くしろ！置いて行くぞ！」

エクレの声で我に戻った映司はエクレの後を追いかけて行った。

ーーーーーーー

現在シンクは城内を駆け回っていた。

「えっと・・・お風呂は・・・」

シンクはお風呂を探していた。

映司によるパンツ講座の後、怒りを爆発させたエクレから逃げるように医務室から逃げていた。

「映司さん・・・大丈夫かな？」

エクレの怒りの犠牲になった火野映司を心配した。

「でも・・・今はお風呂だ！」

気持ちを再び切り替え、お風呂探しを再開する。

「えっと・・・確かここらへんに・・・」

シンクが歩きながらキョロキョロしていると・・・

「・・・お、あれかな？」

突然通路に照明が灯り、その灯りはある建物に続いていた為、シンクはそこがお風呂ではないかと予想する。

「とりあえず行ってみよう。」

シンクはその建物に向かった。そして中へと入って行った。

入り口に貼ってある貼り紙に気づかずに。

「やっぱりお風呂だ。」

シンクの予想は見事に的中した。

「いやっほぉー♪」

ノリノリで服を脱ぎ捨て、脱衣場を抜け、風呂のドアを開け中に入った。勿論腰にはバスタオルを巻いている。

「すごい露天だぁぁぁ♪」

お風呂がまさかの露天風呂である事に感激するシンク。

満天の夜空を見ながら、そのまま歩を進める。

バシャァ。

何かが湯をかぶった音がした。

「あれ？先客かな？」

シンクは音のした方を見る。

そこには・・・ピンク色の髪を持ち、耳と尻尾も髪同様にピンク色、さらにはシンクと同い年くらいの・・・少女がいた。

「てぇ・・・ひ、姫様！？」

見間違うはずがない。そこにいたのは・・・このビスコッティ共和国の代表領主であるミルヒオーレその人であった。

しかも、素っ裸で。

「へぇ？ゆ、勇者様！？」

どうやら向こうも気づいたようだ。

しばしの沈黙が続く。

「あ、あの・・・」

ミルヒが沈黙を破りシンクに話しかける。

「み、見てません！見てませんから！／／／」

「へぇ？あ・・・きゃあっ！／／／」

シンクのこの発言により、今自分が素っ裸なのに気づいたミルヒ。

互いに目のやり場に困る。ミルヒに限っては、どこかに身を隠そうとし動き回る。

ツルッ！

マンガでいかにも滑ったという音がした。

「きゃあ！？」

「ひ、姫様！」

どうやらミルヒが石鹸を踏んで滑ったようだ。

シンクはそれに気がつき、走った。

そして、手を伸ばしミルヒの手を掴み自分の元に引き寄せた。

あの時、自分を助けようとした映司のように。

「大丈夫？姫様？」

「はい・・・何とか。」

「良かった・・・ん？」

ミルヒを助けひと安心のシンク。

だが、ここで違和感に気づく。

「あの・・・どうかしましたか？」

心配したミルヒが声をかける。

シンクはここで違和感について考えた。。

（ここはお風呂。いるのは僕と姫様だけ。すぐ近くにいる。お風呂＝裸・・・はっ！）

シンクはミルヒを見た。

そこには・・・

「うあぁぁぁぁぁ！」

「勇者様！？」

ミルヒの手を離し、浴槽に飛び込んだ。

ミルヒはポカンとしている。

「ひ、姫様！か、体隠してください！」

「へぇ？あっ・・・／／／」

シンクに言われ、顔を赤くするミルヒ。

ミルヒは体を隠しながら脱衣場へ向かう。

「ゆ、勇者様。」

「は、はい！」

脱衣場に入ったミルヒはドア越しにシンクに語りかける。

「突然の事とかでバタバタしていましたけど・・・今度また色々お話しましょう。これからの事とか。」

「は、はい！」

ミルヒはそう言うと脱衣場の奥へと消えた。

「はぁ～緊張したぁ・・・」

シンクは思わず言葉を漏らす。

「それにしても・・・綺麗だったな・・・。」

シンクは先ほどのミルヒを思い出す。

「・・・はっ！いけない！煩悩退散！煩悩退散！」

おけを頭に打ちつける。

「・・・もう出よう。もう姫様もいないと思うし。」

シンクはそう考え、浴槽を出る。そして脱衣場に向かおうとした時だった。

「きゃあぁぁぁぁぁ！」

「！？、姫様！」

今日3、４回目になるミルヒの悲鳴。

しかし、今回のは明らかに先ほどまでのとは違った。

シンクは急いで脱衣場へ。そこで5秒という奇跡の速さで着替えをすませ、脱衣場を出た。

そこでシンクが見た物は・・・。

「お前が勇者か？」

手足を縄で縛られ口はテープのような物で塞がれているミルヒ。

そのミルヒをお姫様抱っこしている女が訪ねた。

「そうだけど・・・君達は？」

シンクはその女に訪ねた。
「私達はガレット獅子団のガウル様直属の秘密諜報部隊。私はベール・ファーブルトン。」
「ウチはジョーヌ・クラフティ。」
「私はノワール・ヴィノカカオ。」
「「「3人揃って、ジェノワーズ！」」」
3人が名乗り終わると、後ろから色とりどりの煙りが上がる。ベールとジョーヌはポーズをとるが、ノワールはミルヒを抱えている為ポーズをとらなかった。
「ジェノワーズ？（ていうかどこぞの戦隊もの？そして1人だけポーズとってないな・・・。）」
シンクは内心くだらない事を考える。
「お前の姫様は私達が預かった。」
「取り返したいなら、」
「ミオン砦まで来るんやな。」
3人が順々に言い放つ。
「どうして姫様を誘拐する！」

シンクは問う。

「ガレット獅子団の王子である、ガウル様は勇者であるあなたと一騎打ちを所望です。」

「それまで、姫様はこちらで預からさせてもらうで。」

「さて、どうします？ビスコッティの勇者さん？」

ジェノワーズの問いにシンクは・・・

「・・・分かった。受けてたつよ！僕はビスコッティの勇者だ！どこの誰だって戦ってやる！」

シンクはジェノワーズに向かって叫んだ。

ここに、要人誘拐奪還戦が成立した。

しかし、彼らは知らなかった。

この要人誘拐奪還戦において、不死鳥が降臨する事を・・・

砦と接待と相棒の意志（前書き）

第１３話です。

戦闘開始は次になります。

砦と接待と相棒の意志

現在フィリアンノ城の大浴場前にて、ビスコッティの勇者シンク・イズミとジェノワーズが対峙していた。

「では、要人誘拐奪還戦成立ですね。」

「ミオン砦で待ってるで～。」

「それでは。」

ジェノワーズはそう言うとミルヒを抱えてどこかへと飛び去って行った。

「急いで追わないと！」

シンクはジェノワーズを追うとする。そこへ・・・

「勇者！」

「エクレ！大変なんだ！姫様が・・・」

エクレが来た為事情を話そうとしたが・・・

「このぉぉぉぉ！アホ勇者がぁぁぁぁぁ！」

「へぅ！」

エクレはシンクに対して跳び蹴り（技名は制裁&親衛隊隊長キック）

を放ち、シンクはそれをモロに受けた。

「いきなり何するの！？」

「こちらのセリフだ！簡単に宣戦布告を受けてどうする！」

「・・・え？」

宣戦布告と言われ、キョトンとするシンク。

「あれは、要人誘拐奪還戦の宣戦布告だ。何故断らなかった！」

「え？宣戦布告って断れるの？」

「勇者・・・まさか知らなかったのか？」

シンクがそんな言を言うので、とりあえずエクレは聞いてみる。

「うん。知らなかった。」

「な、何だと！」

「だってそんな事エクレ教えてくれなかったじゃん！」

シンクの言うとおり、エクレは宣戦布告については教えていなかった。

「そ、それは・・・。」

「エクレちゃ～ん！」

エクレに遅れる事数分、映司が追いついた。

「あ、映司さん。」

「シンク君？え？何、今どういう状況？」

映司が状況を掴めずいると、

「簡単に言うと姫様が誘拐された。そしてこのアホ勇者が宣戦布告を受けたんだ。」

「なるほど・・・てぇ、えぇぇぇぇぇ！？」

エクレの説明に驚く映司。ミルヒが誘拐されたのでしょうがないが。

「ど、どうするの？」

「決まっている。ミオン砦に向かうぞ！勇者準備しろ！」

映司の質問に答えるエクレ。そしてシンクに準備をさせる。

「エクレちゃん俺m「映司は駄目だ。」どうして！？」

エクレは映司の動向を却下した。

「映司。私はさっき映司がここに来た、いやここに来てしまった理由を聞いたな。」

「そうだけど・・・」

実はシンクとミルヒが浴場で遭遇していた頃、エクレは映司がフロニャルドに来たこれまでの経緯を聞いていたのだ。

「映司は望まずしてここに来てしまった。我々のミスで勇者召喚に巻き込んでしまった。だからこそ動向は認められない。」

「でも！」

「映司。ここは我々ビスコッティ騎士団に任せてくれ。映司の不思議な力が無くとも姫様は連れ戻してくるさ。」

「・・・。」

映司はエクレの説得に黙り込む。

「行くぞ！勇者！」

「え？あ、うん・・・」

エクレに促されたシンクはエクレの後を追う。だがシンクは何だかもやもやした思いが残った。

映司は1人そこに取り残された。

ーーーーー

場所は変わり、ミオン砦のある一室。

誘拐されたミルヒは現在ここにいた。

だがその部屋はかなり豪華な部屋だった。広々した室内、高級なソファー、赤い絨毯、そして壁には幼い頃のミルヒと現在ガレットの代表領主であるレオンミシェルが描かれた絵が飾ってある。

しかもテーブルの上には、お茶と茶菓子がおいてある。完全に人質の受ける接待ではなかった。

「失礼します。」

「どうぞ。」

数人のメイドが部屋に入ってきた。ミルヒはそれに対してあまり驚かない。さらにメイドの後ろから数匹のライオンのような動物が現れる。

「ヴァノン！お久しぶりです！」

ミルヒがそう呼ぶと、その中で一番大きい身体を持った動物が近づく。

そのままミルヒはそのヴァノンをなで始める。

「ありがとうルージュ。」

「いえ。そこの子ども達はついこの間生まれたばかりなんです。良

かったら遊んであげて下さい。」

すると、ミルヒの周りに小さい動物が集まる。

「今ガウル様を呼んでまいりますので、少々お待ち下さい。」

「はい。」

そう言うとルージュと数人のメイドは部屋を出て行った。

ーーーーーー

再び場所は変わり、ミオン砦に通じる街道。

ここを3匹のセルクが走っている。

その3匹のセルクにはそれぞれシンク、エクレ、リコッタが乗っている。

「ミオン砦まではもうすぐであります。」

リコッタが2人に言う。

「分かった。聞いているか勇者?」

「聞いているよ。」

エクレの問いに答えるシンク。

「何か言いたそうだな。」

エクレがそう言うと、

「・・・エクレ、リコごめん僕が宣戦布告の事を知らないばかりにこんな事に。でも・・・絶対に姫様を助けてみせる！そしてコンサートにも間に合わせてみせる！」

「ふん、当然だ。」

「当然であります！」

シンクの意気込みにエクレとリコッタは勿論と返す。

「それと、エクレ。」

「何だ勇者？」

今度はシンクがエクレに質問する。

「その・・・本当によかったの？映司さんの事・・・。」

どうやら先ほどの映司についてのようだ。

「あぁ、映司には確かに不思議な力がある。はっきり言って私より強い。いてもらった方がいい。」

「だったなら何で・・・・。」

「さっきも言ったが、映司は望んでここに来た訳じゃない。我々の勇者召喚に巻き込まれただけだ。それに、映司は普通の人と戦う事に抵抗があるんだ。前線にだす事は出来ない。」

「・・・・。」

エクレの答えに黙り込むシンク。

「だから・・・その分まで、我々が戦うんだ！」

「・・・分かったよ、エクレ。」

エクレの意気込みにシンクも納得する。

「・・・見えたぞ。ミオン砦だ。」

「あれが・・・・」

遂に、ミオン砦を目視で確認する。

「それでは2人共、また後でであります！」

「あぁ、頼んだぞリコ。」

「了解であります！」

リコは作戦の為、右手の森へと向かった。そして、シンクとエクレはそのままミオン砦へと向かった。

ーーーーーーー

フィリアンノ城は騒がしくなっていた。

ミオン砦に遠征に向かう騎士団の騎士達で溢れかえっている。

その中に火野映司はいた。

（俺って・・・何なのかな・・・。）

心の中でそんな事を考える。

（確かに、このフロニャルドには望んで来たわけじゃない。でも・・・。）

映司はポケットの中からあるものを取り出す。

それは、かつての相棒の形見である割れたタカメダルだった。

（アンク・・・俺は・・・どうすればいい・・・。）

メダルを握りしめる映司。その時・・・

『そんなのはお前が一番分かっているだろ、映司。』

「・・・アンク？」

映司の頭の中に、今は亡き相棒の声が聞こえた。

『映司。お前がしたい事はもう気づいているんじゃないか？お前自身がな。』

（俺の・・・したい事・・・。）

『あぁ、後はその為に何をすべきか考えろ。そして自分の思い、自分の欲望に従え。そうすれば道は見えるはずだ。』

そう言い残すとアンクの声は聞こえなくなった。

「俺の欲望・・・か。」

そう言うと映司はタカメダルをポケットにしまう。

そして目の前に見慣れた自動販売機を発見する。

「俺の欲望、思いは！」

映司は走り出した。そして騎士団長であるロランがいるコンサート会場に向かった。

開戦と思いと自由騎士（前書き）

第１４話です。

何かグダグダになった気がする・・・

開戦と思いと自由騎士

ミオン砦の正面門。ここには大量のガレット兵士がいた。

その兵士達は来るべき敵に備え、待機していた。

「・・・」

誰1人として無駄口をする者はいない。辺りを風が吹く音しかしない。

「・・・来たぞ！」

兵士の1人が叫んだ。するとそれを待っていたとばかりに兵士達が立ち上がる。

「数は？」

「数は・・・2人です！」

「2人だと？なめられたものだな。」

兵士達の隊長らしき人物が呟く。

「たかが2人、ここで返り討ちにしてくれる！全員構え！」

兵士達は各々の武器を構える。

「来たぞ！」

「よし！全員攻撃開ｓ「おい！あれ！」なんだ！？」

突然兵士の１人が空を指差す。そして・・・大量の砲弾が飛んできた。

「ほ、砲撃だと！？」

「全員退避！退避！」

退避命令を出すが時既に遅く・・・

砲弾は兵士達の元に降り注いだ。

「「「ぎゃぁぁぁぁぁ！」」」

砲撃を受けた兵士達は次々とけものだまに変わっていく。

「ば、ばかｎ「そこ！」うぎゃぁぁぁ！」

隊長らしき人物もダガーを使う少女に斬られ、けものだまに変わった。

「すごいねこれ！」

棒を持った少年、シンクが言う。

「当然だ。リコだからな。」

ダガーを持った少女、エクレがそれに答える。

「よし・・・突入するぞ！」

「了解、エクレ！」

シンクとエクレは開いた門を抜け、砦内部に突入した。

・・・・・・・

ミオン砦から少し離れた森の中、ここに1人の少女、リコッタがいた。

彼女の周りには、おびただしい数の大砲があった。

「ビスコッティ共和国王立学術研究院主席、リコッタ・エルマール！」

リコッタは怪しい笑みを浮かべる。

「戦では、砲撃を担当しているであります。」

リコッタはパチンと指を鳴らす。

再び砲撃が開始された。

――――――

ビスコッティ共和国にあるミルヒのコンサート会場の舞台裏。

「これでよし。ちゃんとお前の主に届けるんだぞ。」

「ワン！」

そう言われた犬は、首輪に巻物を挟み、コンサート会場から出て行った。

それを、ビスコッティ騎士団騎士団長のロランは見送った。

「ロラン騎士団長・・・」

横にいた、アメリタが不安そうに呟く。

「大丈夫だ。勇者殿やエクレを信じよう。それに、ダルキアン卿やパネトーネ筆頭も加勢する。きっとやってくれるさ。」

ロランが安心させるように呟く。

「失礼します！」

「どうした？」

突然騎士の1人が現れる。

「はい。ロラン騎士団長に会いたいと言う人物がいまして。」

「一体誰ですか？こんな時に・・・」

アメリタは若干切れ気味に言う。

「はい。火野映司という人物です。」

「映司殿が？」

「はい。」

「・・・分かった。ここに連れて来てくれ。」

「はっ！」

ロランの命令によって騎士は映司の元に行く。

「火野映司・・・確か勇者召喚に巻き込まれたっていう・・・。」

「そうだ。しかし一体どうしたんだ？」

「ロランさん！」

ロランの元に道を通された映司が現れる。

「ロランさん！俺も行かせて下さい！」

「・・・やはりな。」

「えっ？」

映司はロランの発見に驚く。

「来るとは思っていたよ映司殿。しかし今回は・・・」

「お断りします。」

ロランの言葉を全て聞く前に映司は否定した。

「ロランさんは、『今回は我々に任せてくれ。』って言うんでしょ？」

「・・・。」

ロランは言う事を見透かせれ黙り込む。

「確かに、今回はビスコッティの問題かも知れません。俺を巻き込みたくないと言うのも分かります。でも、俺は行きます。俺の思い・・・俺個人の意志で戦います。」

「しかし・・・。」

「お願いします！俺はエクレちゃんやシンク君・・・いや俺の仲間の為に戦いたい！それが今の俺の願い・・・欲望です！」

映司の訴えを黙って聞くロラン。

そして・・・

「・・・映司殿。これを。」

ロランはミオン砦までの地図と巻物を映司に渡す。

「映司殿。君の思い、受け取った。エクレ達を頼む。それと、向こうに行ったらブリオッシュ・ダルキアンと言う人物に巻物を渡してくれ。映司殿の事が書いてある。」

「はい！」

映司は地図と巻物を受け取る。

「今セルクを準備させる。ちょっとm「あっ、それなら問題ないです。」？」

セルクは必要ないと言う映司。

「俺の愛機って言うのかな？それがあったので大丈夫です。」

「そうか・・・。」

「それじゃ・・・行ってきます！」

そのまま映司は走ってその場を後にした。

「良かったのですか？ロラン騎士団長。」

アメリタが質問する。

「あぁ・・・映司殿の覚悟は本物だ。それに・・・」

「それに？」

「さっきの映司殿の眼は・・・いくつもの修羅場をくぐり抜けて来た戦士の眼だった。」

ロランは先ほどの映司の眼を思い返していた。

覚悟と戦士としての炎が灯った映司の眼を・・・

・

・

・

映司はある場所に向かって走っていた。

「確かここら辺に・・・あった！」

お目当ての物を見つけた映司。

しかし、周りには人集りが・・・

「何だぁ、これ？」

「さぁ・・・？」

「誰だよ。こんなの置いたのは・・・。」

集まっていた人物が口々に呟く。

「すいません！どいて下さい！」

映司はそんなの関係ないとばかりにその人集りに向かって叫ぶ。

人集りは映司の叫びを聞き“それ”から離れる。

映司は“それ”の前に立つとポケットから銀色のメダル、セルメダルを取り出す。そしてセルメダルを“それ”のコイン投入口に入れる。そして中心のボタンを押した。

すると、“それ”は変形を始めた。

「うぉ！？な、何だ！？」

「なんか変形してるぞ！？」

人集りが何か言っているが映司は気にしない。

そして、“それ”・・・ライドベンダーはベンダーモードからバイクモードに変形を完了する。

映司はライドベンダーにまたがり、ヘルメットを被る。そしてエンジンに火を入れる。

ブォォォォォン！

辺りに爆音が響き渡る。

人集りは更に驚く。

「すいません！急ぐので！」

映司は人集りに向かって叫び、そのままライドベンダーを発進させた。

映司を乗せたライドベンダーはミオン砦に向かって突き進み始めた。

ーーーーーーー

ミオン砦内部。ここでは今まさに激戦が繰り広げられていた。

その中で、シンクとエクレはある人物と遭遇してしまった。

「貴様が勇者か！そっちは親衛隊隊長だな？どっちでもいいからかかってこい！」

ガレット獅子団の戦士団将軍である、ゴドウィンと遭遇してしまったのだ。

「どうする？エクレ？」

シンクがエクレにどうするか訪ねる。

実際に今シンクとエクレはピンチである。先ほどまで行われていたリコッタによる砲撃も止まっている。エクレ曰く、包囲されたとの

事。

しかも、この将軍かなり強い。声も渋いが。

（こうなったら・・・勇者だけでも。）

（こうなったら・・・エクレだけでも。）

「「勇者！（エクレ！）ここは私（僕）に任せて先に行け！」」

・・・おもいっきり被った。

「何を言っている勇者！お前が行け！」

「女の子にここは任せられないよ！それにエクレの方が砦に詳しいでしょ！」

互いに意見が被り口論を始める。

ゴドウィンはイライラし始める。

「勇者が行け！」

「エクレが行ってよ！」

「いや勇者が行け！」

「いやエクレが行ってよ！」

口論は激しくなるばかりである。

「ぶるぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

遂にゴドウィンがきれた。

「「ひぃ！」」

「この土壇場で、楽しいやりとりしてんじゃねぇ！」

ゴドウィンは2人に向けて、斧を振ろうとした。

ガキィーン！

その時、シンク、エクレとゴドウィンの間に刀が突き刺さった。

「え！？な、何！？」

シンクは突然の出来事に動揺する。

「この剣は・・・まさか！」

エクレが驚いていると・・・。

「お話の途中申し訳ないでござる。」

突然声が聞こえた。声がした先には・・・。

「ダルキアン卿！」

エクレが歓喜の声を上げた。

「お～エクレール、お久しぶりでござる。大きくなったでござるな～。」

「はい！」

エクレとダルキアンがそんな会話をしていると、シンクがある事に気づいた。

「はっ！後ろ！」

シンクが叫ぶと、ダルキアンは腰の刀に手をかける。

「紋章剣・裂空一文字。」

そう言うと刀を一気に引き抜いた。すると、後ろの塔がまるでバターのように斬れた。

「す、すごい！」

「いや～助かったでござるよ勇者殿。」

ダルキアンは屋根から飛び上がると、シンクとエクレの前に着地する。

「ここは、拙者に任せて先に行くでござるよ。」

「ありがとうございます。ダルキアン卿。行くぞ！勇者！」

「あ、うん！ありがとうございます！」

シンクとエクレはさらに砦内部に向かった。

「ダルキアン・・・だと？」

「そちらとは初対面でござるな。」

ダルキアンは刺さった剣を引き抜いた。

「拙者はビスコッティ騎士団自由騎士隠密部隊頭領、ブリオッシュ・ダルキアンと言う。いざ・・・尋常に勝負でござるよ。」

ダルキアンは刀をゴドウィンに向けて言い放った。

筆頭と激化と蘇る炎のコンボ（前書き）

第１５話です。

今回は長め？かもしれません

筆頭と激化と蘇る炎のコンボ

ミオン砦へと続く街道。

この道をものすごい速さで駆け抜ける影が一つ。普通のセルクではまず出せない速さである。そして、それはセルクではなく、シンクや映司の世界で流通している“バイク”と言う物である。無論フロニャルドには存在しない

「よし。もうすぐだ。」

そのバイク、ライドベンダーを操る映司はミオン砦を目指していた。

自分の仲間を助ける為に・・・

ーーーーーーー

ミオン砦の外部。今ここには大量のガレット兵のけものだまが転がっていた。

「ふぅ・・・ざっとこんなもんでござるか・・・。」

その中で、黄色の髪を持ち狐のような耳と尻尾を持った女性がいた。

忍者のような服装をしている。今ここに転がっているけものだまを

量産した張本人である。

「こ、この野郎・・・」

まだ動ける兵士達の司令が苦虫を噛んだような顔をする。

「自己紹介がまだだったでござるな。拙者、ビスコッティ騎士団隠密部隊筆頭ユk「でゃぁぁぁぁ！」おっと！」

自己紹介を終える前に司令らしき兵に攻撃されるが、女性は軽くよける。

「せめて最後まで名乗らせて欲しいでござるよ。」

女性はちょっと不機嫌そうに言う。

「このっ！」

「紋章拳・狐流蓮華昇！」

女性は紋章拳を発動させた。そして司令らしき兵は紋章拳を受けけものだまに変わった。

「拙者、ビスコッティ騎士団隠密部隊筆頭ユキカゼ・パネトーネでござる。にん♪」

女性、ユキカゼは自己紹介を全て言えたようだ。

「ユッキー～！」

「おぉ！リコ！どうだったでござるか？」

「花火をいっぱい持ってきたであります♪」

リコッタの両手には、袋に入った花火があった。

しかし、何故ここにリコッタがいるのか？

実は、砲撃最中にリコッタは敵に捕まったのだがユキカゼによって助けられたれていたのだ。

「では、行くでござるか？」

「はい！であります！」

そう言うと、ユキカゼは背中にリコッタを背負う。

そして、一気に飛び上がった。

一気に飛び上がったユキカゼとリコッタはミオン砦の上空へ。そして、その真下にミオン砦内部の戦闘が繰り広げられているのが見えた。

「行くでござるよリコ！」

「了解でありますユッキー！」

2人はそう言うと、互いに拳を軽くつける。するとそこに、2人の紋章が現れる。

「「リコッタ&ユキカゼ式砲撃術！」」

2人はそのまま、袋に入った花火を真下に投下した。

「あ？何だ？」

ガレット兵が花火に気づいた。
しかしこれは、ただの花火ではない。すでに発火していた。

ドォン×無数

「「「「「「うぎゃぁぁぁぁぁ！」」」」」」

花火は爆発し、下にいたガレット兵達はあっという間にけものだまになった。

「やったであります！」

「やったでござるな！」

2人は砲撃が成功した事を喜んだ。

使われたのは花火の為、辺りには綺麗な模様が浮かんでいた。

・・・・・

その頃、シンクとエクレもそれぞれの敵と遭遇していた。

エクレは、ミルヒを誘拐した張本人にであり、ガウル直属の親衛隊であるジェノワーズと対峙した。

「あら？あなたはビスコッティの親衛隊隊長じゃない？」

「あ、ほんまや！」

「本当だ・・・。」

上からベール、ジョーヌ、ノワールが言う。

「よりにもよって、貴様達か・・・。」

エクレはダガーを構える。

「これって、親衛隊ＶＳ親衛隊じゃない？」

「確かにそうやな！まぁ、負ける気しないんやけどな！」

「だって３ＶＳ１だし・・・。」

３人は余裕の表情を見せる。

「そんなのは関係ない・・・お前達を倒して勇者援護に行かなくてはならないからな！」

エクレはダガーを構え、紋章を出現させるのだった。

一方シンクは・・・

「よぉ！お前が勇者か！」

「くっ！」

ガウルと遭遇していた。

「おっと。名乗り忘れたな！俺は・・・」

「でやぁ！」

シンクはガウルが名乗り終わる前にパラディオン（棒）を振るう。

ガウルは壁にあった槍でそれを防ぐ。

「はぁっ！名乗りもさせてくれないか！」

「急いでいるんでね！」

シンクとガウルはつばぜり合いになる。

「姫様は返してもらうよ！」

「はぁっ！やってみろ！」

シンクとガウル。似た者同士の戦いが始まる・・・

そして、それぞれの者達が戦っている中、あの男も着々とミオン砦

に近づいていた・・・

ーーーーーーー

「見えた！ミオン砦だ！」

遂に、映司はミオン砦を目視出来る場所まで来た。

「よし。このまま・・・・。」

映司はアクセルを全開にした。更にスピードが上がる。

ライドベンダーのエンジン音に気づいたのか、ガレット兵が大量に現れるが・・・

「お、おい何だあれ！凄いスピードだぞ！」

「セルクじゃない？何だ！？」

驚くガレット兵達

映司はそのままガレット兵達の元に突っ込んだ。

その結果・・・

「「「「うぎゃぁぁぁぁぁぁ！」」」」

ガレット兵は次々とけものだまに変わった。しかもものすごい勢いの為、軽く吹っ飛びながら。

「よし。このまま！」

遂に映司はミオン砦に突入した。

ダルキアンとゴドウィンの戦いは平行線をたどっていた。と言っても今はダルキアン優勢である。

「なかなかやるでござるな。」

ダルキアンはまだ余裕である。

「このぉ・・・。」

ゴドウィンは押されている為か、不機嫌そうな表情になっている。

すると、

「「「「「うぎゃぁぁぁぁぁぁぁ！」」」」」

「あっ？何だ？」

「ん？なんでござるか？」

無数の悲鳴が聞こえた為、ゴドウィンは悲鳴がした方を向く。ダルキアンもつられて同じ方を見る。

すると、大量のけものだまが飛んできた。

「・・・・。」

「・・・・。」

突然の事に黙る2人。

更に、2人めがけて見たことのないものが走ってきた。

それは、ダルキアンとゴドウィン前で止まる。

「今度は何だ？」

「さぁ？」

わけが分からない2人。

それには見た目からして男が乗っていた。男は被っていたヘルメットを脱いだ。

「ほう・・・なかなかイケメンでござるな。」

ダルキアンは男を見た感想を呟く。

「すいません！ブリオッシュ・ダルキアンと言う方はどちらですか

？」

どうやら男はダルキアンを探しているようだ。

「拙者だが？」

「すいません！これを！」

男はダルキアンに巻物を投げる

ダルキアンは刀を鞘に戻し巻物を受け取る。そして中身の文章を確認する。

「・・・なるほど。おぬしは我々の味方か。」

「はい！俺は火野映司と言います！」

ダルキアンの言葉に返事をする映司。

「そうか。では火野殿、頼みがあるのだが良いでござるか？」

「何ですか？」

「この先でエクレールが戦闘しているでござる。その救援に行ってはござらんか？」

「エクレちゃんが！？分かりました！」

映司はこの頼みを了承する。

「では、頼んだでござる。」

「了解です！」

映司はライドベンダーのエンジンを再び入れエクレの元に向かおうとした。

「行かせるかよ！」

ゴドウィンが鉄球を投げるが、

「おぬしの相手は拙者でござる。」

ダルキアンが刀を抜き、鉄球を弾く。

「火野殿、行くでござる。」

「ありがとうございます！」

映司はライドベンダーを発進させ、さらなる砦内部へと向かった。

「ぐぬぬぅぅ！」

「さぁ、勝負の続きでござるよ。」

ダルキアンは再び刀をゴドウィンに向けた。

・・・・

・

エクレは苦戦をしいられていた。

３ＶＳ１からして不利だが、もう一つ問題があった。

（くそ・・・まだ、映司との戦いの疲れがとれてないのか！？）

エクレを苦戦させていたもの・・・それは疲労だった。

映司との戦いは想像以上に疲れが溜まっていたらしく、今はかなり苦しい状態だった。

「なんや。ビスコッティの親衛隊隊長って案外弱いんやな。」

「なんか期待はずれだな～。」

「楽しくない。」

ジェノワーズの３人が口々に呟く。

「っ！この！」

エクレはジェノワーズの１人であるノワールに斬り掛かるが・・・

「せいや！」

「！？」

横からジョーヌが、巨大な斧を振るった。
エクレはとっさの判断でダガーを使いガードするが・・・
「ぐぁ！」
踏ん張りが利かず、そのまま壁に激突する。
「楽勝、楽勝！」
「さてと。そろそろ決めちゃう？」
「そうだね。」
エクレにジェノワーズが迫る。
エクレは立ち上がろうとするが、
（・・・駄目だ。力が入らない・・・）
力が入らず立つ事ができない。
その間にもジェノワーズが迫ってくる。
（私は・・・こんな所で終わるのか・・・くそ！）
エクレは必死に立ち上がろうとする。
しかし、どうやっても立つ事は無理だった。

（・・・ここまでか・・・。）

エクレは敗北を覚悟した。

その時。

「きゃあ！な、何！？」

「うあ！な、なんや！？」

「何これ！？」

突然ジェノワーズが騒ぎ始める。

「一体・・・何だ？」

エクレは顔をジェノワーズに向ける。

そこには、小さい何かに集られているジェノワーズがいた。

（あれは一体・・・。）

エクレが疑問に思っていると、黒い何かがエクレとジェノワーズの間に止まった。黒いそれには人が乗っており、乗っていた人はヘルメットを外し、黒いそれから降りた。そしてエクレの元に駆け寄った。

「エクレちゃん！大丈夫！？」

「え、映司！？」

その人物は、ここにはいないはずの映司であった。

「映司どうして！？」

「ダルキアンさんに教えてもらったんだ。この先でエクレちゃんが戦ってるって。」

「そうじゃない！どうしてミオン砦に来た！」

どうやらエクレは、映司がここに来た理由が知りたいらしい。

「それはエクレちゃん達を助ける為だよ。」

「私は来るなと言ったはずだ！」

「確かにそうだね。でも、エクレちゃんやシンク君達だけを戦わせて俺だけ見学なんて出来ないよ。」

「しかし・・・」

「それに・・・俺はもう迷わない。」

映司はポケットから3枚のコアメダルを取り出す。

「だから大丈夫。俺に任せて。」

「映司・・・すまない。」

エクレは映司にこの戦いを託してみる事にした。
映司はエクレを壁に寄りかからせる。そしてジェノワーズの方を向く
「あ～鬱陶しかった。」
「ほんまやな！ってあれ？1人増えてる！？」
「本当だ・・・しかも結構イケメン。」
ジェノワーズは先ほど集っていた物、カンドロイドを蹴散らしたが、
ここでやっと映司の存在に気がついた。
ちなみにノワールだけ他の2人とずれた感想を口にした。
「ここからは俺が相手をするよ。」
映司がそう言うと・・・
「本気で言ってるの？」
「そうやで。大した武器も持ってへんのに。」
「・・・やっぱりイケメンだな・・・」
やはりノワールだけはずれていた。
「いや、力ならあるよ。」
「「「？」」」

この発言にジェノワーズが首を傾げる。
映司はオーズドライバーを取り出し、腰に装着する。そしてタカ、クジャク、コンドルのコアメダルをドライバーにセットする。セットを終えるとドライバーを斜めに傾ける。
映司はオースキャナーを右手で持つ。
辺りに電子音が鳴り響く。
そしてオースキャナーでドライバーにセットされたメダルをスキャンした。
「変身！」
《タカ！クジャク！コンドル！　タ～～ジャ～～ドル～～～～！！！》
タカ、クジャク、コンドルのエフェクトが一つになり映司に重なる。
映司に重なると体から炎が吹き出す。
吹き出した炎を映司は振り払った。
そこにいたのは・・・
「え？」
「な、何や？」
「わぉ。」

ジェノワーズが驚く。

「映司・・・その姿は・・・一体。」

エクレも同様に驚いていた。

何故なら、そこにいたのはかつてエクレが戦った姿とは違っていたからだった。

タカヘッドは、タカヘッド・ブレイブへ。

オーラングサークルの図柄も3つが一つとなった不死鳥になっていた。

「言ったでしょ？エクレちゃん。俺はもう迷わないって。」

映司、否オーズは振り向いてエクレに言った。

今ここに、本当の力を取り戻した仮面ライダーオーズの炎のコンボ、タジャドルコンボが姿を現した。

飛翔と閣下と偉大なる王鳥（前書き）

第１６話です。

今回は短めです。

飛翔と閣下と偉大なる王鳥

未だに激戦が繰り広げられているミオン砦。

その内の一つであるジェノワーズとエクレールの親衛隊対決はある局面を迎えていた。

最初こそ互角だったが、エクレールの3連戦などの疲労などもあり、ジェノワーズが優勢であった。

しかし増援が現れた。その人物の名は火野映司。火野映司は迷いを振り払い今、本来の不死鳥へと姿を変えた・・・。

「す、姿が・・・」

「変わりおった。」

「・・・かっこいい。」

ジェノワーズは目の前で起こった出来事に目を丸くしていた。

「ちょっとまって！何でノワは外見の格好の感想を！？」

「そうや！さっきもあの男をイケメンとか、イケメンとか言ってたやないか！」

「え？だって本当の事だし・・・はっきり言ってガウ様よりイケメ

ンだし。」

やはりこの3人は馬鹿であった。

「よし。この感覚は何時もどうりだ。力が溢れてくる。」

映司は確かにタジャドルコンボの力を感じ取っていた。

「はぁっ！」

オーズは背中にクジャクの尾羽を模したクジャクフェザーを展開させる。

「「「え？」」」

ノワールの発言で口論になっていたジェノワーズもクジャクフェザーの展開に気づいた。

「せいや！」

オーズが力を込めると、クジャクフェザーは一枚一枚に分かれ、羽手裏剣としてジェノワーズに向かって行った。

「くっ！」

ジェノワーズはとっさの気転でジョーヌが斧を盾にし、その後ろにベールとノワールが隠れる事により羽手裏剣をガードする。

「はぁ！」

オーズはその間にクジャクウイングを展開し、大空へと舞い上がる。

「と、飛んだ！？」

これには、エクレも驚いた。

オーズは飛翔しながらドライバーにセットされたタカ、クジャク、コンドルを抜き取る。そしてタジャスピナーのスペリオルシールドを開き、中にあったセルメダルの内、３枚を取り出す。そしてタカ、クジャク、コンドルを抜き出した場所に置き、スペリオルシールドを閉じる。オースキャナーを右手で持ち、タジャスピナーにあるメダルをスキャンする。

《タカ！クジャク！コンドル！ギン！ギン！ギン！ギン！・・・ギガスキャン！》

タカ、クジャク、コンドルを使用しギガスキャンを行う。

すると、オーズは炎の鳥を纏う。

タジャドルコンボの必殺技の一つである〈マグナブレイズ〉である。

「ねぇ・・・あれ・・・」

「ちょ！あれはまずいやろ！」

「かっこいい！」

慌てるベールとジョーヌ。だが、ノワールは目を輝かせていた。
オーズはジェノワーズに向かって一気に滑空を始める。
「「こ、こっちきたぁぁぁぁぁ！」」
「おぉ～！！」
ノワールは更に目を輝かせる。
ベールとジョーヌは抱き合い悲鳴を上げた。
そして、
「せいやぁぁぁぁぁぁ！！！」
「「「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！」」」
オーズはジェノワーズに向かって突撃した。
ジェノワーズはオーズの纏った炎の鳥に巻き込まれ大爆発を起こした。
「す、すごい・・・これが・・・映司の・・・本当の力・・・。」
エクレは圧倒される
そして爆煙からオーズが飛翔しながら現れ、エクレの前に降り立った。

「映司・・・。」

「何とか終わったよ。」

オーズはエクレに話しかける。

爆煙が晴れ、そこには服が焼け下着だけとなり気絶したジェノワーズがいた。

「立てる？」

オーズはエクレに手を差し伸べる。

「あぁ、すまない。」

エクレはオーズの手を取ろうとした。

「何者だ。貴様・・・。」

突然背後から声が聞こえた。

オーズとエクレは声がした方向を向いた。

そこにいたのは・・・

「あ、あなたは・・・レオ閣下！？」

「・・・閣下？」

声の主は、ガレット獅子団代表領主であるレオンミシェリであった。

隣にはゴドウィンもいる

「何故レオ閣下がここに・・・」

「ちとガウルに用があってな。」

レオはガウルに用があるようだ。

「ねぇエクレちゃん。この人誰？」

オーズはレオなど知らないのでエクレに質問するが・・・

「映司！立場をわきまえろ！このお方はガレット獅子団の代表領主であるレオンミシェリ閣下だぞ！」

エクレに怒られてしまった。

「ガレットって確か・・・ビスコッティの隣国の？って・・・代表領主！？」

「おい、そこの赤鳥。」

驚くオーズだが、レオはオーズを呼んだ。

「確認するぞ。ジェノワーズを“一瞬”で倒したのはお前か？」

「え？まぁ・・・そうですけど。」

質問されたオーズは素直に答える。

「やはりな・・・面白い！」

突然レオは持ってきた斧を構える。ゴドウィンも同様に構える。

「え？」

「ジェノワーズは馬鹿とは言え、実力は本物だ。その3人を一瞬で倒したその実力・・・我々に見せてみろ！」

レオはどこか楽しそうである。

「・・・。」

オーズはしばらく黙る。

そして・・・。

「分かりました。相手になります。」

逃げれないと悟ったオーズは戦う覚悟を決める。

「映司・・・。」

エクレは心配そうに呟く。

「大丈夫。俺は・・・勝つ！」

オーズはタジャスピナーを構える。

オーズＶＳレオ＆ゴドウィン。

偉大なる王鳥と閣下＋１の戦いが始まる。

奮戦と桁違いと灼熱の力（前書き）

第１７話です。

今思ったらまだこの物語まだ１日もたってない・・・

奮戦と桁違いと灼熱の力

「でや！」

「ふん！」

レオの斧とオーズのタジャスピナーがぶつかる。

「ほう・・・なかなかの強固な盾だな。」

「それはどうも！」

レオはタジャスピナーの強度に感心する。

オーズはクジャクウイングを展開し、後ろに向かって飛び上がる。

「空も飛べるのか！面白い！」

レオは本気でこの戦いを楽しんでいた。

「はぁ！」

オーズは空中でクジャクフェザーを展開、羽手裏剣としてレオに飛ばす。

「あまいぞ！」

しかし、レオは斧を自身の目の前で高速で回転させ羽手裏剣をガー

ドする。

「嘘ぉ！」

「ぶるぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「っ！」

クジャクフェザーがガードされ驚くオーズだが、その間にゴドウィンが鉄球を飛ばしてくる。

オーズは鉄球を回避する。

「くらえ！」

「なぬぅ！」

地面スレスレを飛行しながらゴドウィンに対し、タジャスピナーの火炎弾で応戦する。そしてそのままゴドウィンに接近し・・・

「せいや！」

「ぬおぉ！」

タジャスピナーに炎を纏わせゴドウィンを殴る

ゴドウィンはガードできずにタジャスピナーの攻撃を受け、後ろに吹き飛ぶ。

「あの武器は盾だけではなく、遠距離も格闘もできるのか！」

レオはタジャスピナーの驚異の性能を見て驚くと同時に興奮する。

「映司・・・。」

エクレはただ映司を心配した。

「あの人、映司って言うの？」

「あぁ・・・てぇ、うわぁ！」

エクレの隣に突如としてジェノワーズが現れる。ちなみに下着姿である。

「な、何だお前達起きていたのか。」

「まぁな！痛かった・・・」

「痛かったよ・・・。」

ジョーヌとベールがマグナブレイズの威力の感想を述べる。

「で、あの映司って人何者？」

ベールが代表してエクレに質問する。

「あいつは・・・。」

（話していいのだろうか・・・。）

エクレは心の中で迷う。

「何者なの？そしてあの姿は何？」

「てぇ、近い近い！」

ノワールが目を輝かせてエクレに訪ねる。

「ごめんな。さっきからノワがこんな調子なんよ。」

ジョーヌはエクレに謝罪する。

「そうか・・・。」

エクレは思わずため息が出た。

「とりあえず・・・あいつのフルネームは“火野映司”だ。出身は勇者と同じ世界だ。今はこれだけしか教えられん。」

「火野映司・・・。」

ノワールの目が更に輝いたのだった。

一方でオーズＶＳレオ・ゴドウィンの戦況は・・・

「ハァ・・・ハァ・・・。」

「なかなかやるな・・・赤鳥。」

「こいつ・・・しぶといですな閣下・・・。」

2人がかりのレオとゴドウィンに対し、オーズは全く引けを取らい。むしろ、今はオーズ優勢である。

「このままじゃあ・・・決着は着きそうにない。どうすれば・・・。」

映司は必死に考え始めた時・・・。

『おい、映司。』

（アンク！？）

再び頭の中にアンクの声が響きわたる。

『映司。今お前には何が必要だ？必要な物をイメージしろ。そうすればこの世界の力が一時的に叶えてくれるはずだ。』

（俺が今必要な物・・・。）

『そうだ。強くイメージしろ映司。お前ならできるはずだ。』

そうして再びアンクの声は聞こえなくなった。

「俺に今必要な物・・・。」

映司はイメージする。今この現状を打破できる存在を・・・。

（・・・っ！これだ！）

遂に必要な物を見つける。

「俺に・・・力を！」

映司が空に向かって叫ぶ。

すると・・・

「何だ！？」

オーズの周りの大地から7つの光が飛び出す。その現象に驚くエクレ。

「この力は・・・もしや！？」

「まさか・・・フロニャ力か！」

レオとゴドウィンは一気に警戒する。

オーズはタジャスピナーのスペリオルシールドを開く。すると7つの光はタジャスピナーに納まる。

そしてスペリオルシールドを閉じ、オースキャナーでタジャスピナーをスキャンする。

《ライオン！トラ！チーター！ライオン！トラ！チーター！・・・ギガスキャン！》

タジャスピナーに黄色のエネルギー弾が生成される。そしてそのエネルギー弾は熱を発生させ、やがて灼熱のエネルギー弾となる。

「はぁぁぁぁぁ・・・」

オーズはその狙いをレオに定める。

そして・・・

「せいやぁぁぁぁぁぁ！」

オーズは灼熱のエネルギー弾を発射する。

エネルギー弾は真っ直ぐレオに向かう。

「くっ！」

レオはエネルギー弾を迎撃しようとするが・・・

「っ！？何だこの高熱は！？」

遠くにいながらエネルギー弾の熱を感じ取るレオ。

「迎撃できない！？」

あまりの高熱に近づけない。

気づけばエネルギー弾は近くまで迫っていた。

「っ！しま・・・」

やられる・・・。

そう思った時だった。

「閣下！」

ゴドウィンがレオの前に立つ。

「くぅぅぅぅ！」

エネルギー弾を受け止めるゴドウィンだったが・・・

バキィ！

斧は粉々になった。

「何だと！？」

斧以外に武器はない。という事は・・・

「がぁぁぁぁぁ！」

エネルギー弾をモロに受けるゴドウィン。そのままエネルギー弾と共に壁に激突した。

「ゴドウィン！」

レオが叫ぶが・・・

壁の下にいたのは・・・普通よりでかいけものだまだった。

「・・・。」

レオは言葉を失う。

そしてレオはオーズを見る。

エネルギー弾の通った後は高熱により焦げていた。

「なぁ・・・・・・。」

レオの中に恐怖心が生まれる。

（・・・勝てるはずがない・・・奴は・・・化け物か！？）

レオは心の中で絶叫した。

「嘘・・・将軍が・・・・」

「けものだまに・・・・。」

「・・・・。」

ベールとジョーヌはまるで夢でも見ているようだった。

ノワールもさすがに唖然とした。

「あれが・・・迷いを振り切った映司・・・・。」

エクレもまた唖然としていた。

（私と戦った時は・・・一体何だったんだ・・・桁違いじゃないか！）

エクレはあの時、もし、あの力と戦ったらと思い戦慄したのだった。

休戦と輝力と鉄拳制裁（前書き）

第１８話です。

次回は短めになると思います。

休戦と輝力と鉄拳制裁

オーズの放った一撃は、その場にいた者達を驚かせた。

ジェノワーズはやられた事ないゴドウィンがけものだまになったこと。

レオはオーズの放った一撃のあまりの威力に。

エクレは本気のオーズ、否映司の実力を見て・・・

「ちょっとやりすぎたかな・・・。」

オーズは少し後悔する。

やがてレオがオーズを見る。

しかし、その眼は先ほどまでの好戦的な眼ではなく、恐怖を抱いた眼だった。

オーズは何を思ったのか、レオに向かって歩き始める。

「くっ！」

近づいてくるオーズに対し、斧を構えるレオ。

オーズはレオの前に来ると、斧を右手で掴み刃身を下に下げる。

「何の真似だ？赤鳥よ。」

「・・・もう、終わりにしませんか？」

「・・・何？」

オーズはレオに対し、休戦を申し出る。

「あなたがここに来たのは、俺と戦う為ではないでしょ？さっきエクレちゃんとの会話を聞いていましたけど、あなたはガウルって言う人に用があるんでしょ？だったらもう終わりにしましょうよ。」

「・・・。」

このオーズの言葉に黙り込むレオ。

「それに・・・俺とあなたには元々戦う理由がありません。だから、ねぇ？」

「・・・分かった。」

オーズの言葉を受け休戦を申し入れるレオ。

「その前に・・・聞いていいか？」

「何ですか？」

「お前、名前は？」

どうやらレオはオーズの名が知りたいようだ。

「火野映司と言います。」

「火野映司か・・・覚えておくぞ。」

そのままレオはオーズの元を離れる。そして、観戦していたジェノワーズの前に行き・・・

「この・・・馬鹿どもがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「「「いやぁぁぁぁぁ！」」」

レオはジェノワーズに対し鉄拳制裁を与える。

ゴン！×3

鈍い音がすると野球ボール位の大きさのたんこぶを作り気絶するジェノワーズ。

レオはジェノワーズの首根っこを掴み、壁の前へ。

「・・・はぁ！」

レオ渾身の一撃により壁が壊れる。

「「え？」」

そこには、つばぜり合いをしている・・・シンクとガウルがいた。

2人はレオの方を向く。

「あ、姉上？」

「か、閣下？」

冷や汗だらだらな2人。

「戦場は遊び場じゃない！この・・・ガキどもがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「「ひぃぃぃぃぃ！」」

この後シンクとガウルはジェノワーズと同じ運命をたどった。（ちなみに気絶はしなかった。）

「うぁ・・・痛いよあれは。可哀相に・・・。」

ジェノワーズ及びシンクとガウルが鉄拳制裁を受けていた光景を見ていたオーズは思わず言葉を漏らす。

「さてと・・・。」

オーズはレオの行った方向ではなく、エクレがいる方向に行く。

「まぁ・・・何だ。・・・お疲れ様。」

「ありがとうエクレちゃん。」

エクレはオーズに労いの言葉をかける。

「ん？おい映司。」

「何？」

「盾が光っているぞ。」

「え？」

盾が光っていると言われ、タジャスピナーを見るオーズ。確かにタジャスピナーは黄色く輝いていた。

「何だろう・・・。」

オーズはタジャスピナーのスペリオルシールドを開ける。

すると・・・。

ピキン。×7

タジャスピナーに納められていた7枚の猫系のコアメダルは音を立て割れた。

「1回きりか・・・。」

あくまでもこのメダルは一時的な物らしい。オーズは理解した。

「ふぅ・・・。」

オーズは一息入れ、オーズドライバーを水平にし変身を解除する。
そして仮面ライダーオーズから元の火野映司の姿に戻った。

「・・・あれ？」

「どうした？」

映司は再び違和感を感じた。

「いや・・・普通あの姿になると疲れがドッと出るんだけど・・・
その疲れがないんだよ。」

映司の感じた違和感。それはオーズのコンボ使用後に現れる急激な
疲労がなかった事である。

「なるほど・・・だが私に言われてもな・・・。」

「そうだよね。ごめんごめん。」

とりあえず、この問題は後回しにする。

「それよりも、姫様の所に行かなくては・・・。」

エクレは本来の目的を思い出し口にする。

「そうだった！コンサートが！」

映司も思い出す。

「早く行かなくては・・・くっ！」

エクレは立ち上がるがもうふらふらである。

「大丈夫？」

「くそ・・・疲労さえなければ・・・。」

今思えばエクレは今日1日だけで3連戦している。その分の疲労がありもはや立つ事がやっとであった。

「でも医務室で休んでたよね？」

「あの時は映司のパンツ講座のせいで休めなかったんだ！」

「うっ・・・ごめん。」

確かにエクレは最初にオーズとの戦闘後医務室にいたが、映司がシンクに対して開いたパンツ講座のせいで休めなかったのだ。おまけに兄も参加していた。

「う～ん・・・そうだ！エクレちゃんまた背負って行くよ！」

「いやそれは駄目だ。」

映司の提案は却下された。

「何で？」

「背負ってもらうのは・・・は、恥ずかしい／／／。」
エクレは頬を赤くする。
「肩を貸してもらうだけでいい。」
「いや、でも・・・。」
映司は何かいい考えはないかと考える。
「そうだ！」
「何だ？何かいい案でも浮かんだのか？」
「うん！じゃあ実行するよ。」
映司は我ながらナイスな考えを実行した・・・

ーーーーーー

「あぁぁぁぁぁ！どうすりゃいいんだ！」
ガウルが頭を抱えて叫ぶ。
「コンサート開始まで後２０分！どう急いだって間に合わねえぇぇぇぇ！」

ここはミルヒのいた応接室。

現在大半のメンバーはここにいた。ちなみにレオ閣下は帰ってしまいダルキアン、ユキカゼは外にいる。

「そういえばエクレはどこでありますか？」

リコッタがエクレがいないと言い出す。

「そういえば見てないね。どこ行ったんだろ・・・。」

シンクも同様の反応。

「とりあえず！どうやったらこの状況を打破できるか考えてくれ！」

ガウルの言葉に皆はどうすべきか考え始める。

沈黙が部屋を支配する・・・

だが、この沈黙はある男によって破られる。

「失礼しま～す・・・。」

誰かが部屋に入ってきた。

「この声って・・・まさか・・・。」

シンクはまさかと思い入り口を見る。
そこには・・・。
「あ、シンク君久しぶり！」
「映司さん！」
映司がいた。しかも。
「エクレ・・・なにしてるの？」
「う、うるさい！み、見るな！／／／。」
シンクは驚いた。何故なら・・・

エクレが映司にお姫様抱っこをされていたからである。
「あ！エクレであります！て・・・あれ？」
「ほう・・・これは・・・。」
「映司さん・・・まさかですね。」
リコッタ、ガウル、ミルヒが順番に感想を口にする。
「うぅ・・・み、見ないでくれ・・・。」

軽く涙目になるエクレ。

「とりあえず・・・ソファーあるかな？」

「あ、ならあそこに。」

「ありがとうございます、姫様。」

ミルヒにソファーを教えてもらいエクレをソファーに下ろす映司。

「これでよしっと・・・。」

「あ、あの～・・・。」

エクレを下ろした映司にリコッタが近づく。

「君は？」

「初めましてであります。自分はビスコッティ王立学術研究院主席のリコッタ・エルマールと言うであります！」

「よろしく。俺は火野映司。」

互いに自己紹介をする映司とリコッタ。

「それにしても、先ほどのエクレは嬉しそうでありましたな！」

「え？そうなの？」

リコッタの突然の発言。

「な、何でだ！」

「だってエクレ尻尾がかなりフリフリしていたでありますよ。」

「うぅ・・・／／／。」

顔が真っ赤になるエクレ。

「ところで姫様。」

「何ですか？映司さん。」

「あの、コンサートの方は・・・。」

映司が質問すると・・・

「「「「そうだった！」」」」

どうやら映司出現で忘れていたようだ。

「どうする！？後２０分切ったぞ！」

ガウルがまた慌て始める。

「ねぇエクレ。」

「何だ勇者？」

シンクは何を思ったかエクレに話しかける。

「輝力って運動とかのサポートとかできる？」
「とりあえずできるが・・・どうする気だ？」
「それはね！」
シンクは突然立ち上がる。そしてミルヒを背負う。
「これだよ！」
「・・・何だそれは？」
エクレが疑問を口にする。
「これは勇者超特急だよ！」
「「「勇者超特急？」」」
そこにいたもの全員の声が揃う。
「輝力を使って走力を強化するんだよ！」
「なるほど・・・考えたな勇者。」
エクレは珍しくシンクを褒めた。
「それじゃあ・・・行ってきます！」
「輝力の使い過ぎに注意しろよ。」

「分かった！行きますよ姫様。」

「はい。」

そう言うとシンクは脚に輝力を集中させる。

そして一気に外に向かって飛び出して行った。

尋問と超特急と忍び寄る影（前書き）

第１９話です。

最近タジャドルの空中戦を板野サーカスやったらすごくない？と思う今日この頃です。

尋問と超特急と忍び寄る影

シンクがミルヒを背負い、勇者超特急なるものでコンサート会場を目指している頃・・・。

「さぁ、エクレ！さっさと白状するであります！」

「いや・・・だから・・・。」

「逃げるのは無しでありますよ！早く映司様との関係を白状するであります！」

現在リコッタによるエクレへの尋問が始まっていた。

「俺はガウル・ガレット・デ・ロワだ！ガウルで良いぜ！」

「俺は火野映司と言います。俺は映司で良いよ。」

「おう！よろしくな映司！」

「よろしくガウル君。」

エクレが尋問されている横では、映司とガウルが自己紹介を済ませていた。

すると横からジェノワーズが現れる。

「私はガウ様直属の親衛隊ジェノワーズの1人ベール・ファーブルトンと言います。」

「同じくジェノワーズの1人、ジョーヌ・クラフティや！よろしくな！」

「同じくジェノワーズの1人、ノワール・ヴィノカカオ。よろしく映司。」

「よろしくね。」

気絶（嘘）から復帰したジェノワーズとも自己紹介を済ませた映司。

「さぁ！白状するであります！」

「だから違うと言っている！」

リコッタに必死に抵抗するエクレ。

「いや！これはきっと何かある！」

まさかのガウル参戦。

「いくら動けなかったとは言え、お姫様抱っこは行きすぎている！これはただならぬ関係に違いない！」

ガウル参戦がジェノワーズにも火を点ける。

「そうですよ！」

「お姫様抱っこなんてうらやましいわ！」

「白状しようか・・・ねぇ？」

ベールとジョーヌは明らかに遊び半分だが、ノワールは明らかに違った。背後には黒いオーラが見えたとか見えなかったとか。

この光景を見ていた映司は・・・

「・・・平和だな～。」

平和な時と認識していた。

ミルヒのコンサートが始まるまでエクレは質問の嵐を受けるのであった。

――――――

その頃シンクとミルヒはと言うと、もうすぐでコンサート会場に着く所まで来ていた。

現在はパラディオンが変化したスケボー（？）状のトルネイダーに乗っていた。

「あと、もう少しだ！」

シンクはやっと見えたコンサート会場にテンションが上がる。

「姫様とばしますよ！掴まって下さい！」

「は、はい！」

更に輝力を高めトルネイダーのスピードを上げる。

そのままコンサート会場に向かって飛翔した。

・

・

・

「コンサート開始まで後１０分・・・まだか勇者殿。」

コンサート開始の裏方では更に慌ただしくなっていた。

実際にコンサートの開始時間を遅らせるとか、代役を立てるなどの提案があったがそれは、ミルヒのコンサートを楽しみに待っている人々に申し訳ないとして却下されている。

「騎士団長・・・このままでは・・・。」

「大丈夫だ。勇者殿達を信じよう。」アメリタの言葉にロランが返事をした時だった。

「すいません！お待たせしました！」

「姫様！」

ミルヒが帰ってきたのだ。

「姫様、お疲れだと思いますがすぐにコンサートの準備に入ります。リハは無しでぶっつけになります。」

「分かりました。急ぎましょう。」

ミルヒは早速準備にとりかかる。

「勇者殿は？」

「輝力の使い過ぎで今はぐったりしています。」

「そうか・・・勇者殿に感謝しなくてはな・・・。」

メイドの報告を聞いたロランはそう呟いた。

「ゼェ・・・ゼェ・・・輝力の使い過ぎって・・・ゼェ・・・こんなに疲れるのか・・・。」

シンクはベンチに倒れ込んでいた。

「・・・姫様は・・・無事につけたかな・・・。」

ミルヒの心配をするシンク。

しばらくすると・・・

「・・・歌が聞こえる。」

歌声が聞こえてきた。どうやらコンサートには間に合ったようだ。

「良かった・・・良い歌だな・・・。」

コンサートが無事に行われた事に安心したシンクは、ミルヒの歌声に耳を傾けるのだった。

ーーーーーー

ミルヒのコンサートが定刻どうりに始まった頃。

コンサート会場の近くの路地裏の辺りは静まり返っていた。人影などは一切ない。

そこに1人佇む全身をローブに包んだ謎の人物がいた。その人物の手には2枚の銀色のメダル、セルメダルが握られていた。

その人物は、その内の1枚を上に向かって投げる。さらにもう1枚を親指に乗せ弾く。すると空中でメダルがぶつかる。

ぶつかった瞬間、メダルはどす黒いオーラを出しながら増殖する。やがてそれは異形の怪物になり謎の人物の前に降り立つ。

「・・・お呼びでしょうか、我が主よ。」

異形は謎の人物に跪く。

「命令だ。あのコンサート会場にいるビスコッティ共和国の代表領主、ミルヒオーレ・フィリアンノ・ビスコッティを誘拐してこい。それが出来なければ・・・抹殺しろ。」

「御意。」

謎の人物は異形に命令する。

異形は命令どうりコンサート会場に向かった。

謎の人物は路地裏の闇に消えた。

不適な笑みを浮かべながら・・・。

異変と乱入とメダルの怪人（前書き）

第２０話です。

早くフォーゼ＆オーズが見たい！

異変と乱入とメダルの怪人

コンサート会場の正面口。ここに数名の騎士達が警備にあたっていた。

正面口でもミルヒの歌は聞こえてくる為、騎士達に不満はなかった。

「姫様の歌はやっぱりいいな。」

「あぁ、心が癒されるよ。」

「これも勇者様のおかげだな。」

騎士達は雑談で盛り上がる。実際警備はしているが、襲ってくる者などいない為こうしてのんびりできる。

「それでさぁ・・・ん？」

「どうした？」

「いや・・・あれ。」

騎士の1人が何かに気づき、その場所に指を指す。

「何だあれは？」

「さぁ？」

騎士達は気にせず雑談を再開する。

その時だった。

「貴様らの欲望・・・貰うぞ　。」

突然声が聞こえ。

「「「はぁ？」」」

騎士達が声した方に振り向いた。

ガス！

「！？」

突然騎士の1人が頭を異形の手に掴まれる。

「ぐぎがぁぁぁぁぁ！」

頭を掴まれた騎士は叫び始める。

騎士からはまるでメダルが互いにぶつかり合う音がした。

しばらくすると音はなくなり、騎士は地面に倒れる。

「お、おい！しっかりしろ！大丈夫か！」

「・・・。」

ようやくこの事態に頭がまわった他の騎士がその騎士に声をかけるが反応がない。目を見るがその目には生気がなかった。

「貴様何者だ！」

「仲間に何をした！」

騎士達が何かに向かって剣を構える。

が・・・。

「欲望を吸ってやったまでだ。安心しろ、おまえ達も後を追う。」

異形はそう言うと騎士達に向かって行った。

コンサート会場の正面口から騎士達の苦痛の叫びがこだました。

・　・　・　・　・

「はぁ・・・本当なら客席で聞いていたんだけどな・・・。」

シンクはベンチに寝そべりながら呟く。

実際この疲労、もといミオン砦の戦いがなければリラックスしてミルヒのコンサートを聞く事ができたのだ。

「はぁ・・・もったいない。」

シンクからは溜め息混じりに呟く。
「ほう・・・ここにも邪魔がいたか・・・。」
「！？」
突然声がし、シンクはベンチから飛び起きる。そして声の主を見た。
「な、何だ・・・あれ？」
シンクが見たのは異形だった。
「貴様の欲望も吸い取ってやろう。」
異形がシンクに近づく。
「っ！」
シンクは後退し、パラディオン（棒）を出現させ、それを構える。
「ほう・・・いい度胸だ。」
異形も構える。
「はぁ！」
シンクはパラディオン（棒）を異形に向かって放った。
「甘いな・・・。」

パラディオンは異形の手に掴まれる。

「なぁっ！」

「ふん！」

「うがぁ！」

異形はシンクを投げ捨てる。投げ捨てられたシンクは床に叩きつけられる。

「良いだろう・・・貴様の欲望を吸い尽くすのは後にしてやる。」

異形はそう言うと再びシンクに襲いかかった。

・・・・・・

一方、ミルヒのコンサートは順調に進んでいた。

今は3曲目が歌い終わった所である。

観客はテンションは最高潮にたっしていた。

ミルヒも観客の期待に応えるべく、４曲目を歌おうとした時。

ドガン！

何かが壊れる音がした。

「な、何？」

ミルヒも驚いたが、観客も唖然としていた。

そして・・・

「がぁぁぁぁぁ！」

シンクが悲鳴を上げながら転がってきた。

「ゆ、勇者様？」

ミルヒは突然シンクが転がってきた為驚いたが・・・

「勇者様！ち、血が！」

シンクは額から血を流していた。

「姫様さがって！」

シンクはパラディオンを構える。

「案外丈夫なのだな・・・。」

「へぇ？」

突然声が聞こえた方を見ると異形が歩いてくる。

「もう少し楽しませろ。ビスコッティの勇者よ。」
異形は歩みを止めずシンクに近づく。
観客は突然の事にポカンとしている。
「姫様早く！」
「させん！」
シンクがミルヒの脱出を促すが、異形は腕から光弾を放ち向かいにあった裏手への入り口を破壊する。
すると、事態を察した観客が外に逃げようとするが、
「あ、開かないぞ！どうなってる！？」
扉が開かず脱出が出来ない。
「一つ言い忘れていたな。扉には細工を施してある。脱出は不可能だ。」
「貴様！」
シンクはパラディオンで殴るがやはりダメージはない。
「もっと楽しませろ。ビスコッティの勇者よ。」
異形はパラディオンをはじく。シンクは後退する。

（どうする・・・輝力使い果たした僕に何ができる・・・いや、やるんだ。僕がやるんだ！）

シンクは再びパラディオンを構えた。

ーーーーーーー

「おい！何だこれは！？」

ミオン砦にもこの事態は放送されていた。

元々コンサートは全国に向けても放送されていた為、ミオン砦も例外ではない。

「こいつは・・・魔物？」

「いや、魔物にしては言語能力がしっかりしすぎや。」

「じゃああれは一体・・・」

エクレ、ジョーヌ、ノワールが順次に呟く。

「あれは・・・。」

映司はなぜか嫌な予感がしていた。

ウホ×3

「ん？」

映司の足元に何かがぶつかる。映司は足元を見ると・・・

「これは、ゴリラのカンドロイド？・・・まさか。」

映司はゴリラカンドロイドを手に持ち、画面に映る異形に近づける。近づけた事によりゴリラカンドロイドの反応が強くなる。

「まさか、ヤミー！？」

映司は部屋を飛び出した。

「映司！どこに行く！」

エクレが映司に気づき声をかけるが気づいた時には映司はいなかった。

「こうしちゃあいられねえ！俺達で援護に・・・って映司は？」

「分からん・・・突然出て行った。」

その場所にいた者達は映司の素早い行動に驚くのだった。

映司は止めていたライドベンダーに乗りミオン砦を出た。

（何でこの世界にヤミーが・・・という事はグリードも・・・。）

映司は思考をめぐらせる。

（とにかく急がないと。シンク君や姫様が危険だ！）

ライドベンダーのアクセルを更に入れ、速度を上げる。

（そういえば・・・。）

映司はある事を思い出す。

（なんだか、あのヤミーはどことなくカブトガニに似ていたな・・・
という事は・・・俺の知らないコアメダルがあるのか？）

映司はそんな事を考えながら、異形　カブトガニヤミーがいるコン
サート会場に向かって行った。

流血と急行と甲殻類のヤミー　改正版（前書き）

第２１話です。

ＭＯＶＩＥ大戦公開日と学校の期末テストが重なると言うまさかの事態に直面してしまいました・・・。

流血と急行と甲殻類のヤミー　改正版

映司がミオン砦を出発してから数十分・・・。

コンサート会場の正面口前に一台のバイクが爆音をたてながら停止する。

ヘルメットを外しながら映司はライドベンダーから降りる。

「これって・・・。」

目の前には、カブトガニヤミーに欲望を吸われた騎士達が数十人以上倒れていた。

「これも全部あのヤミーが・・・。」

直感でヤミーの仕業と判断する映司。

「急がないと！」

正面口を入り入り口を捜す。

しかし・・・

「何だこれ！？」

入り口には粘液のような物が付着しており、その粘液が扉全体を覆っていた。

「ここからは無理か・・・あとは・・・・。」
映司は舞台裏へと向う。
その途中。
「ぐ・・・・。」
突然うめき声が聞こえた。
「今の声は・・・・」
映司はこの声に聞き覚えがあった。辺りを捜すと・・・
「ロランさん！」
そこには、傷つき倒れたロランがいた。
「映司・・・殿か・・・・」
ロラン映司に気づく
「大丈夫ですか！？しっかり！」
「私の事はいい・・・姫様と勇者殿が・・・・。」
映司は倒れていたロランを起こし声をかける。
「映司殿・・・・頼む・・・・姫様と勇者殿を・・・・助けてくれ・・・・
私はもう・・・・。」

「ロランさんしっかりして！」

「私はもう・・・頼む・・・映司殿の・・・不思議な力で・・・やつを・・・。」

ロランはそう言うと意識を失った。

「ロランさん！・・・くっ！」

映司はロランを横たわらせ、舞台裏に向かって走った。その際にオーズドライバーを装備し、コアメダルをセットしながら・・・。

・　・　・　・　・

「はぁ！」

シンクはパラディオンをカブトガニヤミーに向けて振るう。

「甘いな。」

しかしカブトガニヤミーはそれを軽く弾く。

「なぁ！？」

「ふん！」

「ぐがぁぁ！」

カブトガニヤミーの反撃を受けダメージを負うシンク。
「何なんだよ・・・このカブトガニみたいなのは。」
シンクはカブトガニヤミーの異様な強さに思わず声を漏らす。
「どうした。来ないのか？」
「このぉ！」
シンクは高く飛び上がる。
「ほう・・・。」
「高槻流棒術！」
シンクはパラディオンを構え、
「上段唐竹割り！」
パラディオンをカブトガニヤミーに向けて真上から振り下ろす。
バスン！と凄まじい音がなる。
「・・・そんな物か。」
「う、嘘・・・。」
パラディオンは見事にカブトガニヤミーが右手でがっちりと掴んで

いた。

「今度はこちらの番だな。」

カブトガニヤミーはそう言うとパラディオンを引きシンクを寄せる。

そして、左手でシンクの首を掴む。

「うぐっ！」

首を掴まれ苦痛の声を上げるシンク。

「ふん！」

「ぐがぁ！」

カブトガニヤミーは掴んでいたパラディオンを捨て、シンクの腹を思いっきり殴る。

「人の身体がどこまで耐えられるか・・・見せてもらおう。」

そう言うと再びシンクの腹を殴りつける。

「がぁっ！」

悲鳴を上げるシンクだが、カブトガニヤミーは腹に対しラッシュを開始する。

「勇者様！」

物陰に避難していたミルヒが思わず叫ぶ。

だが、ミルヒの叫びなど無視しカブトガニヤミーはシンクを殴り続ける。

「ぶはぁ！」

とうとうシンクは血を吐き始める。

「はぁ！」

「ぶがぁぁ！」

それでもカブトガニヤミーのラッシュは止まらずシンクは血を吐き続ける。

「こんなものか・・・。」

カブトガニヤミーはミルヒのいる物陰の前にシンクを投げ捨てる。

「勇者様！」

ミルヒはシンクに駆け寄る。

「勇者様しっかりして下さい！勇者様！」

ミルヒは必死にシンクを呼び続ける。

その間にもカブトガニヤミーはミルヒに向かって迫る。

「ハァ、ハァ・・・」

「勇者様！？」

「ほう・・・まだ立てか。」

シンクは力を振り絞り立ち上がる。そして落ちていたパラディオンを掴み再び構える。

「姫様には・・・指一本触れさせない！」

血だらけになりながらも必死にミルヒを守ろうとするシンク。

「いい度胸だ。だが・・・それまでだ。」

「っ！？」

カブトガニヤミーはシンクの頭を掴む。

「貴様の欲望は貰うぞ・・・。」

「うぁぁぁぁぁぁ！」

カブトガニヤミーの能力によりシンクの欲望がセルメダルとなり始める。

「勇者様！」

「さらばだ・・・ビスコッティの勇者よ。」

「がぁぁぁぁぁぁ！」

カブトガニヤミーは勝利を確信した。

その時。

「やめろぉぉぉぉぉ！」

「何！うが！」

何かがカブトガニヤミーに向かってタックルを繰り出す。

完全に意表を突かれたカブトガニヤミーはシンクを離してしまい地面を転がる。

「シンク君！姫様！大丈夫！」

タックルを繰り出した人物、映司はミルヒの元に駆け寄る。

「私は大丈夫です。でも勇者様が・・・。」

「シンク君が！？」

映司は倒れていたシンクを抱き起こす。

「シンク君しっかりして！」

「映司・・・さん？」

辛うじて意識があった為シンクは映司を認識する。

「頑張ったねシンク君。後は俺に任せて。」

「はい・・・ありがとう・・・ございます・・・頼みましたよ・・・。」

シンクの意識を失った。

「姫様、シンク君をお願いします。」

「映司さんは！？」

「俺は・・・あいつを倒します。」

映司は立ち上がりカブトガニヤミーを睨む。

「分かりました・・・無茶しないで下さいね。」

「分かりました。」

映司は笑顔で答える。

「貴様！何者だ！」

カブトガニヤミーは声を荒げる。

「俺は・・・こういう者だ！変身！」

映司はオーズドライバーを斜めにし、オースキャナーでメダルをスキャンした。

《タカ！クジャク！コンドル！タ～～ジャ～～ドル～～～～～！！》

映司は一瞬で仮面ライダーオーズタジャドルコンボへと姿を変える。

「貴様・・・オーズか！」

カブトガニヤミーが叫ぶ。

「そうだ・・・俺は・・・仮面ライダーオーズ！」

「仮面ライダー・・・オーズ。」

ミルヒは気を失っているシンクを抱きながら目の前にいる赤き不死鳥の名を呼んだ。

操作と救援とブレイズレッド（前書き）

第２２話です。

もう１１月も終わりですね。

操作と救援とブレイズレッド

「すごい・・・まるで不死鳥みたい・・・。」

ミルヒは今の映司、オーズ　タジャドルコンボを見る。

「お、おい何だあれ・・・。」

「変身したぞ。」

「かっこいい！」

取り残された観客達がそれぞれの思いを口にする。

「・・・はぁ！」

オーズは出入り口に向かってタジャスピナーから火炎弾を放ち扉を破壊する。

「早く避難して下さい！」

オーズの言葉により観客達はその出口から避難を始める。

「オーズ・・・貴様！」

「今から俺が相手だ！」

オーズはカブトガニヤミーに向かっていき、殴るが・・・

「っ！か、固い！」

カブトガニヤミーの甲殻は固く素手では太刀打ちできそうにない。

「今度はこちらから行くぞ！」

カブトガニヤミーはオーズに対し拳を振るう。

「何の！」

オーズはタジャスピナーでガードする。

「せい！」

「ぐふ！」

オーズは回し蹴りで反撃。コンドルレッグのストライカーネイルにより斬撃のようになる。カブトガニヤミーはガードできず回し蹴りを受け辺りにセルメダルが散らばる。

「その忌々しい炎の力・・・やはり変わらんな！」

「ぐ！」

カブトガニヤミーは腕から光弾を放ち、光弾はオーズの肩をかすめる。

「あの時もそうだ！我の主はその力に敗れた！」

「こいつ！」

カブトガニヤミーは鋭利な爪で攻撃するが、オーズはそれをさばく。

「その炎の力でまた我らを滅ぼそうとするか！オーズ！」

「がぁ！」

ほぼ零距離からの光弾を受けオーズは吹き飛ぶ。

「だが・・・オーズよ！我が貴様をここで倒す！」

「っ！」

カブトガニヤミーは倒れていたオーズに飛びかかるが、横に転がる事で回避する。

「このヤミー・・・さっきから何を言っているんだ？」

オーズはカブトガニヤミーの言っている事の意味が理解出来なかった。

「オーズよ、今から面白いものを見せてやろう・・・。」

そうカブトガニヤミーが言うと・・・

「ぐぁ！」

オーズは背後から攻撃を受ける。

「何だ！？」

オーズは振り向き背後を見た。

そこには・・・剣を構えたビスコッティ騎士団の騎士がいた。

「な、何で！？ってうわ！」

再び騎士が攻撃してきた為、オーズはこれを回避する。

「驚いたかオーズよ。我に欲望を吸い取れた人間は我の思いどうりに動く・・・つまり“操り人形”だ。」

カブトガニヤミーは自身の能力を口にする。

「そんな事が・・・くっ！」

オーズはカブトガニヤミーの能力に驚くが、騎士の攻撃が続き考えている暇などなかった。

しかも・・・

「こ、これって・・・。」

ミルヒは唖然とする。既にそこにはカブトガニヤミーに欲望を吸い取れた騎士達がこちらに迫っていた。

「さて・・・どうするオーズよ。何の罪の無い騎士達をお前は倒せ

るか？」

「くっ・・・。」

オーズはタジャスピナーを構えるが騎士達が邪魔で攻撃できない。

「・・・そうだ、一つチャンスをやろう。」

「チャンス？」

突然カブトガニヤミーが申し出てくる。

「元々我の目的はそこにいるミルヒオーレ・フィリアンノ・ビスコッティを捕らえる事にある・・・ミルヒオーレを渡すならこの騎士達は解放してやろう。」

カブトガニヤミー本来の目的、それはミルヒの誘拐である。つまり騎士達は人質なのである。

「目的は・・・私・・・。」

ミルヒは驚きを隠せない。

だが、

「・・・私が行けば・・・騎士の皆さんは助かるんですよね？」

「姫様！？」

ミルヒの言葉に動揺するオーズ。

「無論だ。」

「だったら・・・・。」

ミルヒが何か言いかけた、その時・・・

「その必要はないぜ！」

元気な男の声が聞こえた。

「今の声って・・・・。」

オーズが声の主の名前を言おうとすると・・・

「裂空・・・一文字ぃっ！」

鋭い刀による一撃が騎士達に直撃する。

「今のは・・・・。」

ミルヒは今の一撃に見覚えがあった。

「よぉ！待たせたな！」

「ガウル君！」

オーズが破壊した出入り口にはガウルが仁王立ちしていた。

更にミルヒの周りにはジェノワーズが。オーズの前にはダルキアン

とユキカゼが現れる。

「どうして・・・。」

オーズが疑問に思う。

「理由などないでござるよ。ただ仲間のピンチを救いに来ただけでござる。」

野太刀を構えダルキアンが質問に答える。

「まぁ、そういうこった。こいつらは俺達に任せな！映司はあの化け物に一発かましてやれ！」

「みんな・・・ありがとう！」

オーズは立ち上がりカブトガニヤミーを睨む。

「よくも邪魔を・・・。」

カブトガニヤミーはご立腹のようだ。

「映司殿、これを。」

ダルキアンはオーズにあるものを渡す。

「これって・・・！」

「映司殿が乗っていた乗り物にあった剣でござる。あった方が楽かと思って持ってきたが、正解でござるな。」

「ありがとうございます！ダルキアン卿！」

「うむ。絶対奴を仕留めるでござるよ。」

「はい！」

オーズはダルキアンから受け取った剣　メダジャリバーをカブトガニヤミーに向ける。

「・・・行くぞ！」

オーズはそのままカブトガニヤミーに向かって走る。

「何を！」

カブトガニヤミーは騎士達を使おうとするが・・・。

「映司の邪魔はさせない。」

ノワールが目にも止まらぬ速さで騎士達を倒す。

「ありがとう！ノワールちゃん！」

「う、うん／／／。」

オーズに感謝され顔が赤くなるノワール。

「こいつ！」

「させるか！」

カブトガニヤミーはオーズに光弾を放つが、オーズはタジャスピナーから火炎弾を放ち光弾を相殺する。

「はぁ！」

「ぐお！」

オーズがメダジャリバーでカブトガニヤミーを斬り裂く。

「なめるな！」

カブトガニヤミーは光弾を放つが・・・

「はぁ！」

「がぁ！」

オーズはタジャスピナーで光弾をガードし、メダジャリバーで攻撃する。

攻撃されたカブトガニヤミーは後ずさる。

「決める！」

オーズはメダジャリバーを投げ捨て、カブトガニヤミーをガッチリと掴む。

「何！？」

「はぁ！」

そのままクジャクウイングを展開、屋根を突き破り大空へと飛翔する。

「でや！」

「がぁ！」

コンサート会場を眼下に見渡せる高さに来たオーズはカブトガニヤミーを離し、キックで上へと押し上げる。

そしてオーズはクジャクフェザーを展開する。

「行け！」

クジャクフェザーを羽手裏剣とし、カブトガニヤミーにめがけて飛ばす。

「うがぁぁぁぁぁ！」

羽手裏剣は全てカブトガニヤミーに直撃する。そしてその勢いでカブトガニヤミーを更に上へと押し上げる。

オーズは更に飛翔し、カブトガニヤミーを通り越す。

そしてオースキャナーで再びオーズドライバーにセットされた3枚のメダルをスキャンする。

《スキャニングチャージ！》

スキャニングチャージを発動し、カブトガニヤミーに向かって急降下を始める。

「来るなぁぁぁぁぁ！」

カブトガニヤミーの叫びが大空に響き渡った。

そして・・・

「せいやぁぁぁぁぁ！」

オーズタジャドルコンボの必殺技　プロミネンスドロップがカブトガニヤミーを捕らえる。

「またこの力に負けるのか！うがぁぁぁぁぁぁぁ！」

カブトガニヤミーはプロミネンスドロップを受け大爆発を起こしたのだった。

そして、カブトガニヤミーを撃破したオーズはそのままコンサート会場に向かって降下して行った。

解放と撃破と覚えのない出来事（前書き）

第２３話です。

グダグダです・・・

解放と撃破と覚えのない出来事

「おらぁ！」

ガウルは操られた騎士から奪った剣で騎士達をなぎ払う。

「ユキカゼ式忍術！閃華烈風！」

ユキカゼは巨大な手裏剣を作り出し、それを投げる。手裏剣は騎士達に次々とヒットする。

「ベル！そっちに一体行ったで！」

「了解！」

「援護する。」

ジェノワーズは連携プレーによる攻撃で騎士達を寄せ付けない。

「はっ！」

ダルキアンは野太刀を振るい騎士達を斬り伏せて行く。

ここまでは順調だったが・・・

「何だよ！次から次へと！きりがねぇ！」

ガウルの言うとうり、騎士達をいくら倒してもけものだまにならず、まるでゾンビのように蘇ってくる。

「おそらくあの魔物を倒さない限り、いくら倒しても蘇ってくるでござるよ。」

ダルキアンが冷静に分析する。

「どうすれば・・・お館様。」

「ユキカゼ、ここは映司殿に任せるしかないでござるよ。あの魔物はおそらく映司殿でなければ倒す事は出来ない・・・あの映司殿の不思議な力でしか。」

「しかし・・・。」

ユキカゼは不安そうに呟く。

「今は映司殿を信じるでござるよ。ユキカゼ。」

「お館様がそう言うなら。」

ユキカゼも映司を信じる事にし、再び騎士達に立ち向かう。

「そういえば、エクレールはどうした？」

「エクレならリコと共にこちらに向かっているでございますお館様。」

ユキカゼが言うようにエクレはリコッタと共に遅れてフィリアンノ城に向かっていた。

「何でも今日だけで3連戦していて披露がピークを超えているらしいでございますよ。」

「うむ。なら仕方ないな。」

ダルキアンがエクレが参戦しない理由に納得する。

その時・・・

ズドォォォォン！

何かが爆発したような音が聞こえた。

「何だぁ、今の音？」

「ん？ガウ様前！」

「あ？」

ベールの言葉で前を向くガウル。そこで目にしたのは・・・。

「・・・あれ？俺何してるんだ？」

「ここは・・・コンサートホール？」

「何で俺達ダルキアン卿とかと戦ってるんだ？」

意識を取り戻した騎士達だった。

「騎士達の意識が・・・」

「元に戻った・・・」

驚くジョーヌとノワール。

バサァ。

何かがまるで羽ばたく音がした。

「何とか倒したよ。」

そこには、既に変身を解除した映司が立っていた。

「ご苦労だったな。映司殿。」

「映司！お前すげえな！」

帰還した映司に賞賛の声が贈られた。

映司がカブトガニヤミーを撃破した後、ガウルとジェノワーズは役目を終えた為ミオン砦に帰還した。そのかわりにガウル達と入れ違いでリコッタとエクレがコンサートホールに現れたのだった。

このカブトガニヤミーの一件によりミルヒのコンサートは中断。歌えなかった歌は後日フロニャルド全域に放送される事になった。

この一件で負傷した騎士達や勇者シンクは医務室送りとなった。
特にシンクが命に別状がなかったのは奇跡であった。これも守護力のおかげてあった。

しかし、映司には引っかかる事があった。
今回映司は初めて甲殻類系ヤミーと戦闘を行った。だが、ヤミーの方は明らかにオーズに対し異常な反応をしていた。特にタジャドルコンボの力に対して・・・
この事が映司に大きな疑問として残ったのだった。

ーーーーーーー

ここは人里離れた森。ここにヤミーを生み出した謎の人物はいた。
「ヤミーが倒されたか・・・まぁいい、まだ時間は沢山あるからな。」
謎の人物は右手に何かを持つ。
「再びオーズに会えるとはな・・・これは楽しくなってきた。」
怪しい笑みを浮かべる謎の人物。

その右手にはサソリ、カニ、エビの黒いコアメダルがそれぞれ一つずつ握られていた。

甲殻類系ヤミー　説明（前書き）

題名どおりです。

新しいヤミーが出たら更新する予定です。

甲殻類系ヤミー　説明

甲殻類系ヤミー

甲殻類系グリード（らしき人物）がセルメダル同士をぶつける事で生まれるヤミー。既に成長ずみで誕生する。

つかさどる属性は『悪意』。共通能力として、人のありとあらゆる欲望を吸い取りセルメダルとし、自身に蓄積させ強化する。欲望を吸い取られた人は仮死状態になる。ヤミーが倒されると吸い取れた欲望は欲望の持ち主に戻る。また欲望を吸い取った人間を自身の意のままに操る事ができる。

生み出した本人を、我が主と呼び絶対的な忠誠心を持ち、主の命令に従って動く。

何故かオーズに対し深い憎しみを持つ。特にタジャドルコンボに関しては「忌々しい炎の力」「我が主を葬り去った力」として特に憎んでいる。

ヤミーでありながら知能が高いのも特徴。

現在までに確認されている甲殻類系ヤミー。

・カブトガニヤミー

初めて確認された甲殻類系ヤミー。カブトガニと同様の甲羅を背中と両腕に持つ。

・シャコヤミー
2体目の甲殻類系ヤミー。普通のシャコ同様に強力なパンチ力を持つ。

・トリロバイトヤミー
3体目の甲殻類系ヤミー。トリロバイトとは三葉虫の事。主にエネルギー弾を大量に使用した遠距離での戦いを得意とする。

・ダンゴムシヤミー
4体目の甲殻類系ヤミー。主に突進や自身の身体を球体にし、転がる事で相手を攻撃する。

湯煙と背中と1日の終わり（前書き）

第２４話です。

ようやく長い１日が終わります。

湯煙と背中と1日の終わり

ここはフィリアンノ城にある大浴場。

今ここに1人の青年がちょうど髪を洗っていた。

青年の名は火野映司。先ほどまで仮面ライダーオーズとしてカブトガニヤミーと戦っていた人物である。

「ふぅ～。」

髪を洗い終えた映司はひと息つく。

「髪洗っただけなのに結構スッキリするな～。」

映司は思わず呟く。

「それにしても・・・守護力、フロニャ力って便利だよな・・・。」

映司は守護力、もといフロニャ力について考える。

実際先ほど、カブトガニヤミーと戦い負傷したシンクをお見舞いに行ったが、シンクはいびきをかいて爆睡していた。医者に曰く、『守護力がなければ死んでいた』らしい。

シンクは明日の朝には復帰できるそうだ。

何て万能なフロニャ力。

実は映司にもフロニャ力は働いており、タジャドルコンボになった際の負担が非常に少なくなっている。

「まぁ、考えるのは後にして・・・身体を洗おう。」

映司は身体を洗うためにタオルと石鹸を手にとり、タオルに石鹸をつけようとした時・・・。

ガラァ。

大浴場のドアが開いた。

「？」

映司がドアの方を見る。

「・・・映司、いるか？」

「・・・へぇ？」

映司はまるで気が抜けた声を出す。

なぜなら・・・

「エ、エ、エクレちゃん！？」

そこにいたのはエクレだった。

「そ、その・・・あまり見るな。は、恥ずかしい・・・／／／。」

「あ、うん。ごめん・・・。」

気まずい空気になる洗い場。

「・・・てぇ、ちょっと待ってよ！何でエクレちゃんがお風呂にいるの！？」

映司が沈黙を破る。

「わ、私だってお風呂くらい入るぞ！／／／」

「そうじゃなくて！今はここ、男湯だよ！」

そう、今ここは男湯になっている。

「その、だな・・・映司の・・・背中を流そうと思って・・・／／／。」

「・・・へぇ？何で？」

本日2回目の気の抜けた映司の声。

「今日は映司に・・・世話になりっぱなしだから・・・せめて背中を流そうと思って・・・迷惑だったか？／／／」

エクレの言うとおり、今日映司は必要以上に動いていた。

「いや・・・気にしなくていいよ。自分の思いに従ったまでだし。」

「それでも・・・映司は私、いやビスコッティの為に動いてくれた。ミオン砦の時も、そして姫様のコンサートの一件も。特にコンサートの一件は我々ビスコッティ騎士団一同や城の皆、姫様も感謝して

いる。映司がいなかったら今頃どうなっていたか・・・。」

エクレの言うコンサートの一件と言うのは、カブトガニヤミー襲撃事件の事である。

「いや、あれは俺1人の力では勝てなかったよ。ガウル君やダルキアン卿やみんなの力があってこそだよ。」

「それでも・・・映司は姫様、いやビスコッティを救ってくれた。ありがとう。」

「そこまで言われるとな・・・。」

映司は頭をかきながら呟く。

「とにかく・・・私は映司の背中を流す。これは確定だ!」

「う〜ん・・・。」

映司は腕を組み考える。

「じゃあ・・・お願いしようかな?」

「ほ、本当か!?」

「本当だよ。お願いねエクレちゃん。」

「分かった!任せろ!」

映司は石鹸をつけたタオルをエクレに渡す。エクレはタオルを受け

取ると嬉しそうに尻尾を振る。

そしてエクレは映司の背中を洗い始める。

映司とエクレは無言になり、背中とタオルがこすれる音だけがした。

（エクレちゃん、結構上手だな～。）

映司はエクレの洗い方を賞賛する。

（映司の背中・・・やはり大きいな・・・。）

エクレは映司の背中の大きさについて感想を心の声で呟いた。

「・・・ありがとう、もういいよ。」

「あぁ。分かった。」

映司の声で背中を洗うの止め、シャワーで泡を流していく。

「ありがとうエクレちゃん。気持ちよかったよ。」

「そうか！良かった・・・。」

映司に誉められエクレは思わず笑顔になる。

「じゃあ俺はお湯に浸かるけど・・・エクレちゃんはどうする？」

「いや、私はいい。元々映司の背中を流すのが目的だったからな。」

エクレはそう言い脱衣場に向かう。

「・・・そうだ映司。」

「何？エクレちゃん。」

脱衣場に入ろうとしたエクレは何かを思い出したらしく、映司を呼んだ。

「明日の１０時から式典をする事になっているから早めに起きてくれ。」

「分かった。」

「それじゃあ、また明日な映司。」

エクレはそう言い脱衣場に入っていった。

「さて・・・ゆっくり浸かろっと。」

映司は湯船でくつろぎながら言った。

・
・・・・・

「ふぅ～いいお湯だったな～。」

映司は自室でお風呂の感想を口にする。

自室といっても臨時に用意された部屋であって実際は映司の部屋ではない。ベットが一つと机が一つあるだけである。

「さて・・・もう寝よう。」

映司はポケットから相棒の形見である割れたタカメダルを机の上に置く。

「お休み・・・アンク・・・。」

相棒に声をかけた後、電気を消し布団に潜り込み映司は眠りに着いた。

ようやく映司にとって色々な事があった長い1日が終わりを告げたのであった。

番外編その壱、おでんとお酒とウヴァ殺し（前書き）

番外編その壱です。

今回はフロニャルドを離れ、地球でのオーズサイドの話しです。

番外編その壱、おでんとお酒とウヴァ殺し

映司が大浴場でエクレと遭遇している頃・・・

ここは日本の夢見町。この夢見町にあるおでん屋に3人の男がいた。

「店主！後藤ちゃんと信吾さんに餅巾着！あと酒持ってきて！」

今声を出したのは、自称戦う医者　伊達明である。

「すいません。あと大根一つ追加で。」

「あいよ～。」

今大根を追加注文したのは2代目バース　後藤慎太郎。

「映司君もいたら面白かったのにな～。」

最後の1人は、ついこの間までアンクに憑依されていた刑事　泉信吾である。

「伊達さんほどほどにして下さいよ。」

「分かってるって後藤ちゃん！今日は朝まで飲むからそのつもりでね！」

「はい、おまちどおさん。」

伊達がさらりと何か言った後、注文した品が前に並ぶ。

「よし！今日は飲むぞ！日頃飲めないからな！」

「お！信吾さん張り切ってるね～伊達さん負けねえぞ！」

信吾と伊達は互いにどちらが多く酒を飲めるか勝負するようだ。

「・・・大根うまいな。」

1人大根の味わいに舌鼓をうつ後藤。

「後藤ちゃん！何1人で大根味わってるの！こっちで一緒に酒飲もうぜ！」

「そうですよ後藤さん！飲んで飲みまくりましょう！」

早速お酒が回りだした信吾。

「・・・餅巾着うまいな。」

「無視！？無視ですか後藤ちゃん！お父さん悲しいよ！お父さん後藤ちゃんをそんな子に育てた覚えはありませんことよ！」

「俺は伊達さんの子供じゃありません！」

「後藤さん！比奈は嫁にはやりませんよ！」

「信吾さんの言っている意味が分かりません！店主、しらたきとと

ちくわ一つずつ。」

「あいよ～。」

お酒が回りだした伊達と信吾。一升瓶を取り出しグラスに酒を注ぎ始める。ちなみに酒の名前は『ウヴァ殺し』である。

「はい、しらたきとちくわ。」

「あ、どうも。」

注文した物が来たため再び箸を着ける後藤。

「いや～後藤ちゃんは勢いと速さが足りないよ！」

「急に何言ってるんですか伊達さん。」

伊達に絡まれながらちくわを食す後藤。

その時。

「おや！伊達君に後藤君ではないか！それに信吾君！久しぶりだ！ハッピバースデイ！！！！！！」

「か、会長！？」

何故か鴻上が現れた。鴻上出現に驚く後藤。

「お！会長じゃないの！」

「お久しぶり会長！」

鴻上出現にも驚かず普通に挨拶する伊達と信吾。

「会長どう？男だらけの飲み会！ポロリも有るよ！」

「男のポロリなんて入りません！」

伊達のボケにつっこむ後藤。

「何言ってるんですかぁ！必要でしょポロリ！誰が一番大きいとか分かるでしょ！後藤さんいい加減にして下さい！」

「信吾さんとりあえず黙れ！」

信吾は完全に酔っていた。

「面白そうだな！私も参加しよう！！！！！！！」

鴻上参戦決定！

「嘘ぉぉぉぉぉ！？」

後藤の叫びがこだまする。こだまでしょうか？いいえ誰でも。

鴻上が信吾の隣に座る。

「まぁまぁ会長！まずは一杯！」

伊達が鴻上のグラスにウヴァ殺しを注ぐ。

「うむ！店主よ！がんもを一つ！」

「あいよ～。」

がんもを要求する鴻上。

「・・・。」

後藤はそれをただ見ていた。

1時間後・・・

「レス○ューフォース出動！」

「全機！ガイ○とア○ルを援護だ！」

伊達と鴻上は前世の仕事のセリフを言いまくる。仮面ライダー的にはＮＧである。

「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！比奈が世界一だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！絶対嫁にはやらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！比奈を嫁にして良いのは映司君だけだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！映司君早く戻ってこぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉい！」

信吾に至っては1人妹自慢。しかも比奈を映司に任せる気満々である。

「・・・何だよこの展開。」

後藤はただ追加注文したコンニャクを食していた。

「あれ？後藤さん？」

「あら～伊達さんに鴻上さんじゃな～い。」

「お兄ちゃん！？」

「里中！？知世子さんに比奈ちゃん！？」

何と言う運命の巡り合わせだろうか。里中エリカ、白石知世子、泉比奈が現れた！

「後藤さん何ですか？この状況。」

里中の言うとうり、今この現場は凄まじかった。伊達はレスキュー○○ースの制服を着込み、鴻上はX○Gの隊員服を着ている。信吾に限ってはスマートブレインハイスクールの制服である。

「いや・・・実は飲み会をしていてな。こんな酒を飲んでいたんだ。」

後藤は里中達に空となったウヴァ殺しを渡す。

「あら～これウヴァ殺しじゃな～い。これ美味しいのよ。」

知世子がそう言うと・・・

「知世子さんじゃないが～どうです一杯！！」

伊達がウヴァ殺しの入ったグラスを渡す。

「いいの伊達さん？じゃあ遠慮なくいただくわね～。」

知世子はウヴァ殺しを飲み始める。

「里中君も飲みたまえ！私からの・・・プレゼントだぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「・・・はい、いただきます。」

里中は鴻上の気迫く負け渋々ウヴァ殺しを飲み始める。

「比奈ぁぁぁ！何時映司君と式あげるんだぁぁぁ？」

「お兄ちゃん急にどうしたの！？」

「早く比奈のウエディングドレス見たいな～まぁ比奈も飲め！」

完全に酔った信吾は比奈にウヴァ殺しを与えようとする。

「お兄ちゃん私まだ未成年だよ！」

「飲めよ～お兄ちゃん比奈をそんな風に育てた覚えはないぞぉぉぉ！」

「ちょっ！おにい・・・・。」

信吾は比奈を完全ロックし無理やりウヴァ殺しを飲ませる。

「・・・店主、薩摩揚げ一つ。」

「あいよ～。」

後藤はただおでんを食べ続けた。

さらに1時間後・・・

「「ＺＺＺ・・・」」

里中と信吾は完全に沈黙した。

「知世子さ～んまぁまぁ。」

「アルコールキターーーーーー！」

「さすがクスクシエの店長だ！ナイス欲望！」

伊達は知世子のグラスにウヴァ殺しを注ぎ、知世子は既にキャラが違っていた。鴻上は言ってる意味が不明。

「映司君～～早く会いたいよ～～映司君～～～！」

比奈は1人映司の名前を呼び続けた。

「・・・。」

「・・・あんた大変だな。」

「・・・はい。」

店主の言葉にただ後藤はただ、はいと答えるしかなかった。

ちなみにこの後、精算を後藤が1人が行い、次の日に皆に金銭を要求したのだった。

式典とヘブン状態と映司の功績（前書き）

第２５話です。

犬日々でいうと第６話辺りです。

式典とヘブン状態と映司の功績

ビスコッティとガレットの戦であるレイクフィールド戦、ガレットの第一王子のガウルがビスコッティの代表領主であるミルヒを誘拐し発生した要人誘拐奪還戦、そして甲殻類系ヤミーであるカブトガニヤミーがミルヒのコンサートを襲撃したコンサート襲撃事件（カブトガニヤミー事件）。

これらの騒動から1日が経ったビスコッティ共和国。現在フィリアンノ城では昨日の騒動の功績を称える式典である報奨授与式が行われていた。

報奨授与式が行われている会場では皆が正装を着ておりかなり重要な式典と言うのが分かる。

だが、1人だけ明らかに浮いている人物がいた。

（・・・俺、明らかに浮いているよな・・・。）

それは要人誘拐奪還戦、コンサート襲撃事件で多大な成果を上げた男　火野映司である。

ちなみに同じ世界出身で映司とほぼ同じ位に来たシンクはちゃんと騎士団の服を着ている。

シンクは元々勇者としてビスコッティに来た為、服などは事前に準備されていた。

しかし、映司は違う。映司は偶々シンクの勇者召喚に巻き込まれて

ビスコッティに来た為、ビスコッティ側にしてみれば完全にイレギュラーである。

そのため、ビスコッティ側は映司の分の服を準備できなかった為、映司は私服で出席しているのだ。

「おい映司。どうかしたか？」

「え？あ、いや・・・なんか俺だけ浮いてないかな～って思ってさ。」

エクレに言われ自分の考えを口にする映司。

「我慢してくれ。今日中には仕上がる予定だ。」

「・・・分かったよ。」

エクレに励まされる映司。

「騎士団親衛隊隊長、エクレール・マルティノッジ前へ。」

「はい。」

名前を呼ばれ、ミルヒの前に歩いて行くエクレ。

そしてミルヒの前に来ると跪く。

「エクレール、昨日はご苦労様でした。」

「いえ・・・♪」

ミルヒはそう言うとエクレの頭をなでなでし始める。
エクレはよほど気持ちいのか尻尾が今までにない振りを見せる。
「エクレちゃん幸せそうだな～あれがヘブン状態って言うのかな？」
映司は幸せそうなエクレをヘブン状態と名付けた。
そしてミルヒのなでなでが終わりエクレは映司の隣に戻って来る。
「♪～。」
その表情はまさに幸せ真っ只中だった。
「勇者シンク・イズミ殿前へ。」
「はい！」
今度はシンクが呼ばれ、ミルヒの前へと歩いて行く。
「勇者様昨日はありがとうございました。これを受け取って下さい。」
ミルヒはシンクに箱を渡す。
「ありがとうございます！姫様。」
シンクはミルヒから箱を受け取り元の場所へと戻る。

「これにて報奨授与式を終了する。」

老人の1人が声を出す。

「・・・と言いたい所だが、もう1人昨日戦果を上げた人物がおる。」

「へぇ～まだいるんだ。誰だろうねエクレちゃん。」

老人の発言を聞いた映司はエクレに話しかけた。

「映司・・・もしかして鈍感なのか？」

「ん？何が？」

誰が報奨授与を受けるか分かっていたエクレは思わず口に出す。

映司はまるっきり分かっていなかった。

「火野映司殿前へ。」

「・・・俺？」

呼ばれたのが自分であった事に驚く映司。

「何をしている。早く行け。」

「あ、うん。」

エクレに言われミルヒの前へと行く映司。

「お久しぶりです。映司さん。」

「お久しぶりです。姫様。」

互いに挨拶を交わす。

「昨日はありがとうございました。あなたがいなければビスコッティは今頃滅んでいたかもしれません。ここにいる皆を代表してお礼を言わせ下さい。本当にありがとう。」

「いえ、そんな・・・俺もみんながいたから頑張れたと言うか、何て言うか・・・。」

「それでも・・・あの魔物(ヤミー)を倒したのは映司さんです。誇って良いのですよ。」

「・・・ありがとうございます姫様。」

何だか急に照れくさくなった映司。

「映司さんこれを受け取って下さい。私達からの感謝の気持ちです。」

「ありがとうございます。」

映司はミルヒからシンクが受け取ったのと同じ位の箱を受け取る。

パチパチ。

会場からは拍手が起こった。

映司は元いた場所に戻る。

「これにて報奨授与式を終了する。解散！」

老人の発言により報奨授与式は幕を下ろした。

・

・

・

・

・

映司は1人自室（借り）を目指していた。

「箱の中身は何だろう？」

箱の中身が気になるが部屋に戻ってから開けようと思う映司。

「お～い、映司殿！」

「ん？この声は・・・」

映司が声がした方を向くと・・・

「ダルキアン卿。」

「映司殿捜したでござるよ。」

声の主はダルキアンだった。

「どうしたんですか？それに隣の人は？」

「ん？あぁ、映司殿はまだ知らなかったでござるな。ユキカゼ。」

「はい。拙者ビスコッティ騎士団隠密部隊筆頭　ユキカゼ・パネトーネでござる。よろしくでござる映司殿。」

「初めまして。火野映司です。よろしく。」

ユキカゼと映司は互いに自己紹介を済ませる。

「ところで何かようですか？」

映司は話題を戻す。

「あぁ、実は今から騎士団の訓練を見に行くのだが映司殿もどうでござるか？」

「訓練をですか？良いですよ。」

「では決まりでござるな！」

映司はダルキアンとユキカゼと一緒に訓練所へと向かった。

だがダルキアンにはこの時、ある思惑があった。

見学と訓練と模擬戦開始（前書き）

第２６話です。

最近、オーズで新しく何か書きたいと思う今日この頃です。

見学と訓練と模擬戦開始

「でや！」

「はぁ！」

騎士団詰め所の前にある訓練所。日々ここで騎士団は訓練をしている。

今、エクレとシンクが模範戦をしている真っ最中である。

「ふん！」

「うぁ！」

エクレがシンクの槍を弾き飛ばす。

「・・・私の勝ちだな。」

「参りました。」

勝敗はエクレに軍配が上がる。

「いや～エクレはやっぱり強いよ。」

「当然だ。でなければ親衛隊隊長など務まらないからな。」

「今度また相手してよ！」

「私で良ければ何時でも。」

そんな会話をするシンクとエクレを模範戦を見学していた騎士団が微笑ましく見る。

「さて・・・訓練を再開するぞ！各員組稽古始め！」

エクレの言葉を聞き騎士達は組稽古を開始する。

「勇者、とりあえずお前はベンチで休んでいろ。今朝復帰したばかりだろ。」

「大丈夫！心配ないって！」

シンクは『元気だよ』とアピールする。

「そんなに甘くみていると昨日の私みたいになるぞ。」

実際エクレは疲労を貯めすぎ途中から動けなくなっている。

「とりあえず休んでおけ。念の為だ。」

「・・・分かったよ。」

シンクはしかなたく近くのベンチに腰かける。

「あれだな・・・エクレール隊長と勇者様、すごく息合ってるよな。」

「あぁ、この際付き合ったら良いのに・・・。」

組稽古をしている一部の騎士達が小さい声で話し合っていた。
ここにいる騎士達全員がそう思っている。だが、実際エクレにはシンク以上に気になっている男がいる事を騎士達は知らない。
「お～いそこの2人。そんなに喋りたければ訓練内容変更して腹筋、腕立て各５００回にするぞ～。」
「「すいませんでした！」」
エクレの脅迫により2人は話しを止め、組稽古に取り組む。
「まったく・・・。」
エクレが軽く呆れる。
「ねぇエクレ。」
「何だ勇者？」
「誰か来たよ。」
シンクに言われ、言われた方を見ると・・・。
「邪魔するぞエクレール。」
「お邪魔するでござる。」
「お邪魔しま～す。」

「ダルキアン卿にユキカゼ？それに・・・映司！？」
エクレは突然現れたダルキアン、ユキカゼ、映司に驚く。特に映司に。
「あれ？何かまずいことした俺？」
「あ、いや・・・気にするな。」
映司の問いにとりあえず、気にするなと言うエクレ。
「さて映司殿、ちょっといいか？」
「何ですかダルキアン卿？」
「うむ、拙者と模擬戦をしてはござらんか？」
「「「・・・はあ？」」」
ダルキアンの発言にユキカゼ、シンク、エクレが声を揃える。
「模擬戦ですか？」
「左様。映司殿の力は実に興味深いでござる。その力がどれほどか確かめたいでござるよ。」
どうやら、ダルキアンは映司のオーズの力が気になるらしい。
「お館様、まさかその為に映司殿を！？」

この事はユキカゼも知らなかったらしい。

「う～ん・・・。」

映司は腕を腕組みをしてどうするか考える。

何故かエクレとシンクは期待の眼差しを映司に向ける。

「・・・分かりました。その模擬戦受けます。」

「左様でござるか！？」

「多分ここで引き下がっても食いついてくると思いましたし、それにさっきからなんか視線を感じて・・・。」

ユキカゼは映司の後ろを見ると映司に熱視線を送るシンクとエクレがいた。

「では決まりでござるな。」

そう言うとダルキアンは準備を始める。

「全員組稽古止め！そして集合！」

エクレが騎士達に呼びかけると、組稽古を止めエクレの前に整列する。

「みんな聞いてくれ。今から模範戦を始める。」

エクレの発言にどよめきが起こる。

「誰かやるのですか？」

騎士の1人が質問する。

「模範戦をするのはダルキアン卿だ。」

この発言に再びどよめきが起こる。

「ちなみに対戦相手は？」

「それは「あ、俺です。」」

エクレが言う前に映司が手を挙げる。

「「「お～！」」」

騎士達も一気に興味が沸いたようだ。

数分後・・・

「映司殿準備は良いでござるか？」

「はい、いつでも。」

ちなみに映司はすでにオーズに変身しており、メダジャリバーとタジャスピナーを装備している。ダルキアンも野太刀を鞘から抜く。

２人のちょうど中間にはエクレが立つ。

「それでは、これよりビスコッティ騎士団自由騎士隠密部隊頭領ブリオッシュ・ダルキアン対火野映司の模範戦を始める！」

エクレの言葉に反応し、互いに武器を構える。

「・・・始め！」

映司対ダルキアンの模範戦が始まった。

斬撃と爆風と砂煙り（前書き）

第27話です。

もうじき期末テストがあります。テストやりたくないな・・・

斬撃と爆風と砂煙り

ガキン！

オーズのメダジャリバーとダルキアンの野太刀がぶつかり合う。

一時つばぜり合いになるが、オーズとダルキアンはほぼ同時に後ろに後退する。

「せや！」

オーズはタジャスピナーから火炎弾を発射しダルキアンを牽制する。

「甘いでござるよ。」

ダルキアンは野太刀で火炎弾を弾いていく。

「弾いた！？」

「今度はこちらから行かせてもらうでござる。」

驚くオーズを後目にダルキアンが一気に接近する。

「はぁ！」

「何の！」

ダルキアンは野太刀を振るうが、オーズはとっさにタジャスピナーでガードし難を逃れる。ダルキアンは後退し一定の距離をとる。

「ふむ・・・その盾は防御もでき、遠距離も対応できるのか・・・なかなか面白い武器でござるな。」

「それはどうも。」

ダルキアンはタジャスピナーを賞賛する。

「行きますよ！」

オーズはクジャクウイングを展開、低空飛行で一気にメダジャリバーでダルキアンに斬りかかる。

「ぬっ！」

野太刀でメダジャリバーをガードする。

「今だ！」

「！？」

オーズはタジャスピナーに炎を纏わせる。

「せいや！」

「ぐっ！」

メダジャリバーをガードしていた為、隙ができた腹部に向かってタジャスピナーを使用した拳でパンチする。

ダルキアンは拳をもろにくらい後退する。

（あの盾は格闘戦もできるのか・・・）

タジャスピナーの使い道が未だにあった事に驚くダルキアン。

「はぁ！」

オーズはクジャクの尾羽を模したクジャクフェザーを展開する。

「・・・久しぶりでこざるな・・・こんなに強い者と戦うのは！」

「お、おい。あの火野映司って奴。ダルキアン卿と互角だぞ！？」

「どうなってるんだ！？」

見学、もとい観戦していた騎士達も驚いていた。

騎士達が驚くのも無理はない。ダルキアンは大陸最強と言われるほどの強者である。フロニャルドで互角に渡り合えるのはガレットのレオンミシェリぐらいだろう。

だが、今ここにそのダルキアンと互角に渡り合う者がいる。

しかもそいつは、昨日フロニャルドに来たばかりの、しかもただ勇者召喚に巻き込まれた火野映司なのである。

これは騎士達とってはかなりの衝撃だった。

「すごいでこざるな～映司殿は！」

ユキカゼもこの戦いを観戦していた。

「すごいですよね！本当！」

シンクも映司の戦いを間近で見るのは初めてである。

「・・・・。」

エクレは黙ってこの戦いを見届けていた。ただし、尻尾を振りながら。

「せいや！」

オーズのかけ声と共に、クジャクフェザーが羽手裏剣として射出される。

「・・・・。」

ダルキアンは野太刀を鞘に入れ、目を閉じる。

羽手裏剣が間近に迫る。

「・・・はぁ！」

目を開き、鞘から一気に野太刀を引き抜く。野太刀の刃身には輝力

が込められており、野太刀を抜いた瞬間に羽手裏剣を全て薙ぎ払う。

「う、嘘！？」

さすがにこれにはオーズも動揺する。

その動揺をダルキアンはみのがさず、一気にオーズに接近する。

「隙あり！」

「うわ！」

オーズはダルキアンの斬撃をくらうが・・・

「っ！この！」

「ぐっ！」

オーズは怯まず、コンドルレッグで回し蹴りを放つ。ダルキアンは後ろに跳躍するが、コンドルレッグに装備されたストライカーネイルの一撃を左腕に受ける。

（このままではまずいな・・・一気に決めるでござる。）

ダルキアンは再び野太刀を鞘に戻す。すると背後に紋章が現れる。

「映司殿。これで決めさせてもらうでござる。」

ダルキアンはこの一撃で勝負に出るようだ。

「なら・・・俺だって！」

オーズはメダジャリバーに3枚のセルメダルを投入、レバーを押しセルメダルをメダジャリバーの刃身に移す。

「裂空・・・」

『トリプル！スキャニングチャージ！』

ダルキアンの周りに風が発生する。

オーズはオースキャナーでメダジャリバーのセルメダル3枚をスキャンする。

「一文字ぃっ！」

「せいやぁぁぁぁぁ！」

ダルキアンは裂空一文字を、オーズはオーズバッシュを使用する。

裂空一文字とオーズバッシュがぶつかる。

ズドォォォォォン！

辺りに凄まじい爆風と砂煙りが発生する。

「映司！」

「お館様！」

エクレとユキカゼがそれぞれの名前を呼んだ。
やがて風が収まり、砂煙りが晴れる。
そこには・・・
「はぁ・・・はぁ・・・。」
息が荒いながら立っているオーズと、
「ま、参ったでござる・・・。」
服が裂け、下着？が露わになっている為、それを両腕で隠すダルキアンがいた。
「「「・・・。」」」
その場が静まり返る。
「・・・はっ！しょ、勝負あり！勝者火野映司！」
エクレの声が辺りに響き渡る。
「何とか・・・勝った・・・。」
「いや～映司殿は強いでござるな。負けたでござるよ。」
ダルキアンは腕で身体を隠しながらオーズに言った。
「いえダルキアン卿も強かったですよ。さすが大陸最強ですね。」

オーズはダルキアンに手を差し伸べりる。

「すまないでござる。」

ダルキアンはオーズの手を借り立ち上がる。

「久しぶりに良き戦いができたでござるよ。ありがとう映司殿。」

「いえ。こちらこそ。」

オーズとダルキアンは再び握手を交わした。

戦いの後と主席と新しい対象（前書き）

第２８話です。

中途半端に・・・

新しくオーズのを書くのにあたり、ＩＦを書こうと思っていますが、ダブルバースで何かとクロスも捨てがたいです。どうしよう・・・

戦いの後と主席と新しい対象

「映司さんすごいよ！ダルキアン卿に勝っちゃたよ！」

「お館様に勝つとは・・・映司殿はすごいでござる。」

シンクは映司の勝利を喜び、ユキカゼは若干複雑そうであった。

「お～いユキカゼ。」

「何ですかお館様？」

ダルキアンに呼ばれるユキカゼ。

「すまぬが服を持ってきてはくれぬか？」

「分かりました。」

ユキカゼは念の為準備しておいた服をダルキアンの元に持って行く。

「すまぬな。」

「いえ。」

ダルキアンは渡された服を着始めた。

一方映司の元にはエクレがいた。

「やったな映司。」

「ありがとう。いや～ダルキアン卿強かったよ。さすが大陸最強だね」

ダルキアンとの戦いの感想を述べる映司。ちなみに変身は解除している。

「あ、そうだ。」

「どうした？」

何かを思い出したようにポンと手を叩く映司。

「いや、知り合いと連絡できるかな～と思ってさ。できるかな？」

どうやら映司は知り合いと連絡をとりたいようだ。

「連絡か？それなら以前勇者がやってたな・・・。」

エクレの言うとおり、シンクは昨日家族や親戚への連絡に成功していた。

「本当に！？」

「あぁ、なら午後から連絡をとってくるといい。準備はこちらでしよう。」

「分かった！ありがとうエクレちゃん。」

エクレに思わず感謝する映司。この時エクレの頬は少し赤かったと言う。

ーーーーーー

「・・・やはり、私の目的にオーズは邪魔になる。」

謎のグリードはフィリアンノ城の屋上からオーズとダルキアンの模擬戦を見て呟いた。

その手には2枚のセルメダルが。

謎のグリードはセルメダルを1枚上に投げ、もう1枚をコイントスし、セルメダルどうしをぶつける。

セルメダルからはどす黒いオーラが放たれ、それはやがてヤミーになる。

ヤミーは謎のグリードの背後に降り立つ。

「・・・ご命令は？」

ヤミーがグリードに指示を仰ぐ。

「今回はオーズを殺れ。ミルヒオーレはその後だ。タイミングを誤るなよ。」

「御意。」

そのままヤミーは闇へと消える。

ヤミーが消え、その場には謎のグリードだけが残る。

「・・・オーズよ。貴様は私の目的には邪魔なのだよ。」

そう言うと謎のグリードも闇に消えた。

――――――

フィリアンノ城の城門前。ここには既にエクレから連絡を受けたリコッタが周波増幅機を準備し、映司達を待っていた。

「映司様も元の世界と・・・と言う事は映司様も“携帯電話”を！」

リコッタは映司が携帯を持っていると考える。

「勇者様からは拒否されてしまったでありますからな・・・映司様なら許してくださるはずであります！　っ！おっと。」

映司なら携帯を分解させてくれるだろうと考えたリコッタ。思わずよだれがこぼれる。

「お待たせ～リコ。」

「待たせたでござる。」

「勇者様！ユッキー！」

そこにシンクとユキカゼが現れる。

何故ユキカゼかと言うと、エクレはまだ騎士達の訓練があって来れない為代わりにユキカゼが行く事になったのだ。

「あれ？・・・映司様は？」

「ちょっと遅れるって言ってたよ。」

シンク曰わく、ちょっと映司は遅れるようだ。

「ところでリコ。」

「何でありますか？勇者様？」

「間違っても映司さんの携帯電話を分解なんてしないでね。」

シンクはリコッタに一応言っておく。

が・・・

「え・・・。」

「はぁ・・・分解しちゃ駄目だよ。」

リコッタの思惑はもろくも崩れ去った。

ブォォォォン！

「へぇ？」

「ん？」

突然爆音が聞こえ、リコッタとユキカゼは音が聞こえた方を向く。

「今の音って・・・まさか。」

シンクにはこの音が何なのかは直ぐに分かった。

シンク達の目の前にバイクが現れ、停止する。

「お待たせ。」

「「「・・・。」」」

「あれ？」

颯爽と現れた映司に3人はポカンとする。

「・・・映司さん一つ良いですか？」

「何？」

「何でバイク乗ってるんですか？」

驚くのも無理は無い。普通フロニャルドにバイク何てあるはずない

のだから。

「理由は後で説明するから。速く連絡とりたいんだけど。」

「「・・・はっ！そうだったであります！すっかり忘れていたで（ござる！）あります！」」

目的を思い出すリコッタとユキカゼ。

「じゃあ、行くでござるよ。」

「「「お～！」」」

ユキカゼ先導の元、召喚台のある浮島に向かい始めた。

ちなみに皆がセルクの為、映司のライドベンダーは浮いていた。リコッタはライドベンダーを見て目を輝かせていたが、シンクとユキカゼと映司はそれに気づいていなかった。

通話と性癖とヤミー襲来（前書き）

第２９話です。

何か来年の春に、フォーゼ＆ディケイド＆ゴーカイジャーみたいのをやるみたいですね。

通話と性癖とヤミー襲来

「映司様～準備完了であります～す！」

「分かった～、始めていいよ～。」

映司　シンク　ユキカゼ　リコッタは現在、映司が知り合いに連絡する為浮島にある召喚台に来ていた。

映司に許可をもらい、周波増幅機の電源を入れるリコッタ。

「・・・お、建った！」

圏外になっていた映司の携帯に、３本のアンテナが建つ。

「さて、早速連絡しなきゃ。」

映司はアドレス帳を開き誰に連絡をとるか迷う。

ちなみに映司の携帯はシンクのと違い、画面にタッチして操作するタッチ式である。

「・・・良し。これで行こう。」

映司はアドレス帳からその人物の携帯番号に電話をかける。

トゥルル×数回

しばらく呼び出し音が鳴る。

『・・・もしもし？』

「もしもし？後藤さん？」

映司が電話をかけた相手は、かつてヤミーやグリードとの戦いで共に戦った男、２代目仮面ライダーバース　後藤慎太郎だった。

『火野か？』

「はい！お久しぶりです！」

『何だ珍しいじゃないか。俺個人に電話してくるなんて。』

後藤の言うとおり、映司は定期的に行うテレビ電話以外では基本的に電話などはしないのである。

「後藤さん今大丈夫ですか？」

『大丈夫だ。今日は休日だからな。』

「なら良かった。」

『で、要k『うぇぇぇ・・・』』

「！？」

『伊達さん吐くならトイレでして下さい！すまん、要件は何だ？』

「え？今のって・・・。」

映司は突然聞こえた音について後藤に質問する。

『あぁ、伊達さんが吐いたんだよ。』

「えぇぇぇぇぇ！？」

映司もこれにはビックリ。

『実は昨日、俺と伊達さんと信吾さんで飲みに行ったんだ。』

「そうなんですか・・・。」

映司は飲みに行ったと聞き、何だか伊達が吐いた理由が何となく分かった。

「・・・もしかして、二日酔いですか？」

『良く分かったな。火野。』

やっぱり・・・と思う映司。

『火野の言うとおりだ。ちなみに信吾さんも二日酔いだ。あと比奈ちゃんも。』

「へぇ～・・・って比奈ちゃん！？」

まさかの比奈も二日酔いに映司は再びビックリする。

『あぁ、本当は3人で飲んでいたんだが・・・途中で会長、里中、知世子さん、比奈ちゃんが入ってな・・・こうなった。』

「でも、比奈ちゃんは未成年ですよね!?何で!?」

映司の言うとおり比奈は未成年であり、お酒を飲むことはできない。

『その事か・・・実は酔った信吾さんに強制的に飲まされてな・・・そしたら凄い勢いで飲み始めて・・・手が着けられなくなって・・・。』

「・・・そうですか。」

映司もこれ以上追求するのを止めた。

「そういえば、知世子さん達は?」

『すぐ酔いから覚めてな、会長と里中は仕事に、知世子さんは俺と伊達さん達の看病だ。』

「そうですか・・・後藤さんも大変ですね。」

『あぁ・・・。』

何だか妙な空気になる。

『ところで火野。要件は何だ?』

「あ、そうだった。実は・・・。」

映司は後藤にこれまでの出来事を話した。異世界にとばされた事、そこで今日までにあった出来事を・・・

『そうか・・・じゃあ火野は今、その異世界フロニャルドのビスコッティ共和国にいるんだな。』

「はい。」

『分かった。とりあえず花見には戻ってこられるんだな。』

「こっちの人達が探してくれてます。」

『それならいい。この事はみんなに話した方がいいか？』

「あ～・・・内緒にしてもらえますか？心配させたくないので。」

『分かった。じゃあまた花見の時に。』

「はい。それじゃあ。」

そう言い電話をきった。ちなみに再びオーズに変身した事は言っていない。

「ふぅ～、お～い終わったよ～もう電源きっｔ・・・」

電話が終わった為、終わった事を伝えようとした映司。しかし・・・

映司は絶句した。何故なら・・・

「リコ～駄目だって！このバイク大切な物なんだから！」

「そうでござるよ！これが無ければ映司殿は困ってしまうでござるよ！」

「勇者様！ユッキー！離して欲しいであります！携帯も興味深いでありますが、バイクはもっと興味があるであります！是非分解して構造を調べたいのであります！」

映司が見た光景。それはライドベンダーに対して性癖が発動したリコッタがライドベンダーを分解しようとし、シンクとユキカゼが必死にそれを止めている光景だった。

「「うわぁ！」」

リコッタにしがみついていたシンクとユキカゼが弾かれ、リコッタはライドベンダーに向かう。無論工具を持って・・・

「そ・れ・で・は・・・いただくであります～す♪」

リコッタがライドベンダーの分解に入ろうとした時！

「！？　いた！な、何でありますか！？」

リコッタの周りを数匹のタカカンドロイドが取り囲み、リコッタをつつく。

「リ～コちゃん・・・。」

後ろからリコッタを呼ぶ声。まるでブリキの人形のようにゆっくりリコッタが後ろを向く。

「え、えい、映司さん・・・。」

そこには笑顔の映司。しかしリコッタにはそれが不気味に見えた。

「ご、ごめんなさいであります！」

もの凄い速さで土下座するリコッタ。

「その、このバイクと言うのが気になって・・・つい分解したいと思ってしまい・・・これは性癖であって・・・その・・・。」

「リコちゃん。駄目だよこんな事しちゃあ。」

映司は優しくお説教。

「・・・ごめんなさいであります。」

「分かってくれれば良いよ。」

映司はリコッタを許してタカカンドロイドを元の缶に戻す。

その時・・・。

ウホ×数回

ゴリラカンドロイドに反応が現れる。

「「「何だ（ござるか）（でありますか）？」」」
ゴリラカンドロイドの反応を見て首を傾げる3人。
「この反応・・・まさか！」
映司はこの反応の正体を悟った時。
無数の光弾が映司達の周りに着弾する。
「「「！？」」」
「この攻撃は！」
シンク、ユキカゼ、リコッタは訳が分からず、映司はオーズドライバーを装着する。
そして、そいつは現れる。
「ま、魔物！？」
リコッタが驚きの声を上げる。
「シンク君達は下がって！」
映司に言われ、周波増幅機の後ろに隠れるシンク達。
「貴様がオーズか。」

「そうだよ。」

映司は魔物の問いに答える。

「そう言うお前はヤミーだね。」

映司は魔物　ヤミーに向かって言う。

「いかにも・・・我はシャコヤミー。我が主の命によりオーズ、貴様を抹殺する！」

「っ！」

魔物　シャコヤミーは手から光弾を放つ。映司は右に回避する。そして回避しながら3枚のコアメダルをオーズドライバーにセットする。

「変身！」

《タカ！クジャク！コンドル！タ～～ジャ～～ドル～～～～～！！》

映司はオースキャナーでオーズドライバーにセットされた3枚のコアメダルをスキャンし、仮面ライダーオーズタジャドルコンボに変身する。

「その忌々しい炎・・・今ここで消してやろう！」

シャコヤミーがオーズに向かって叫んだ。

一撃と吸収と雷撃の力（前書き）

第３０話です。

新しくオーズのＩＦを書く事にしました。まだ書いてはいませんが、年末までには投稿したいと思います。

一撃と吸収と雷撃の力

召喚台でオーズとシャコヤミーが対峙している。

「「「・・・。」」」

シンク、ユキカゼ、リコッタは緊張しながらこの光景を見ていた。

「・・・はっ！」

遂にシャコヤミーが動き、オーズに接近する。

「っ！」

シャコヤミーが接近して来た為、オーズは回し蹴りを放つ。

「ぐぅ！」

回し蹴りはシャコヤミーにヒットし、シャコヤミーは若干後退する。

「はぁ！」

オーズはタジャスピナーでシャコヤミーにパンチを繰り出す。

ガシ！

「なっ・・・」

「甘いなオーズよ。」

タジャスピナーを装備した拳はシャコヤミーに受け止められる。

「ふん！」

「うがぁ！」

シャコヤミーのパンチを腹部に受けるオーズ。その威力は尋常ではなく、数メートル吹き飛ぶ。

「な、何だ・・・あの威力は・・・。」

オーズはシャコヤミーのパンチの威力に驚愕する。

「シャコか・・・シャコ・・・シャコ・・・あ！」

周波増幅機の後ろに隠れながら戦いを見ていたシンクはある事を思い出す。

「映司さん！」

シンクは思い出した事をオーズに伝えるべく、オーズを呼ぶ。

「気をつけて下さい！シャコのパンチの威力は甲殻の外からでもカニの内臓を破壊できる程の威力があります！」

シンクは、かつてシャコの生態をテレビで視聴していた為、シャコのパンチの威力が強力である事を知っていたのである。

「そうだったのか・・・シンク君ありがとう！」

シャコヤミーのパンチの恐ろしさを覚えたオーズは立ち上がり、シャコヤミーと再び対峙する。

「そこの小僧からアドバイスか・・・だがそれだけでは・・・私は倒せん！」

シャコヤミーが再びオーズに接近、右ストレートを繰り出す。

「この！」

オーズは右ストレートをタジャスピナーでガードする。

「っう・・・」

それでも、強力な衝撃が伝わる。

「く・・・せや！」

「ぬがぁ！」

衝撃に耐えたオーズは、メダジャリバーで反撃する。

「はぁ！」

「ぐがぁ！」

オーズはメダジャリバーで連撃する。シャコヤミーからは火花が散る。

（く・・・セルメダルさえあれば・・・ん？）

シャコヤミーはメダルを欲した時、何かを感じた。

（この強い欲望は・・・ふっ、なるほど。）

感じたのが強力な欲望であり、その欲望を持った人物を探し当てる。

「はぁ！」

オーズはメダジャリバーで再び斬りかかる。

「ふん。」

シャコヤミーはそれを左手で受け止める。

「嘘ぉ！？」

「ぜや！」

「がぁぁぁ！」

メダジャリバーを受け止められた事に驚いているオーズの隙をつき、右ストレートを放つ。

オーズは右ストレートを受け、後ろに飛ばされる。

「・・・邪魔だ。」

シャコヤミーは光弾を放ち、周波増幅機を破壊する。

「「「うわ！」」」

シンク達が悲鳴上げる。その時にはシャコはある人物に接近する。

「・・・貴様の欲望・・・吸い取らせてもらおう。」

そう言い、シャコヤミーは1人の少女　リコッタの頭を掴む。

「ひゃ！」

「「リコ！」」

それに気づき助けに行こうとするシンクとユキカゼだが・・・

「もう遅い・・・。」

「！？　あぁぁぁぁぁぁぁ！」

リコッタの欲望がセルメダルに次々と変わり、シャコヤミーに蓄積されていく。

「・・・こんなものか。」

「・・・。」

先ほどまで抵抗していたリコッタが動かなくなる。

そのままシャコヤミーはリコッタの体をシンクに投げる。

「リコ！」

シンクがリコッタをゆざぶるが・・・。

「・・・。」

シャコヤミーに欲望を吸われた為、抜け殻の様になっていた。

「リコ！しっかり！リコ！」

「リコ！しっかりするでござる！」

シンクとユキカゼが必死に呼びかける。

「そいつの欲望・・・なかなか良かったぞ。」

「貴様！」

オーズが背後からシャコヤミーに斬りかかるが・・・。

「なっ・・・。」

「甘いな。ふん！」

「ぐがぁ！」

メダジャリバーを掴まれ、更に左ストレートを受け、オーズは地面を転がる。

「オーズよ。大人しく殺されろ。」

シャコヤミーはオーズに向かって歩く。

「く！」

《ギン！ギン！ギン！ギン！ギン！ギン！ギン！ギン！・・・ギガスキャン！》

オーズはタジャスピナーのセルメダル7枚をスキャンし、ギガスキャンを発動する。

「せいや！」

ギガスキャンにより精製されたエネルギー弾をシャコヤミーに放った。

が・・・

「舐めるなよオーズ。」

シャコヤミーは右ストレートでエネルギー弾を相殺する。

「な・・・。」

「ふん！」

「つっ！」

シャコヤミーの一撃を回避するオーズ。

（くそ・・・後ろからなら当たるのに・・・後ろ？）

オーズは閃く。

（そうだ！後ろだ！それなら・・・。）

オーズはシャコヤミーを撃破する為の方法を思いつく。

「頼む！俺に・・・力を！」

オーズはあの時と同じ様に天に向かって叫ぶ。

すると・・・

オーズの周りから再び７つの光が現れる。オーズはタジャスピナーのスペリオルシールドを開く。７つの光はタジャスピナーに収まり、スペリオルシールドを閉じる。

そしてオースキャナーでタジャスピナーをスキャンする。

《クワガタ！カマキリ！バッタ！クワガタ！カマキリ！バッタ！・・・・ギガスキャン！》

タジャスピナーに緑色に輝くエネルギー弾が精製される。

「また豆鉄砲か・・・。」

シャコヤミーは余裕を見せる。

「はぁぁぁぁぁ・・・。」

やがて、エネルギー弾には電気が帯びる。

「せいやぁぁぁぁぁ！」

オーズはエネルギー弾を放った。

「そんな攻撃我に・・・な、何だと！？」

シャコは驚いた。何故なら・・・

エネルギー弾は次々と分身していくのだから。その数、約５０。

「こんな馬鹿な事が！」

シャコヤミーが叫ぶが、エネルギー弾はシャコヤミーを取り囲み・・・

エネルギー弾は一気にシャコヤミーに向かって行く。

「ば、馬鹿なぁぁぁぁぁ！」

約５０のエネルギー弾を防げる訳もなく、シャコヤミーはエネルギー弾を受け大爆発を起こしたのだった。

撃破と過去とリバウンド（前書き）

第３１話です。

遂に明日、ＭＯＶＥＩ対戦の公開日ですね。自分はテストなので公開日には行けませんが、テスト終了次第見に行きます。

ＩＦの内容どうしようか・・・

撃破と過去とリバウンド

シャコヤミー撃破後。映司達はシャコヤミーに欲望を吸われたリコッタを連れ、医務室を訪れていた。

リコッタが倒れたと聞き、エクレやミルヒ、ダルキアンも医務室を訪れていた。
ちなみに映司はトイレに行っている為、医務室にはいなかった。

「リコの様態は？」

エクレがリコッタの状態をシンクに訪ねた。

「命に別状はないって。ただ・・・。」

「ただ？」

「欲望を吸われたらしいんだよ・・・。」

「欲望を？」

シンクの返答に首を傾げるエクレ。

「・・・。」

欲望と言う言葉を聞き、ミルヒは暗い表情になる。

「・・・もしかして、勇者様達を襲ったのは昨日のと一緒じゃあ・・

・。」

ミルヒはカブトガニヤミーの一件を思い出す。

「ちょっと良いでござるか？」

ユキカゼがすっと手を挙げる。

「今日の魔物や昨日の魔物についてなのでござるが・・・映司殿に聞いてみた方が良いと思うでござる。」

「映司さんに？」

ユキカゼの提案にシンクが首を傾げる。

「左様。おそらく映司殿はあの魔物の事を知っているでござる。それに魔物の方も映司殿の事を『オーズ』と言っていたでござる。これは何か関係があると拙者は思うでござるよ。」

「確かに・・・。」

「そうだな・・・。」

シンクとエクレはユキカゼの考えに頷いていると・・・。

「ふぅ～、スッキリした～。」

映司がトイレから帰ってきた。

「映司さん。」

「何ですか？」

「映司さんに聞きたい事があります。」

「・・・。」

ミルヒが映司に尋ねると映司の表情が変わる。

「昨日や今日現れた魔物、そして映司さんのもう一つの姿　『仮面ライダーオーズ』について・・・。」

「・・・やっぱりそうなりますよね。」

「え？」

「予想はしてました。必ず聞いてくると・・・お話します。俺が知りうる事を。」

こうして、映司はシンク達に話し始めた。
オーズの事。グリードとヤミー。コアメダルとセルメダル。コアメダルをめぐる壮絶な戦い。世界の終末を賭けた最終決戦。自分自身がグリードになりかけた事。そして今は亡き相棒の存在・・・映司は知りうる事を全て話した。

フロニャルドの面々はその話しに驚き、シンクに至っては自分のいた世界でそんな事が起きていた事を知り驚愕するのだった・・・。

「・・・俺が知ってるのはこれくらいです。」

話しが終わり、シンク達は愕然としていた。特にシンクが。

「そんな事が・・・・。」

ミルヒは、自分達の戦いがいかに甘いかを知った。

（そういえば・・・・。）

シンクはある事を思い出す。

（中１の頃に何か変なニュースやってたな・・・・。）

シンクが思い出した事。それは・・・・。

（確か・・・新宿の一部がドイツの森になったとか、丁髷になる変わりに１０００万もらえたとか、突然変な塔ができたとか・・・・。）

ニュースてやっていた事を振り返るシンクだった。

「う～ん・・・・。」

シンク達がそれぞれの思いがある中、リコッタが目を覚ました。

「リコ！大丈夫ですか！？」

「・・・姫様？それに皆さん？」

ミルヒが思わずリコッタの手を掴む。そして、自分の置かれた状況

を理解する。

「その・・・迷惑かけてごめんなさいであります・・・。」

「謝るな。でも無事で良かったよ・・・。」

エクレも安心する。

「あ、あの～勇者様。」

「何？」

リコッタはシンクに声をかける。

「その・・・携帯電話を分解したいので、携帯電話を出して下さいであります！いや、今すぐ出して下さい！」

「・・・へぇ？」

まさかの発言にきょとんとするシンク。

「早くするであります！」

ベットからシンクに飛びかかる。

「い、いきなり何？」

シンクは混乱する。

「もしかして・・・。」

映司は何か嫌な予感がした。

「どうなってるんだ？」

エクレも首を傾げる。

「多分・・・ヤミーに吸い取られた欲望が一気に戻ってきたから、欲望が増幅されているのかな？」

「そ、そんな事が！」

映司の見解にシンクは驚く。

「勇者様～！」

「ひぃぃぃぃぃ！助けてーーー！」

シンクは医務室から逃走。当然リコッタも追いかける。犬の様に・・・。

「「「「・・・。」」」」

「・・・元気で何よりでござるな。」

皆が唖然とする中、ダルキアンだけは違っていた。

その後、シンクが欲望が暴走？したリコッタに追いかけまわされる

ところを数人の騎士達が目撃したと言う。

ちなみにこの追いかけっこは1時間程行われたらしい。

案内と風月庵と住まい決定（前書き）

第３２話です。

やっとオーズのＩＦの構成が決まりました。近々投稿したと思います。

案内と風月庵と住まい決定

「・・・シャコヤミーがやられたか。」

森の中で謎のグリードが1人呟く。

「まぁいい。元々期待はしていなかったからな。」

そのまま森の奥へと歩いて行く。奥には切り株があり、その切り株には石棺が塞がれた状態で置かれていた。

「・・・時間はまだある。来たる日にオーズを倒すのも面白い・・・。」

謎のグリードは石棺の蓋を開ける。そこには黒いコアメダルが6枚納められていた。

――――――

「そういえば姫様。俺の部屋はどうなりました？」

映司がミルヒに尋ねる。ちなみに場所はまだ医務室である。先ほどまでリコッタとシンクがいたのだが、リコッタが暴走して、それに巻き込まれたシンクは現在逃走中である。

「それなんですが・・・まだ決まってないんです。申し訳ありません。」

ミルヒは申し訳なさそうに言う。

現在の映司の部屋はあくまでも仮であり、本来の部屋ではない。今日には部屋が決まる筈なのだが、未だに決まっていなかった。

「そうですか・・・。」

「はい、本当に申し訳ありません。」

映司とミルヒがこんな会話をしていると・・・。

「映司殿は部屋が決まってないのでござるか？」

ダルキアンが会話に参入する。

「はい、実は部屋のストックがなくて・・・。」

ミルヒは部屋がなかなか決まらない理由を述べる。

「う～む、なるほど・・・。」

ダルキアンは腕を組み、しばらく考え事に精を出す。

「そうでござる。」

何か閃いたのか、ダルキアンが手をポンと叩く。

「ダルキアン卿、何か名案が？」

エクレはダルキアンの考えが気になる。

「うむ。映司殿、我々の風月庵に来てみてはござらんか？」

「風月庵？」

映司はダルキアンの発言に首を傾げる。

「風月庵と言うのは、ダルキアン卿やユキカゼが住んでいる場所の事だ。」

首を傾げる映司に、エクレが説明する。

「左様。幸いにも部屋は空いているでござる。映司殿がよければ手はずは整えるでござるよ。」

「でも、俺その風月庵には行ったことないしな・・・。」

映司がそう言うと・・・

「なら、今から案内するでござるよ！」

ユキカゼが元気に提案する。

「お～ユキカゼ、良い考えでござる。さて、映司殿はどうするでござるか？」

「う～ん・・・。」

映司はダルキアンの誘いにのろうか迷っていると。

「映司、行ってきたらどうだ？」

「エクレちゃん？」

「部屋も決まってないんだろ？だったら行ってこい。それにダルキアン卿からの提案だ。受けなきゃ損するぞ。」

エクレが映司を促す。

「どうするでござるか？」

「・・・分かりました。その提案受けます。」

映司が提案を了承する。

「では決まりでござるな。ユキカゼ、先に帰って掃除を頼むでござる。」

「分かりました。お館様。」

ダルキアン卿の指示で風月庵に戻るべく、ユキカゼは医務室から飛び出して行った。

「さて・・・映司殿も準備しておいて欲しいでござる。」

「分かりました。」

「では、拙者は城門で待っているでござるよ。」
そう言い残し、ダルキアンも医務室から出て行った。
「私も騎士達の訓練の監視に戻るかな。」
「私も仕事に戻ります。」
エクレとミルヒもダルキアンの後に続いて医務室を出る。
「俺も準備しなきゃね。」
そして最後に残った映司も医務室を後にしたのだった。

「お待たせしました。」
「うむ。」
城門前。映司は準備を完了しダルキアンと合流する。
「では早速出発するでござるよ。」
「はい。」
ダルキアンはセルク、映司はライドベンダーに乗り風月庵に向かった。

ただし、ダルキアンのセルクにスピードを合わせている為、ライドベンダーは遅めである。

フィリアンノ城を出発して数分後・・・

「いや～映司殿は不思議な乗り物に乗っているでござるな。何時見ても不思議でござるよ。」

「そうですか？」

「フロニャルド全土を旅してきたが、その様に自動で動く乗り物は初めて見たでござるよ。なんと言う乗り物でござるか？」

「これはバイクって言うんです。俺のは一般のと少し違うんですけどね。」

ダルキアンの質問に答える映司。

「なるほど、バイクでござるか・・・。」

ダルキアンはバイクに興味津々である。

「映司殿、今度是非とも乗り方を教えて欲しいでござる。」

「俺で良ければ。」

そんな会話をしていると・・・

「お、映司殿あれが風月庵でござるよ。」

「あれが？」

映司は驚いた。風月庵がどんな所かと思っていたのだが・・・

「どうでござるか？」

「・・・良いと思います！」

映司が驚くのも無理はない。風月庵の建物はまさに、映司とシンクの故郷の日本古来の建物にそっくりだったのである。

そうこうしている内に入り口に来た。

「着いたでござるよ。」

「ここが風月庵か・・・本当に江戸時代の頃の建物みたいだな・・・。」

かつて見た江戸の建物を思い出す映司。

「あ！お館様お帰りなさいでござる。そして映司殿いらっしゃいでござる。」

ユキカゼが出迎えてくれた。

「ただいまでござる。」

「えっと・・・お、お邪魔します。」

「はいでござる♪」

ダルキアンと映司は入り口の門をくぐり抜け敷地に入る。

「すごいな・・・。」

映司は庭も和風であることに感心する。

「じゃあ部屋まで案内するでござるよ。」

ユキカゼを先導に建物の中へ、しばらく廊下を歩いて行く。

「ここでござるよ。」

ユキカゼが襖の前で止まる。

「では！」

ユキカゼが襖を開けた。

「お～、これはなかなか・・・。」

襖の奥には畳が敷かれており、机が一つある。部屋の大きさは1人が住むのには十分な大きさだった。また、縁側もありそこから庭に出る事も出来るようだ。

「どうでござるか？」

部屋を色々確かめる映司に感想を聞くユキカゼ。

「良いですね！気に入りました！」

映司もこの部屋が気に入ったようだ。

「ぞうでござるか！早速姫様に連絡するとしよう。」

ダルキアンは連絡をする為通信機がある居間に行き、映司は縁側で庭を眺めていた。

『そうですか。映司さんは風月庵に。』

「えぇ、映司殿も気に入ってもらいました。」

ミルヒはダルキアンの報告を聞きホッとするのだった。

その日の夜、風月庵では新しい仲間の歓迎会が行われたのであった。

教習とバイクとお昼調達へ（前書き）

第３３話です。

今回はすごく短いです。

教習とバイクとお昼調達へ

シンクと映司がフロニャルドに呼ばれて（映司は巻き添えだが）数日が過ぎた。

シンクと映司もすっかりフロニャルドでの暮らしになれ、シンクはリコと一緒につまみ食いをしたり、騎士達の訓練に参加したり、映司は少しずつだがダルキアンにバイクの乗り方などを教えたり、シンク同様に騎士達の訓練に参加したりして、それなりにフロニャルドでの生活を満喫していた。

また、シャコヤミーを撃破してからヤミーは現れず、映司はオーズにはならず平和な時が続いていた。

ある日の風月庵。

「じゃあ外にでて走行してみましょうか。」

「うむ。遂にここまで来たでござる。」

映司にバイクの乗り方を教わっているダルキアン。今日遂に屋敷の外での走行テストになった。

映司はライドベンダーを屋敷の外の道に出す。

ダルキアンはライドベンダーにまたがる。

「お館様、頑張って下さいでござる！」

「うむ。では行くでござる！」

ダルキアンがライドベンダーを発進させようとした。

「ちょっとまって下さい！」

映司が発進を制止させる。

「何でござるか？映司殿。」

ダルキアンは制止された意味が分からず、とりあえず映司に質問する。

「ダルキアン卿・・・ヘルメット忘れてます。」

「あ・・・。」

映司はダルキアンにヘルメットを渡す。

「いや～すっかり忘れていたでござるよ。」

ダルキアンは頭をかきながらヘルメットを受け取る。

「忘れないで下さいよ。下手したらバイクから転倒して最悪死にますから。」

「いや～、でもこの世界では死なないでござるよ。」

「死ななくても大怪我しますよ。」
映司に軽く説教されながらヘルメットをかぶるダルキアン。
「う～ん、やはりヘルメットは苦手でござるな・・・。」
ヘルメットをかぶったダルキアンは不満げに言う。
実際、ヘルメットをかぶると獣耳が当たって違和感を感じるのである。
「では・・・行くでござる！」
ダルキアンはそう言い、ライドベンダーを発進させた。
ちなみにダルキアンのセルクが若干不機嫌そうにその光景を見ていた。らしい・・・。
・
・　・
・　・　・
しばらくして、ダルキアンが風月庵前に戻ってくる。
「どうでござったか？」
ダルキアンが映司に尋ねる。
映司はタカカンドロイドを使い、上から見ていたのである。ちなみ

に映像は、映司の携帯で見ている。

「良かったですよ。始めた時に比べたらだいぶ上達しました。」

「そうでござるか！」

「良かったでござるね！お館様！」

高評価に喜ぶダルキアンとユキカゼ。

「じゃあ今日はここまでにしましょう。」

映司の言葉で今日の教習はおひらきになる。

「そろそろお昼時でござるな・・・川に魚を釣りに行くでござる。」

「いいですねお館様！映司殿もどうでござるか？」

ダルキアンとユキカゼに誘われる映司。

「釣りですか？良いですよ。」

「では決まりでござる。」

ダルキアンは一度屋敷の中へ、そして釣り道具を持ってくる。

釣り道具をもったダルキアン、ユキカゼ、映司は近くの川へと向かった。

釣りと昼食と忘れていた事（前書き）

第３４話です。

今この物語にオリジナルのコアメダルを出すが迷っています。
例えば幻獣系とか・・・

釣りと昼食と忘れていた事

ここは、風月庵の近くにある清流。

「「「・・・。」」」

現在ここで釣りを行っているのは、ダルキアン、ユキカゼ、映司の3人である。

3人は本日の昼食を獲得する為、清流にて釣りを行っているのだ。

「・・・　っ！」

3人の内1人に魚が食いつく。

しばらく魚との戦いが続く。

「・・・　ふん！」

釣り竿を思いっきり引く、食いついていた魚が宙を舞い、その人の元へと引き寄せられた。

「・・・また、お館様でござるか～。」

「本当にね～。今何匹目ですか？」

「今のでちょうど5匹目でござるな。」

今魚を釣り上げたのはダルキアンであった。ちなみにユキカゼが2

匹、映司は1匹である。

「ダルキアン卿は何でそんなに釣れるんだろうか・・・。」

未だに1匹しか釣れてない映司は疑問に思う。

「何か秘訣でもあるんですか？」

「いやはや、ただ運が良いだけでござるよ。」

映司はダルキアンに何か秘訣があるのでは？と疑う。

「いや～お館様は何時も釣りでは大量でござるからな～。」

ユキカゼがこれまでの経験を口にする。

「やっぱり秘訣があるんじゃないですか！教えて下さいよ！」

「いや・・・秘訣と言う訳ではないが、ただ魚がかかってくるのを信じているだけでござるよ。」

「なるほど。俺もやってみよう！」

映司はダルキアンの言葉を信じて釣りを再開する。

その時！

「あ、いたいた。ダルキアン卿～！ユッキー～！映司さ～ん！」

突然映司達を呼ぶ声がする。

「ん？今の声は・・・・。」

「今の声って・・・・。」

3人は声がした方を向く。

「お、勇者殿。」

「勇者殿でござったか～。」

「シンク君！」

声の主はシンクだった。

シンクが映司達の元に走ってきた。

「勇者殿、どうしてここが？」

ユキカゼはシンクに尋ねる。実際シンクにはここに来るとは言っていない。

「あ、それならホムラが案内してくれたんですよ。」

シンクがそう言うと、シンクの横に犬が1匹がお座りする。

「なるほど～ホムラであったでござるか～。」

ユキカゼはそう言いホムラに近づく。

「ところでダルキアン卿達は何を？」

「ん？あぁ、釣りをしてるんだよ。」

シンクの質問に映司が答える。

「勇者殿もどうでござるか？竿は後一本余ってるでござるよ。」

「え？良いんですか！？」

ダルキアンはシンクを釣りに誘う。

「勿論でござるよ。良いでござるか？ユキカゼ　映司殿。」

「拙者は良いでござるよ～。」

「俺も良いですよ。みんなでやった方が面白いですし。」

ユキカゼと映司もシンク参加に意義はないようだ。

「では決まりでござるな。」

「ありがとうございます！」

こうしてシンクが釣りに参加が決定した。

・　・　・　・　・

シンクが釣りに参加してから数十分後・・・・。

現在の獲得数は、

ダルキアン　7匹
ユキカゼ　　4匹
映司　　2匹
シンク　　2匹
である。

「・・・なかなか釣れない・・・・。」

「僕もですよ映司さん・・・・。」

互いに2匹しか釣れていない映司とシンクは肩を落とす。

「まぁ、人それぞれでござるよ！たまたま今日は運が悪かったのであって・・・・。」

ユキカゼが慰め様とするが、2人の落ち込み具合を見て何も言えなくなる。

しばしその場が重い空気になる。

「・・・・ん？これは・・・・」

その時、ダルキアンが何かを見つける。

「・・・　！映司殿！魚がかかったでござるよ！」

「・・・え？嘘！？」

ダルキアンの言葉に反応した映司だが・・・。

「っお！？な、何だこの引きは！？」

「この竿のしなりは・・・間違いない！大物でござる！」

ダルキアンは竿のしなりから大物と判断する。

「くっ！重い・・・！」

映司は必死に竿を引くが、当然獲物も抵抗する。映司ＶＳ巨大魚の死闘？が開始される。

「映司さん！僕も手伝います！」

シンクは映司の手助けをすべく映司に加勢する。

しかし未だに巨大魚は抵抗する。

「駄目だ・・・重い！」

「ここは拙者も！」

「助太刀するでござる！」

更にユキカゼとダルキアンも加勢する。

しかし獲物も必死に抵抗する。

「みんな！一気に行くよ！」

映司の一言で竿を握る全員が竿に力を込め、踏ん張る。

「「「「「せーの！」」」」」

４人が息を合わせて竿を一気に引き上げた。

ザバァァァァン！

辺りに水しぶきが飛び、現れたのは・・・。

「で、でかい！」

映司が言う様に、とてつもなくでかい魚だった。

・・・・・・

映司達は大物を釣り上げた後、十分と判断し昼食のとる事にした。

メインはやはり映司達が力を合わせ釣り上げた馬鹿でかい奴だろう。

「「「「「いただきます。」」」」」

食事では定番のセリフを言った後、各自が釣った魚を食す。

「「美味しい！」」

映司とシンクが声をそろえて叫ぶ。自分で釣った為味は格別である。
あっという間に食べ終わる。
「2人共、でかいのが焼けたでござるよ。」
一番でかいのが焼けた為、ダルキアンは映司とシンクを呼ぶ。
映司とシンクはどこからか取り出したお箸を使用しでかい奴を食す。
「「これも美味しい！」」
再び声がそろう映司とシンク。
「お館様・・・この2人・・・。」
「あぁ、拙者もユキカゼと同じ事を思っていたところでござるよ。」
互いに目を合わせるダルキアンとユキカゼ。
（（この2人、似た者同士でござる））
そんな事を思った2人であった。
「そういえば勇者殿と映司殿。」
「はい？」
「ふぅあい？」

ダルキアンが2人に声をかけるが、シンクは口にまだ魚が残っているらしく返事がおかしかった。

「勇者殿と映司殿は、もうビスコッティにずっと住むのでござるか？」

ダルキアンのこの言葉に固まる映司とシンク。

「？　2人とも、どうしたでござるか？」

固まった2人を心配してユキカゼが声をかける。

「「し、しまったぁぁぁぁ！すっかり忘れてたぁぁぁぁ！」」

この2人、どうやらビスコッティでの生活を満喫しすぎてすっかり忘れていた様である。

「まぁ、絶対に帰れないと言う訳ではないのでござるよ。」

「え？そうなんですか？」

このダルキアンの言葉に映司が反応する。

「うむ。拙者とユキカゼはお役目があってな、色々な国を回ってきたでござるよ。その中には、召喚された勇者が元の世界に戻ったと言う記録もあったでござる。」

「ダルキアン卿、それってつまり・・・。」

「簡単に言えば絶対に帰れない訳では無いと言う訳でござる。」

ダルキアンのこの言葉を聞いた2人は・・・

「「良かった～。」」

帰れる方法があるとしりホッとしたのだった。

「あ、そうだ。」

シンクが突然何かを思い出した様だ。

「どうしたのシンク君？」

「実は今日の夜、姫様のスケジュールが落ち着いたからお茶会をする事になってるんです。それで、そのお茶会に是非映司さんも参加して欲しいから呼んできて欲しいって姫様から頼まれてたんだった。」

シンクが思い出した事は、今日の夜にお茶会がありそれに映司も参加して欲しいと言う事だった。

「俺も？」

「はい。何でも映司さんともじっくり話しがしたいらしいんです。」

シンクの話しだと、お茶会には映司も参加して欲しいらしい。

「分かった。夜だよね？」

「はい。夕方頃に城に来てもらえれば。」

「了解。」

という訳で映司は夜にお茶会に行く事になった。

「2人共、お話は良いでござるが早くお魚も食べて欲しいでござる。炭になってしまうでござるよ。」

ユキカゼの言葉で再び魚を食べ始める映司とシンクだった。

ーーーーーー

「お茶会か・・・面白い。ヤミーを暴れさせてみるか。」

映司達の近くの竹藪で謎のグリードは呟いた。

そしてメダルを一枚上に投げ、もう一枚をコイントスする。空中でメダル同士がぶつかり、どす黒いオーラを放ちながらヤミーが生まれる。

「今は動くな。お茶会とやらが始まって数分後に襲撃しろ。」

「・・・了解した。我が主よ。」

謎のグリードはヤミーにそう言い、ヤミーは竹藪の奥へと消えて行った。

謎のグリードは未だに食事をしている映司達を見つめていた。

茶菓子と星読みとメダルの過去（前書き）

第３５話です。

オーズのＩＦってどんなのがありますかね・・・個人的には、『もし映司が真木からメダル奪って完全態恐竜グリードになったら』ぐらいしか思いつきません。皆さんはどうですか？

茶菓子と星読みとメダルの過去

時刻は夕方頃、風月庵にある映司の部屋。

映司はミルヒにお茶会に呼ばれている為、現在準備をしていた。

「明日のパンツ良し、メダル良し、ベルト良し、それとアンク良しっと・・・。」

一通り持って行く物の確認をする。

「本当に何も持って行かなくていいのかな・・・とりあえずメダルとベルトは持って行くけど・・・。」

シンク曰わく、何も持って来なくて良いらしい。だが、もしヤミーが現れた場合を想定し、念の為映司はメダルとベルトは持って行く事にした。ついでに明日のパンツと相棒も。

「そろそろ時間だね。」

映司は立ち上がり、庭に置いてあるライドベンダー（自販機モード）の元へと向かう。

ライドベンダーの前に立った映司は、セルメダルを投入して中央のスイッチを押す。ライドベンダーは自販機モードからバイクモードへと変形した。

映司はライドベンダーにまたがり、ヘルメットを着けようとした。

「おや映司殿、もう行くでござるか？」

隠密舞台の隊員（犬や狐）と戯れていたユキカゼが声をかける。

「うん、もう時間だからね。」

「了解でござる。ちなみに帰りはいつ頃に？」

「そうだな・・・多分１０時ぐらいとかかな？」

「分かったでござる。その時間に合わせて、お風呂を準備しておくでござるよ。」

「ありがとうユキカゼちゃん。」

ユキカゼとちょっとした会話をし、ヘルメットをかぶりライドベンダーのエンジンを入れる。

「じゃあ行ってくるよ。」

「お気つけて～。」

ユキカゼに見送られ、映司は風月庵を出発した。目的地であるフィリアンノ城に向けて。

ーーーーーー

そこは風が吹く町だった。この町には誰でも万能の札を使えば、超人のごとき力を得る事ができた。だが・・・超人になることは人としての自分を捨てる事であり、更には自分の町を泣かせる事でもあった。

そしてその町を・・・いや、その町の涙を拭う者がいた。最初に現れたのは黒く、骸骨の様な顔を持った仮面の戦士。次に現れたのは半分緑で半分黒の仮面の戦士。途中からは、全身が赤く憎しみを振り切った仮面の戦士が現れた。

ある町には欲望が渦巻いていた。人々の欲望から生まれる怪人。そしてその怪人を生み出す更なる欲望を持った怪人がいた。

そして、欲望から人々を守る者がいた。欲望の源を使い、たさいな姿になる仮面の戦士。人々の英知の結晶が生み出した仮面の戦士。

そして・・・万能の札と欲望の源の2つを使い現れた邪悪な力を持つ仮面の戦士がいた。

彼はその邪悪な力で風の吹く町を襲った。その邪悪な力に立ち向かうべく、半分緑で半分黒の仮面の戦士と欲望の仮面の戦士は共に邪悪な力に立ち向かった。

邪悪な力は最後、奇跡の風と神秘の炎に覚醒した2人の仮面の戦士の前に敗れさったのだった・・・

「・・・今のは・・・まさかこのコアメダルの過去を垣間見るとはな。」

謎のグリードは森の中で1人呟いた。

「だが、あの半分こは何だ？あんな奴は知らんが・・・まあいい。気にしないでおこう。」

辺りは既に暗くなり、空は既に夜の姿へと変わっていた。

ーーーーーーー

フィリアンノ城の応接室。現在は映司とシンクがいるだけで、他は誰もいない。

あれこれ1時間はまたされている。

「遅いな・・・。」

「そうですね・・・。」

映司もシンクもやることなすことが無く暇を持て余していた。

「映司さん、あっち向いてほい！でもやりますか？」

「あっち向いてほい！か・・・やろうか。暇だし。」

あっち向いてほい　をやる事にした映司とシンクは互いに向かい合う。

「「最初はグー！じゃんけんぽい！」」

映司：パー
シンク：グー

「あっち向いてほい！」

「っ！　しまった！」

「良し、俺の勝ちだね。」

映司が勝利した。だが・・・

「・・・つまらないから止めようか。」

「・・・そうですね。」

たった一回であっち向いてほい！は終了した。

その時！

「すいません！お待たせしました！」

ドアが開くと同時にメイド隊が、ぞろぞろと部屋に入ってきた。

「勇者様それに映司様。これから姫様と会うにあたり、あなた達には正装をしてもらいます。」

「正装ですか？」

メイド隊メイド長であるリゼルの言葉に首を傾げる映司。

「その通りです。勇者様から正装開始！」

「「「はっ！」」」×複数

「ちょ！」

リゼルの指示でシンクのお着替えが始まる。

「すごい手際良いな・・・。」

映司はメイド達の手際の良さに驚く。

（そういえばリゼルさんの名前って・・・どこのＲＧＺ－９５だろう・・・。）

「何か言いました？映・司・様？」

「いえ！何も！」

くだらない考えを見抜いたリゼルは映司に笑顔で話しかける。ただし映司には悪魔の微笑みに見えた。

「メイド隊！次は映司様を正装に！」

「「「了解！」」」×複数

「お、俺も！？」

リゼルに指示されたメイド隊は映司の着替えに入ったのだった。

ーーーーーー

ミルヒは1人、お茶会の会場である城のバルコニーにいた。

しばらくしていると・・・

「「お、お待たせしました・・・。」」

何故かくたびれた映司とシンクだった。

「ようこそいらっしゃいました・・・大分お疲れみたいですね。」

「「色々あって・・・。」」

「あ、お二人とも似合ってますね！」

ミルヒは映司とシンクの服装を見て感想を口にする。

シンクはいかにもと言うようなタキシードのようなスーツ。

映司はやっと出来上がったビスコッティ騎士団の制服を着ていた。

「「ありがとうございます姫様。」」
誉めてもらい感謝する映司とシンク。
そして互いの服装を見る。
「映司さんかっこいいですね！」
「いやいやシンク君こそ！」
互いに褒め合う2人。
「ふふ、とりあえず座って下さい。」
「「あ、はい。」」
ミルヒに言われ、映司とシンクは席に着く。
メイド隊により、紅茶と茶菓子が運ばれて来る。
「どうぞ。召し上がって下さい。」
「いただきます。」
「じゃあ、お言葉に甘えて。」
まず紅茶を飲むシンクと映司。
「やっぱり美味しいですね。ビスコッティのお茶。」

シンクは紅茶の感想を言う。シンクは日本人とイギリス人のハーフの為、お茶にはうるさいのである。

「そういえば、姫様はどうして僕を勇者として選んでくれたんですか？」

シンクはミルヒに何故自分を勇者に選んでくれたかを尋ねる。

「それはですね・・・。」

ミルヒはシンクを勇者に選んだ理由を語り始めた。

星読みでシンクのアイアンアスレチックスの試合を見た事、それに魅力を感じ勇者に決めた事を話した。だが、シンクは試合の話しを聞くと暗くなった。何でもその試合は惜しくも2位で終わってしまい、悔しくて泣いてしまった試合らしい。どうやらシンクはその試合を見られ恥ずかしい様だ。ミルヒはそれでもかっこよかったとシンクを励ました。映司はその光景を微笑ましく見ていた。

バルコニーの入り口。ここに謎のグリードが生み出したヤミーが立っていた。

「欲望も十分吸った・・・そろそろ行くか。戦場（いくさば）へ・・・。」

ヤミーの周りには、欲望を吸われた数人のメイド達が倒れていた・・・。

「・・・。」

「どうかしましたか映司さん？」

突然目が鋭くなり、辺りを見渡している映司に質問するミルヒ。

「姫様・・・さっきから妙に静かすぎませんか？」

「え？」

映司に言われ、耳を立て、耳をすませるミルヒ。

「・・・確かに妙です。」

ミルヒも異変に気づく。また、シンクも異変に気づき辺りを見渡す。

「・・・ん？あれは・・・・。」

映司は入り口のドアが少し開いているのに気がつく。

「・・・な！あれは・・・セルメダル！？」

そこにはセルメダルが数枚、床に落ちていた。映司は嫌な予感がし、立ち上がり辺りを見渡す。

「姫様！シンク！気をつけて！」

映司がミルヒとシンクに警告したその時、ドアが物凄い勢いで開き、光弾が放たれる。

「くっ！」

映司は自分のイスを蹴り上げ光弾を防ぐ。その際にオーズドライバーをセットする。既にコアメダルはセットされている為、後はオースキャナーでスキャンするだけである。

「・・・さすがはオーズだ。我の奇襲を察知するとは。」

入り口にはいつの間にかヤミーが立っていた。

「シンク君！姫様！下がって！」

映司はシンクとミルヒを柱に隠れさせる。

「変身！」

《タカ！クジャク！コンドル！タ～～ジャ～～ドル～～～～～！！》

オースキャナーでコアメダルをスキャンし、映司はオーズに変身する。

「その姿・・・憎たらしいな。」

ヤミーが呟く。

「お前は・・・。」

「我の名はトリロバイトヤミー。オーズよ、貴様のその炎・・・・ここで消してやろう・・・。」

トリロバイトヤミーはオーズに向けて言い放った。

「シンク君達には触れさせない！」

オーズもタジャスピナーを構えた。

オーズＶＳトリロバイトヤミーの戦いが始まる・・・。

亀裂と未来と重力の力（前書き）

第３６話です。

弟が、リブラゾディアーテをカネゴンと似てると言っていました。
個人的には似てないと思います。

亀裂と未来と重力の力

「ふん！」

「はぁ！」

トリロバイトヤミーは右腕からエネルギー弾、オーズはタジャスピナーから火炎弾をそれぞれ放つ。火炎弾とエネルギー弾はぶつかり合い、相殺される。

「せいや！」

オーズはタジャスピナーに炎を纏わせ、トリロバイトヤミーにパンチを放つ。

「っ！　か、堅い！」

「がら空きだぞ。」

「うぁ！」

トリロバイトヤミーの甲殻に阻まれ、ダメージが与えられず逆にトリロバイトヤミーから蹴りで反撃されてしまい、地面を転がってしまう。

「こんなものなのか・・・。」

トリロバイトヤミーは倒れているオーズに向かう。

「まだ！」

「ぐっ！」

オーズはとっさに立ち上がりタジャスピナーから火炎弾ではなく、火炎放射を放つ。完全に油断していたトリロバイトヤミーは火炎放射を受け後退する。

「せいや！」

「ぬがぁ！」

オーズはこの隙を見逃さずトリロバイトヤミーを追撃、コンドルレッグによる回し蹴りを放つ。ストライカーネイルにより斬撃と似た効果を発揮し、トリロバイトヤミーにダメージを与える。ダメージを受けたトリロバイトヤミーからセルメダルが散らばる。

「はぁ！」

オーズは更にトリロバイトヤミーに対して回し蹴りを放つが・・・

「なっ・・・。」

オーズの回し蹴りはトリロバイトヤミーの右腕に阻まれていた。

「調子に・・・乗るな！」

「うがぁぁぁぁぁ！」

トリロバイトヤミーは余った左腕からエネルギー弾を発射、オーズ

は至近距離でエネルギー弾を受けてしまい弾き飛ばされる。

「「映司さん！」」

柱に隠れながら戦いを見ていたシンクとミルヒが思わず叫ぶ。

「こいつ・・・・。」

オーズは再び立ち上がる。

「こんな者か・・・オーズよ・・・失望したぞ・・・・。」

トリロバイトヤミーが近づく。

「くっ！」

「ぬぅ・・・・。」

オーズはトリロバイトヤミーの足元に火炎弾を放ち、トリロバイトヤミーは怯ませる。

オーズはその隙に立ち上がり、クジャクフェザーを展開する。

「せいや！」

「ぐほ！」

クジャクフェザーを羽手裏剣として飛ばす。羽手裏剣はトリロバイトヤミーに次々と当たりダメージを与え、辺りに更にセルメダルが散らばる。

「・・・流石に今のは効いたぞオーズ・・・・。」

トリロバイトヤミーが呟く。

「くっ・・・・堅いなこのヤミー。」

オーズはヤミーの甲殻の堅さに焦る。

「・・・・死ねオーズ！」

トリロバイトヤミーが言い放つと、トリロバイトヤミーの周りに大量のエネルギー弾が精製される。

それは、オーズめがけて飛んでいく。

「くっ！」

オーズはタジャスピナーでガードし、エネルギー弾の雨をしのぐ。

（まずいな・・・・あの甲殻を何とかしないと！）

エネルギー弾の雨が止み、オーズはタジャスピナーから火炎弾を放つ。

「効かぬな。」

トリロバイトヤミーは火炎弾を右腕で弾く。

「はぁ！」

オーズはタジャスピナーに炎を纏わせながら、トリロバイトヤミーに接近する。

「無駄だ！」

トリロバイトヤミーはエネルギー弾を放ちが、オーズは怯まず接近する。

そして、オーズはトリロバイトヤミーの懐に入り込む。

「はぁぁぁぁぁ・・・。」

タジャスピナーをトリロバイトヤミーのほぼ零距離につけ、纏わせた炎を巨大な火球にする。

「何！？」

トリロバイトヤミーも流石に驚く。

「せいやぁぁぁ！」

「ぬがぁぁぁぁぁ！」

オーズは火球を発射した。ほぼ零距離から発射された火球を受け、トリロバイトヤミーは吹き飛ばされる。更には火球を受けた甲殻に亀裂が入る。

「今だ！」

オーズは力を込める。すると、地面から7つの光が現れる。タジャスピナーのスペリオルシールドを開ける。7つの光はタジャスピナーに収まり、スペリオルシールドを閉じる。そしてオースキャナーでタジャスピナーをスキャンする。

《サイ！ゴリラ！ゾウ！サイ！ゴリラ！ゾウ！・・・ギガスキャン！》

タジャスピナーに灰色のエネルギー弾が精製される。エネルギー弾の周りは空間が歪んでいる。

「・・・オーズ、貴様ぁぁぁぁぁ！」

トリロバイトヤミーが立ち上がり、先ほど以上のエネルギー弾を作り出す。

「やらせない！」

「ぐお！」

オーズはクジャクウイングを展開、そのまま飛びながらトリロバイトヤミーに体当たりする。

体当たりされたトリロバイトヤミーはバランスを崩し、後退する。

「はぁぁぁぁぁ・・・せいやぁぁぁぁぁ！！」

オーズはエネルギー弾を発射する。

「ぬん！」

トリロバイトヤミーはエネルギー弾を腕の甲殻で防ぐ。

「ぐぉぉぉぉ！」

だが、トリロバイトヤミーの甲殻は壊れ、エネルギー弾はトリロバイトヤミーに当たる。

更に、エネルギー弾から発生する非常に強力な重力の影響で身体のいたるところが破壊され始め、身体が縮んでいく。

「こんな事が・・・ぬがぁぁぁぁぁ！」

トリロバイトヤミーは重力に押し潰され大爆発を起こした。

「やった！」

「映司さんすごいです！」

トリロバイトヤミーを撃破したオーズに、シンクとミルヒは喜びの声を上げるのだった。

ーーーーーー

ガレット獅子団領に戻っていたレオは心を痛めていた。

「何故だ・・・何故勇者まで死ぬ！」

レオは怒りを露わにする。

彼女の星読みは不吉な未来を映していた。最初はミルヒが死ぬこと。だが、ここにきて事態は更に悪くなっていた。

その預言には、『聖剣エクセリードと神剣パラディオンの持ち主が３０日以内に死ぬ。これは回避できぬ事である』と出てきたのだ。

これは、ミルヒと同時にシンクの死を意味していた。星読みの映像には、血だらけになり倒れているシンクとミルヒが移っていた。

「させぬ・・・わしが必ず・・・。」

レオは意志を固め部屋から出て行った。

レオが部屋を出て数分後、突然星読みの映像が変化し始める。

映っているのは、巨大な異形、そして異形と対峙する６枚の羽を持ち全身に炎を纏った不死鳥が映し出されている。

そして、文にはこう記された。

『聖剣エクセリードと神剣パラディオンの持ち主救いたくば、異界より現れし欲望の王、そしてその友の力を借りよ。さすればこの地は彼らに力を与え、道は開かれん。』と・・・。

誕生と本音とカップル成立？（前書き）

第３７話です。

今回は自信がありません・・・。

誕生と本音とカップル成立？

映司とシンクがフロニャルドを訪れる一週間前・・・

地球とフロニャルドの間にある不思議な空間に漂う魂があった。

魂はただ、目的などなくただ漂っていた。

この不思議な空間にはこの魂の他に漂う物があった。

邪悪な力を宿すサソリ、カニ、エビの甲殻類系コアメダルがそれぞれ1枚ずつ。

やがて、コアメダルと魂は引かれ合う様にぶつかる。ぶつかると、どす黒いオーラを放出しながらこの空間から消えた。

フロニャルドにあるビスコッティ共和国近くの森。いつもは静かなこの森にどす黒いオーラが放たれる。先程まで不思議な空間にあった物である。

やがて、ただの球体から腕や脚が現れ、一瞬で人型へと変化する。

人型ではあるが、その姿は異形であった。

「・・・・。」

異形はただ黙り込む。そこへ一匹のうさぎの様な生物が異形の前を通り過ぎようとした。

突然異形の背後から腕が伸び、うさぎの様な生物を捕まえる。

「・・・・。」

異形は先程と同じ様に黙り込んだままであったが・・・

グシャ。

捕まえたうさぎの様な生物を一瞬で握りつぶした。

「・・・・。」

うさぎの様な生物を握りつぶした異形は亡骸を捨て、森の奥へと消えていった。

ーーーーーー

「お茶会・・・中心になってしまいましたね。」

「仕方ないですよ・・・魔物が襲って来たんですから・・・。」

フィリアンノ城の廊下を一瞬に歩くシンクとミルヒ。先程までは、バルコニーでお茶会をしていたが、魔物　もといトリロバイトヤミーの襲撃を受けてしまったのだ。

トリロバイトヤミーは映司によって倒され、現在は映司と騎士団の皆が後処理を行っている。

「・・・。」

「勇者？どうかしましたか？」

元気がないシンクを心配するミルヒ。

「姫様・・・僕は本当に勇者なんでしょうか・・・。」

「え？」

「だって、確かに戦では活躍できました。でもあの魔物　ヤミー相手では僕は無力です。姫様が危機になっているのに何も出来ない。全て映司さん任せです。こんな僕が本当に勇者なんて名乗って良いのでしょうか・・・こんなに無力な僕が。」

「勇者様・・・。」

シンクは遂に本音を漏らす。

「もう・・・映司さんが勇者で良いと思います。コンサートの時だ

って、僕は姫様を助けられなかった。僕には勇者は重すぎたんです。だかｒ「そんな事はありません！」」

ミルヒはシンクの言葉を遮る様に叫んだ。

「勇者様は誘拐された私を助けに来てくれたじゃないですか！コンサートの時だって必死に戦ってくれたじゃないですか！確かに魔物ヤミー相手では映司さんに頼ってしまうかもしれません。でも、勇者様には勇者様にしか出来ない事があるじゃないですか！私達の、いえ、私の勇者様はシンク・イズミさんしかいないんです！だから・・・そんな事言わないで下さいよ・・・。」

「姫様・・・。」

ミルヒは必死にシンクに訴える。最後の方では既に涙目になっていた。

「だから・・・だから・・・。」

遂にミルヒが泣き始める。

そこでシンクがとった行動は・・・。

「・・・ふぇ？」

「姫様・・・すいません。そうですよね・・・僕は姫様に勇者として召喚してもらったんですよね。それに僕には僕にしか出来ない事がある・・・だったら僕は僕にしか出来ない事をします。だから・・・泣かないで。」

シンクがとった行動はミルヒを抱き留める事だった。

「それじゃあ・・・これからも勇者様でいらしてくれますか？」

「はい。」

ミルヒの言葉にはっきりと答えるシンク。

「良かったです・・・。」

ミルヒは安心した声を出した。

「勇者様。」

「何ですか？」

「しばらく・・・このままでいさせて下さい。」

「・・・はい。」

ミルヒはしばらくの間、シンクに抱かれた。その顔はとても幸せそうな顔していた。尻尾も見えていないがこれまでにない振りを見せていた。

「あの、姫様。」

「何ですか？」

今度はシンクからミルヒに声をかける。

「僕を呼ぶ時はシンクで良いですよ。その方が呼びやすいでしょ？」
「そうですね・・・なら、シンクも私をミルヒと呼んで下さい。」
「分かりました。ミルヒ。」
「はい♪」
先程までとは打って変わりかなり良い空気になるのだった。

ちなみにこの光景を数人のメイド達が目撃したと言う。何でも紅茶が砂糖水に変わったらしい。この後、シンクとミルヒは明日の朝一瞬に散歩に行く事になったとか。

ーーーーーーー

「はぁ～良い湯だったな～。」
トリロバイトヤミー襲撃の後処理を終え、風月庵に戻っていた映司。風呂からあがり今自室に戻ってきた。
「それにしても・・・シンク君と姫様抱き合ってたな・・・。」
実はあの場に映司も居合わせており、見事にシンクとミルヒが抱き

合っているのを目撃したのだ。

「もしかして、シンク君と姫様って付き合ってるのかな？」

映司は思考をめぐらせる。

「まぁ、明日聞いてみよう。今日はもう寝よう。」

映司は電気を消し、布団に潜り込んだ。

映司はそのまま眠りについたのだった。

散歩とグリード出現と水棲の力（前書き）

第３８話です。

ネット版仮面ライダーオーズがとても面白かったです。早く映画見ないと・・・

散歩とグリード出現と水棲の力

まだ、人々が眠りについている真夜中。と言っても既に太陽が昇り始め、辺りが照らされ始めている。

その路地裏に謎のグリードはいた。

「ふ・・・散歩か。勇者も姫も大分暇らしいな・・・。」

謎のグリードは右手に2枚のセルメダルを持っていた。

「だが・・・奴らに会ってみるのも面白いな・・・。」

そう言うと、謎のグリードはセルメダルを1枚投げ、もう1枚をコイントスする。セルメダルはぶつかり、増殖しする。そしてヤミーが生まれる。

「分かっているな。お前はオーズを足止めしておけ。」

「・・・承知。」

そう言うと、ヤミーは路地裏の影に姿を消す。

「さぁ・・・散歩とやらが楽しくなりそうだな。」

謎のグリードも路地裏の影に消えたのだった。

――――――

「・・・姫様まだかな・・・。」

時間は経ち、人々が活動し始める時間帯になっていた。たが、それでもこの時間帯は速い方である。

城門前にてシンクはミルヒを待っていた。前日に約束した散歩に出かける為である。

「すいません！遅くなりました～。」

ミルヒが城門前に来た。服装は外出用の服である。

「大丈夫ですよ姫様。僕も今来たところですから。」

「なら良かったです～。あとシンク。」

「何ですか姫様？」

「私の事はミルヒで良いですよ。」

「そうでしたね。じゃあ行こうかミルヒ。」

「はい♪」

シンクとミルヒは互いのセルクに乗り、散歩へと出かけた。行き先はミルヒが知る秘密の場所である。

そこで、ある者の遭遇する事も知らずに・・・。

ーーーーーーー

場所は変わって風月庵。

時間帯は速い為か、未だに風月庵の住人（犬や狐込み）は寝ている。無論火野映司も例外ではない。

映司もまだ夢の中にいた。

「・・・ん～明日のパンツは蝶柄と魚の漢字柄どっちにしようかな～・・・後藤さんはどっちが良いですか～・・・。」

夢の中でもパンツな映司。明日のパンツを後藤さんに選択させていると・・・。

ウホ×3

「・・・うるさいな・・・。」

ウホ×3

「・・・まだ寝かせてよ・・・。」

ウホ×3

「パンツ決まってないよ・・・。」

ウホ×3

「・・・さっきから何だよ～。」

ゴリラカンドロイドの鳴き声？で目覚める映司。

「はぁ・・・眠いな・・・何でゴリラ缶が・・・ってゴリラ缶！？」

ゴリラカンドロイドの反応に気づき慌てる映司。

良く見れば、外にはヤミー監視用に放っておいたタカカンドロイドが空中で待機していた。

「ヤミーが出たのか！？急がないと！」

映司は寝間着として使用していた浴衣を脱ぎ捨て、速攻で普段着に着替える。

縁側から外に出て、ライドベンダーの元へ。セルメダルを投入し、自販機モードからバイクモードへと変形させる。

映司はライドベンダーにまたがり、ヘルメットをかぶる。

「案内よろしく！」

タカカンドロイドに先導させ、ライドベンダーを発進させる。
タカカンドロイドを追い、目指すはヤミーである。

ーーーーーー

一方、散歩に来ていたシンクとミルヒはミルヒの秘密の場所であるお花畑に来ていた。シンクが考案したフリスビー的な遊びを堪能し、現在は朝食をとっていた。

「さて・・・朝食終わったら何しますか？」

「そうですね・・・シンクは何かやりたい事ありますか？」

「ミルヒがやりたい事なら何でもいいよ。」

「そうですか！ならさっきのがまたしたいです！」

「分かった。じゃあまたしようか。」

「はい♪」

端から見たらもはやカップルにしか見えないこの２人。
ミルヒに限っては尻尾の振りから、幸せ感全開である。

「シンク、あ～ん。」

「あ～ん、モグモグ・・・美味しい！　ミルヒ、あ～ん。」

「あ～ん、モグモグ・・・美味しいです！」

本当にカップルにしか見えない2人であった。

・

・

・

「「ごちそうさまでした。」」

朝食を食べ終えたシンクとミルヒ。シートを畳んで朝食を入れてきたバスケットと一緒に木の下に置く。

「じゃあ、またやりましょうか。」

「はい♪」

シンクはパラディオンをディスク状に変化させた。

「姫様go！」

シンクはディスクを投げ、ミルヒがそれを追う。

「えい！」

ミルヒが見事にディスクをキャッチする。

「やりました！」

「ミルヒすごいね！」

「えへへへ♪」

シンクの元に戻ったミルヒは、シンクに撫でてもらい更にご機嫌になった。

「仲が良さそうで何よりだな・・・。」

「「！？」」

突然声が聞こえ、シンクとミルヒは声がした方を向く。

「な、何ですか・・・あれ？」

「っ！」

シンクはディスク状になっていたパラディオンを棒状にし、臨戦態勢をとる。

「良い反応だな、ビスコッティの勇者よ。」

そこには・・・異形が立っていた。

ーーーーーー

「こいつが・・・今回のヤミーか。何だかダンゴムシみたいなヤミーだな。」

映司もヤミーに遭遇していた。

「如何にも、我はダンゴムシヤミー。オーズ、貴様を通す訳には行かぬ。」

若干猫背な姿勢であるダンゴムシヤミーである。

「この先に何があるか知らないけど・・・ヤミーはほっとけない！」

映司はオーズドライバーを腰に装備し、3枚のコアメダルにセットする。

そしてオースキャナーで3枚のコアメダルをスキャンする

「変身！」

《タカ！クジャク！コンドル！タ～～ジャ～～ドル～～～～～！！》

映司は仮面ライダーオーズ　ダジャドルコンボになる。

オーズはライドベンダーからメダジャリバーを取り出す。これまでの戦いで、甲殻類系ヤミーには肉弾戦は効果が薄いと学んだ為、メダジャリバーによる斬撃が有効だと考えたのだ。

「でや！」

先手必勝のごとくオーズはメダジャリバーで斬りかかる。

「ぐぬぅ！」

オーズの考えた通り、斬撃は甲殻類系ヤミーには有効らしく、ダンゴムシヤミーはダメージを負う。

「なめるなよ！オーズ！」

「うお！」

ダンゴムシヤミーは手に装備された甲殻をグローブの様に使いオーズにパンチ攻撃を仕掛ける。

オーズはそれをタジャスピナーでガードする。

「これで！」

「っ！」

ダンゴムシヤミーのラッシュが続く中、オーズはタジャスピナーによるガードを止め、横にずれる。ずれた事によりダンゴムシヤミーのパンチは空を切る。

「せいや！」

「ぬがぁ！」

横にずれたオーズは後ろ向きに回し蹴りを放つ。コンドルレッグに

装備されたストライカーネイルとは違い、後ろ向きに装備されたラプタードエッジがダンゴムシヤミーを斬り裂く。

「やるなオーズ・・・だが！」

ダンゴムシヤミーは体育座りの態勢をとり、自身のからだ球状にする。

そのままオーズに向かって転がり始める。

「うあ！」

オーズはかろうじて避けるが、ダンゴムシヤミーはそのまま森へ行き木々を薙ぎ倒しながら再び戻ってくる。

「死ね！」

「がぁぁぁ！」

先程よりも明らかに加速したダンゴムシヤミーの突進を避けきれず、オーズは弾き飛ばされる。

「このヤミー・・・っ！」

再び向かってくるダンゴムシヤミーを避けようとするが・・・

「うわぁぁぁ！」

また加速した突進を避ける事ができず、弾き飛ばされる。

「くっ、何か手は・・・。」

オーズが倒す手段を考えるが、再びダンゴムシヤミーが迫ってくる。

「こうなったら！」

オーズは意を決し、あろう事かダンゴムシヤミーの突進をタジャスピナーでガードする。

「くぅぅぅ！」

タジャスピナーからは火花が散り、脚が地面にめり込み始める。

「無駄だ！死ねオーズ！」

「このぉぉぉ！上がれぇぇぇぇぇ！」

オーズはタジャスピナーを上へと振り上げた。

すると・・・。

「な、何だと！」

ダンゴムシヤミーはタジャスピナーが上へと振り上げたが為に空に舞い上がった。

「今だ！」

オーズは力を込めて叫ぶ。すると、オーズの周りから7つの光が現れる。タジャスピナーのスペリオルシールドを開け、光はタジャス

ピナーに収まる。

スペリオルシールドを閉じ、オースキャナーでタジャスピナーをスキャンする。

《シャチ！ウナギ！タコ！シャチ！ウナギ！タコ！・・・ギガスキャン！》

「はぁぁぁぁぁ・・・。」

タジャスピナーにエネルギー弾が精製される。やがてエネルギー弾は水流を発生させる。

オーズは落下してくるダンゴムシヤミーに狙いを定める。

「やらせん！」

ダンゴムシヤミーは球状から通常時に戻る。そして、両手で光弾を発生させる。

「せいやぁぁぁぁぁ！」

「ふん！」

ほぼ同時にエネルギー弾と光弾を発射するオーズとダンゴムシヤミー。

エネルギー弾と光弾はぶつかり合うが・・・

「行けぇぇぇぇぇ！」

エネルギー弾は光弾を圧殺し、ダンゴムシヤミーに向かって行った。

「ぬがぁぁぁぁぁ！」

エネルギー弾はダンゴムシヤミーに辺り、発生した水流がノコギリの様にダンゴムシヤミーの甲殻を削って行く。

「オーズに・・・だが、我が主の目標は達した・・・我の目的は・・・うがぁぁぁぁぁ！」

断末魔が空に響き、ダンゴムシヤミーは爆散した。

「はぁ・・・はぁ・・・やった。」

ダンゴムシヤミーを倒したオーズは息が上がっていた。

そこに再びタカカンドロイドが現れる。

「ん？この先に何かあるのか？」

オーズ一度ライドベンダーに戻り、タカカンドロイドが向かった方向へと向かった。

ーーーーーー

お花畑では緊迫した状況だった。

「・・・一体何者ですか？あなたは。」

シンクはパラディオンを構え、臨戦態勢の状態である。

「さぁ・・・名は今は名乗れないが・・・今までメダルの怪人　ヤミーを作っていた張本人と言えば分かるかな？」

「メダルの怪人を！？じゃあ、あのカブトガニやシャコの怪人は・・・。」

「そう・・・我が作った者だ。」

「っ！」

謎のグリードの言葉を聞き、目を鋭くさせるシンク。

「何故・・・何故姫様を狙う！」

「愚問だな・・・我に必要だからだ。」

シンクの質問に軽く答える。

「姫様、いや・・・ミルヒは渡さない！」

「意気込みは良し。だが・・・。」

謎のグリードがシンクとミルヒに接近しようとした時。

どこからか爆発音がした。

「もう倒されたか・・・時期にオーズが来るか・・・。」

そう言うと、謎のグリードは再びシンクを見る。

「せいぜい小娘が死なない様に守っているんだな・・・ちっぽけな勇者よ。」

そう言い残し、謎のグリードはどこかへと消えた。

「何だったんだ・・・一体・・・だけど・・・。」

シンクはただ呆然とした。だが、今まで現れたメダルの怪人の生みの親が分かったのはシンクにとっては大きな収穫だった。

その後、オーズに変身していた映司がシンクとミルヒの元に駆けつけるのは数分後の事だった。

花畑と天然とテンパる2人（前書き）

第３９話です。

最近、スーパータトバみたいにプトティラにもスーパープトティラみたいなのがあるならどんな感じになるかな？と思います。色が反転して、複眼が紫色になるんでしょうか・・・

花畑と天然とテンパる2人

「一体この先には・・・。」

未だにオーズに変身した状態の映司はダンゴムシヤミーを撃破した後、タカカンドロイドが示した場所へと向かってライドベンダーを走らせていた。

「・・・森から抜けるな・・・。」

目の前の景色は無数の木々が生い茂っており日の光はある程度は遮断されているが、少しずつ木々が少なくなり日の光が差し込み始める。

やがてオーズは森を抜け出した。

「これは・・・花畑？」

森の先にあったのは、沢山の花々が咲き誇っている花畑だった。

「凄いな・・・こんな花畑見たことないよ・・・。」

オーズはライドベンダーを降り、変身を解除して歩き始める。

その花々を見渡すしていると・・・

「ん？あれは・・・シンク君と姫様のセルク？」

映司が入って来た入り口とは違う場所にシンクとミルヒのセルクがいるのに気がついた。

「ここにシンク君と姫様が？」

映司は花畑の奥へと歩み始めた。

しばらく進んで行くと・・・

「あ、シンク君と姫様だ。」

映司は花畑にポツリと生えた木の下にいるシンクとミルヒを発見するが・・・

「何だろ・・・ちょっと様子が変だ。」

映司が言うのも無理はない。シンクはパラディオンを取り出したままであり、眼はどこかを睨んでいた。

ミルヒはと言うと、シンクの服を後ろから握っていた。

「とりあえず行ってみよう。お～い！シンク君～！姫様～！」

「「映司さん！？」」

映司の声が聞こえたのにビックリしたのか、シンクとミルヒは驚いた様に映司の方を向いた。

「映司さんどうしたんですか？どうしてここが？」

ミルヒが尋ねるのも無理もない。この花畑はミルヒにとって秘密の場所であり、現在はシンクや極少数の者しか知らないのである。

「タカカンドロイドがここに案内してくれたんだ。それよりも何かあったの？」

「映司さん・・・さっきもしかしてヤミーと戦ってましたか？」

「え！？何で知ってるの！？」

シンクの言葉に、今度は映司が驚く。

「だって爆発音が聞こえましたし、それに・・・。」

ミルヒは何故か口を紡ぐ。

「・・・確かに、さっきまで俺はヤミーと戦ってたよ。でも姫様とシンク君の表情からしてそっちでも何かあったよね？」

映司の言葉にシンクは首を縦に振る。

「何があったの？」

「実は・・・ヤミーの生みの親、確かグリードでしたっけ・・・それと遭遇しました。」

「グリードに！？」

グリードと言う言葉に反応する映司。

「はい・・・でも爆発音がしたら、『オーズか・・・』みたいな事を言ってどこかに行っちゃいました。」

「そっか・・・。」

ようやくグリードの手がかりが掴めそうだった事もあり少し落ち込む映司。

「でも・・・一つ分かった事があります。」

「分かった事？」

「そのグリードは・・・ミルヒを狙ってます。狙う理由までは分かりませんでしたけど・・・」

「そっか・・・。」

シンクの言葉を聞き、腕組みをする映司。

（カブトガニヤミーも姫様を狙っていた・・・恐らくはあのトリロバイトヤミーも・・・でも何故？）

映司はできる限り考えてみたが、なかなか思いつかなかった。

「・・・あれ？そういえば・・・。」

「どうかしたんですか映司さん？」

映司は何かに気がついた。ミルヒはそれを疑問に思った。

「いや、大した事じゃあないんだけど・・・シンク君、いつから姫様を名前で呼ぶ様になったの？」

この映司の発言にシンクは、まるでプトティラコンボのブラスティングフリーザを受けた様に凍りつく。

ちなみにミルヒは若干顔が赤い。

「もしかしてさ・・・２人は付き合ってるの？昨日の夜も抱き合ってたし。」

この発見で凍てついていたシンクが元に戻り真っ赤になる。ミルヒは顔全体が赤くなる。

「あれ？２人共大丈夫？」

「「・・・た・・・すか？」」

「え？」

良く聞こえなかった為、耳を近づける映司。

「「見ていたんですか？」」

「うん。あれは嫌でも目に着くよ。」

きっぱり言う映司。

「べ、別に付き合ってないよね？ミ、ミル・・・姫様！」

「ひゃ、ひゃい！そうですよね！シン、シン・・・勇者様！」

完全に同様している2人。

「2人共、とりあえず落ち着いて。ねぇ？」

「「は、はい・・・。」」

映司の言葉を聞き冷静になるシンクとミルヒ。ただし、顔はまだ若干赤い。

「とりあえず・・・姫様時間は大丈夫なんですか？」

「え？、って・・・あ！」

映司に言われ職務がある事を思い出したミルヒ。

「いけない！そろそろ戻らないと！」

「じゃあみんなで帰りましょう。」

映司はライドベンダー、シンクとミルヒはそれぞれのセルクに向かう。

そして3人はライドベンダーとセルクに乗り、フィリアンノ城に戻って行った。

（それにしても・・・甲殻類のヤミーを生み出しているグリードって一体・・・それに姫様を狙っている・・・警戒しないと。それと・・・何で甲殻類のヤミーがオーズを、いやタジャドルコンボに異様に敵視するのか・・・気になるな・・・。）

映司は密かに思うのだった。

だがこの後、ミルヒにとってはまた衝撃的な出来事が起こるのだった。

説得と怪力と戦への序章（前書き）

第４０話です。

現在、この物語においてオーズ以外の作品のライダーをゲストとして出すか、オーズのオールコンボ集結を出すかで迷ってます。良かったら意見をお願いします。

説得と怪力と戦への序章

「じゃあ、２人は単に仲良しなだけと？」

「「はい！そうです！」」

フィリアンノ城に戻る最中、映司はシンクとミルヒの関係を暴こうと質問をしていた。

「いやでも・・・廊下で抱き合うのはちょっと・・・。」

「い、いえ！あれは・・・。」

「あれは単に姫様がよろけたので支えてあげたんです！」

「そ、そうです！」

何故か必死にごまかそとする２人。

「そうかな～。やけに姫様の尻尾がご機嫌に見えたんだけど・・・。」

「「それは気のせいです！」」

「そんなハモらなくても・・・。」

「／／／」

声がハモっている事を指摘され顔が赤くなる2人。

そうこうしている内にフィリアンノ城が見えてくる。

「・・・あ！そうだ！」

突然シンクが声を上げた。

「シンク？どうしたんですか？」

「今日まだパンツ天日干ししてない！」

パンツの天日干しをまだしていないらしい。

ちなみにここ最近、パンツの天日干しは騎士団（男性陣のみ）でちょっとしたブームである。火付け人はシンクとロランである。

「シンク君甘いね。俺はカンドロイドにお願いしておいたよ。」

ちゃっかりしている映司。ちなみにシンクとロランに天日干しを教えたのは、紛れもなく映司である。

「映司さん・・・やりますね！流石です！」

「あ、あの～・・・。」

話しについて行けてないミルヒが話しかけた。

「さっきから天日干しと言ってるんですが・・・何の話しですか？意図がイマイチ分からないんですが・・・。」

「あぁ、明日のパンツの話しですよ。」

「そうだよミルヒ。パンツは天日干しすると良いんだよ。すごく履き心地が良くなるんだよ。」

ちゃっかりとパンツの天日干しの素晴らしさを語るシンク。

普通女性なら引くところだが、ミルヒは・・・。

「そうなんですか！じゃあ今度私も試してみますね！これは良い事を聞きました！」

「「・・・え？」」

ミルヒの爆弾発言に耳を疑う映司とシンク。

「ちょっ！姫様は流石にまずいですよ！」

「ミルヒは止めた方が良いよ！これは男性だからできる事なんだ！」

必死に説得を始める映司とシンク。

万が一ミルヒがそんな事すれば間違いなく殺される。

例えば、エクレとかエクレとかエクレとかエクレとかｅｔｃ・・・。

ついでに映司は知り合いの某怪力娘の怒りの顔が思い浮かんだとか・・・。

フィリアンノ城に着くまで映司とシンクはミルヒを説得し続け、フィリアンノ城到着ギリギリでミルヒが納得した為事なきを得たのだった。

ちなみにミルヒは若干不機嫌になったとか。

ーーーーーー

「・・・はぁ・・・。」

「あら～どうしたの比奈ちゃん？どこか痛いの？」

「いえ・・・何でもないです。ハァハァ、エイジクンヘンナコトオシエテナイヨネ～。」

「な、何だか今日の比奈ちゃん怖いわ・・・。」

その日クスクシエでは、真っ二つになった皿が大量発生したとか。

ーーーーーー

「ヘックシ！」

「何だ映司風邪か？」

「いや・・・誰か俺の噂してるのかな・・・。」

ミルヒを送り届けた後、映司は特にやる事がないので騎士団親衛隊の訓練を見にきていた。

騎士達の宿舎からは所々窓からパンツが干されていた。

「勇者と兄上が広めたんだ。こちらとしてはいい迷惑だ。」

「・・・何だかすいません。」

罪悪感に襲われた映司はとりあえずエクレに謝った。

「ねぇエクレちゃん。」

「何だ映司？」

「女性陣は真似してないよね？」

「当たり前だ！」

当然エクレに怒られた映司。

「そういえば映司、風月庵での生活はどうだ？」

「のんびりしてるよ。実際満喫しすぎて帰る事とか忘れてたし。」

「のんきだな・・・。」
もはや呆れる事しかできないエクレだった。
「隊長！組稽古終わりました！」
騎士の１人がエクレに報告に来る。
「よし。しばらく休憩しておいてくれ。」
「了解です！」
エクレに敬礼し元いた場所に戻って行った。しばらくして騎士達は雑談を始めた。
「エクレちゃんここ座る？」
「ありがとう。」
映司に薦められた席に座るエクレ。
「エクレ～！」
「ん？あれはリコ？」
突然リコッタが走りながらこちらにやってきた。
「どうしたリコ？そんなに急いで。」

「リコちゃんこんにちは。」

「こんにちは映司様！それよりも大変であります！」

「何かあったの？」

「実は・・・ガレットが宝剣を賭けて宣戦布告をしてきたであります！」

「な、何だと！」

リコッタの言葉に驚きを隠せないエクレ。

「今から緊急会議を始める為、エクレも来て欲しいであります！」

「分かった。すぐ行く。」

そう言うと、エクレとリコッタは一緒に会議に参加する為、フィリアンノ城の会議会場へと向かって行った。

映司はその場に1人取り残される。

「まさか・・・戦が始まるのか？」

映司は1人呟いた。

緊急会議と参戦と動き出す陰謀（前書き）

第４１話です。

やっと映画を見ました！とても面白かったです！

弦太郎・・・切ないよ！

アクアとスーパータトバが凄くかっこよかったです！

緊急会議と参戦と動き出す陰謀

ビスコッティ共和国　フィリアンノ城は慌ただしくなっていた。

それもそのはず、先程ガレット獅子団側から互いの国の宝剣を賭けた戦を申し込まれたのだ。

ビスコッティ国民にとっては朗報かもしれないが、ビスコッティ共和国のトップや首脳陣にとっては寝耳に水であった。

現在フィリアンノ城では代表領主であるミルヒ、騎士団団長ロラン、親衛隊隊長エクレ、学術研究院主席リコ、他首脳陣が集まり緊急会議が開かれていた。

「宝剣を賭けるなんて・・・ガレットは一体何を考えているんだ？」

エクレはそもそも何故宝剣を賭けるのか検討がつかない。

「自分は少々行き過ぎていると思うでありますよ。」

リコはガレットの要求は行き過ぎていると発言する。

「確かにのぉ・・・一体レオ閣下が何をお考えていられるか検討がつかんわい。」

老人の1人がリコの考えに賛同する。

「皆さん、まず最優秀すべきはこの宣戦布告を受けるかどうかでは？」

「「「・・・。」」」

ロランの言葉にその場が静まり返る。

「私は・・・この宣戦布告を受けようと思います。」

「「「！」」」

ミルヒの言葉を聞き他の者達が驚いた表情になる。

「これまで戦で苦戦していたのは、ひとえに私の力不足です。ビスコッティは弱い国ではなく、強い国になる為に準備を重ねてきました。だからガレットからの宣戦布告からも逃げずに受け止め様と思うんです。」

「「「・・・。」」」

ミルヒの言葉に静まり返る首脳陣。

「・・・私は姫様に賛成します。」

この空気を破ったのはエクレであった。

「姫様の言うとおり、我々ビスコッティは勝つ為に準備をしてきました。今こそその成果を発揮する時です！」

「私も姫様に賛成であります！」

更にはリコが賛成する。

ミルヒは周りを見る。周りにはやる気に満ちた表情の者達だけがいた。

「姫様・・・反対する者はいません。受けましょう、宣戦布告を！」

「はい！」

ロランがミルヒに皆の考えを伝え、ミルヒはそれに元気良く返事をした。

「それでは・・・ガレットからの宣戦布告を受け、戦をする事に決定しました！」

最後にミルヒが結論を述べ、正式にガレットからの宣戦布告を受け入れるのだった。

「ところで姫様。一つ良いですかな？」

「何ですか？」

老人の1人がミルヒに質問する。

「今回の戦には、当然勇者様も参加なさるのですよね？」

「はい、そうですが・・・。」

「ならば・・・今回の戦に火野映司殿は参加なさるのですか？」

老人質問、それは映司がこの戦に参加するかどうかであった。

「映司さんですか・・・。」

「左様・・・映司殿のあの不思議な力があれば今回の戦は優位に進められるはずですが・・・。更に、映司殿はあのレオ閣下を倒しただけでなく、模擬戦とはいえダルキアン卿をも倒しておられる・・・今回の戦には必ず参加させるべきと思うのですが。」

老人の考えは的を突いていた。

確かに映司のオーズとしての力はかなりの物である。

「どうですかな、姫様?」

老人はミルヒを見る。それにつられて他の者もミルヒを見た。

「・・・確かに、映司さんの力は我々ビスコッティにとって強大な物になります。しかし良く考えて下さい。映司さんは元々ビスコッティに召喚される筈のない人でした。その人を戦に参加させて良いのか・・・私には分かりません。彼に、映司さんに直接聞かなければ・・・。」

その言葉に再び場が静まり返る。

コンコン。

突然ドアを叩く音がした。

「誰だ？今は会議中だぞ。」

エクレが追い払おうとした。が・・・

「失礼します。」

その人物はエクレの言葉を無視し、会議中にも関わらす部屋に入って来た。

「「「！」」」

そこにいた者達は皆唖然とした。

そこにいたのは・・・

「え、映司？」

何を隠そう火野映司だったからである。

「映司さん・・・。」

「今の話し、全部聞かせてもらいました。姫様、俺の事を心配してくれているのは嬉しいです。でも・・・俺も今はこの国にいます。エクレちゃんやリコちゃん、シンク君や姫様、ダルキアン卿やユキカゼちゃん達だけ戦わせて俺だけ見学は出来ないよ。」

映司のこの言葉にミルヒはただ耳を傾ける。

「それに・・・俺もあのレオ閣下の考えが知りたいんです。どうして宝剣を賭ける必要があるのか・・・そして、俺はできるならレオ

閣下の手を掴みたい。レオ閣下は心に何かをひたすらに隠しているはずです。俺はその思いが知りたいんです。レオ閣下の心の闇を・・・。」

映司の言葉を最後まで聞いたミルヒは・・・

「・・・分かりました。映司さん、よろしくお願いします。」

「はい！」

ここに、この戦において火野映司が参戦する事が決定した。

ーーーーーーー

「そうか、ビスコッティとガレットは互いに宝剣を賭けて争うのか。」

「はい。我が主。」

暗い森の中で謎のグリードとヤミーが会話をしている。

「戦か・・・そちらの方がこちらとしては都合が良い。しばし戦いの行方を見届けるとしよう。」

謎のグリードは羽織っていたローブを脱ぎ捨てる。

そこには、顔にはサソリ、身体にはカニやエビ、更には顔にある筈のサソリのパーツがいくつかある。

「時期にこの世界の魔物とやらも目覚める・・・その後で仕掛けるか。」

「我はどの様にすれば？」

「しばし私と行動せよ。」

「御意。」

そうして謎のグリードは木々により遮られた空を見る。

「・・・もうすぐで我が悲願が叶う・・・悪意の欲望がこの世界の全てを覆い尽くすのだ！」

謎のグリードは空に向かって叫んだ。

その背後には邪悪な力が辺りに広がり、次々と木々を枯れさせて行くのだった。

前夜と決意と復活の兆候（前書き）

第４２話です。

フォーゼのマグネットステイツの画像を見ました。

何だかガンキャノンとかガンダム６号機に見えました。

前夜と決意と復活の兆候

ミルヒを始めとした首脳陣により、正式にガレットからの宣戦布告を受ける事になったビスコッティ。

その報告はガレットにも届き、両国は今までにない戦ムードになった。

その日の午後にはミルヒがビスコッティ国民に向けて声明が発表され、ビスコッティ国民は戦に向けて更にテンションが上がるのだった・・・

時は過ぎて夜となり戦に参加する者達の中には、明日の戦に備えて既に就寝していている者が多くいた。

フィリアンノ城　シンクの部屋。

シンクも明日の戦に備えて就寝しようとしていたが、明日の戦の作戦を確認していた。

「えっと、僕はエクレと『リコ』と一緒の隊でグラナ砦に攻め込むんだよね。」

明日の作戦をおさらいする。

「そういえば、映司さんはどうするんだろ・・・話しだと戦には参

加するって聞いたし・・・。」

しばらく腕組みをして考える。

「・・・まぁ、明日には分かるだろうし、今日はもう寝よう。」

考えるのをやめ、シンクは電気を消し布団に潜り込んだ。

それからしばらくしてシンクの意識はフェードアウトした。

場所は変わり、風月庵は映司の部屋。

未だに映司の部屋には明かりがついていた。ちなみに、ダルキアンとユキカゼはもう寝てしまった。

「さて、明日が戦だけど・・・何か嫌な予感がするんだよな～。」

映司は今回の戦で何かが起こるという予感がしていた。

「レオ閣下の考えも気になるけど・・・何だろう、この違和感は・・・。」

映司はこの違和感について考えてみるが・・・

「・・・気のせいなのかな・・・。」

結局何も思い浮かばず首を傾げた。

その後映司はポケットから割れたタカメダルを取り出し、タカメダルを座布団の上に置く。

「・・・。」

しばらくタカメダルを見つめた後、映司は数枚のセルメダルをタカメダルの近くに置く。

「はぁ～流石に復活はしないよな～。」

当然だが何も起こらない。

「一体どうやったらお前は復活するんだよ・・・。」

映司は割れたタカメダルに話しかけるが・・・

「・・・まぁ、返事はないよね。」

当然返事などかえってはこない。

「そろそろ寝て明日に備えないとな・・・。」

映司は電気を消し、布団に潜り込む。

「お休み、アンク・・・。」

割れたタカメダル、もといアンクに声をかけ映司は眠りについたのだった・・・。

時刻は深夜。

誰もが深い眠りにつき夢を見ている頃、ある場所では異変が起こっていた。

風月庵は映司の部屋。

この部屋の主である火野映司も例外ではなく、今は眠りについていた。

「よ～し、今日のパンツはおでん柄だぁ～・・・。」

映司が寝言を言っている。実際映司に異変が起こって訳ではない。

異変が起こっているのは、座布団に置いてあるアンク、否割れたタカメダルだった。

赤い光を不気味に放ちながら割れていたタカメダルは動き出す。

やがて割れていたタカメダルは一つにくっつく。

一つにくっつくとタカメダルは少し宙に浮く。やがて周りに置いて

あった数枚のセルメダルがタカメダルに引き寄せられる。セルメダルがタカメダルに接触し不気味に光る。光が消えるとそこには赤い右腕があった。

その右腕は普通の腕ではなく、異形であり所々に鳥を模した装飾が施されている。

「・・・・。」

赤い腕は静かに映司に近寄る。

「・・・映司。」

赤い腕は映司の名を呼ぶ。

「明日の戦・・・俺のメダルのコンボを使ってるんだ・・・負けるなよ。」

そう言うと、赤い腕は座布団の所まで戻る。

「映司、お前と再会するのはまだ少し先になりそうだ。それまで・・・死ぬなよ。」

やがて、赤い腕はその姿を保てなくなり元のタカメダルに戻り座布団に落ちた。

そのタカメダルは先程と同じ様に真っ二つに割れていたのだった。

開戦と拠点と潜入グラナ砦（前書き）

第４３話です。

結構省きました。その分最終決戦を長くするつもりです。

開戦と拠点と潜入グラナ砦

開戦当日。

主戦場であるチャカルコ湖沼地帯で戦が開始され、シンクやエクレ達が戦闘を開始した頃、風月庵では・・・

「さて・・・そろそろ出発かな。」

映司は単身グラナ砦に向かう為準備をしていた。

実際映司の参戦は一部の者以外は極秘になっている。

知っているのはビスコッティ側の為ガレット側は当然知らない。

その為映司は途中参戦と言う形で参加するのだ。

「明日のパンツ良し、アンク良し、メダル良し、ベルト良し、準備完了。」

映司は既にバイクモードとなったライドベンダーにオーズドライバーを装備しながら向かう。オーズドライバーには事前にせっとしたタカ、クジャク、コンドルのメダルがあり直ぐに変身できる様にしてある。

映司がライドベンダーにまたがると数人の役人が映司に近づく。

「映司さん、お気をつけて。」

「ありがとうございます。じゃあ・・・行ってきます！」

映司はヘルメットをかぶりライドベンダーを発進させる。

シンクやエクレと合流する為、合流地点であるグラナ砦へと向かった。

――――――

映司が合流地点であるグラナ砦に向かっている頃・・・

戦場では壮絶な戦闘が繰り広げられていた。

主戦場のチャカルコ湖沼ではロランとバナードが。

スエーヅ砦ではガウルやジェノワーズにゴドウィンが。

それぞれの戦場でそれぞれの戦いが行われていた。

スエーヅ砦でリコやベルのポロリがあったりしたがリコはミルヒの元に向かったのだった。

そして、グラナ砦では・・・

今まさにビスコッティ2番隊がグラナ砦に突入しようとしていたところだった。

「は～い、こちらグラナ砦前！ビスコッティ2番隊が砦のゲートキーパーと交戦にはいりま～す！」

解説役のビスコッティ国営放送のファシーの声が響いていた。

「本日の守る部隊にはレオ閣下の戦略により特選装備部隊が配備されていま～す！」

この解説を聞いたビスコッティ側は、

「特選装備部隊？」

「姫様、皆の中央に。」

「あ、はい。」

エクレの言葉を聞きミルヒは中央に移動する。

「第一射、来るぞ！大砲陣形、散開全身！姫様を守れ！」

「「「はっ！」」」

エクレの言葉を聞き、他の騎手達は言われたとおりの陣形を作り上げる。

その間にも特選装備部隊は迎撃の準備を済ませる。

「うぇぇ～！？銃！？大砲！？」

シンクもこれにはビックリ。

「勇者、この間教えた紋章術・・・間違いなくだせるな？」

「こ、この間ってどれ！？槍のやつ？盾のやつ？」

「盾のやつだ！お前が防げ私が斬り込む！」

「あいよ、了解！」

そう言うとシンクは左腕にディフェンダーを出現させる。

その直後、ガレット側からの砲撃が始まった。

次々と騎手達が撃破されていく中、シンクはディフェンダーでミルヒを守りながら前進する。

「砲術師、勇者を撃て！」

ゲートキーパーの砲術師は大砲の狙いをシンクに定める。

「発射！」

砲術師はシンクに向けて迫撃砲弾を撃った。

爆撃砲弾は真っ直ぐにシンクへと向かう。

「でぇぇぇ～りゃ！」

シンクはパラディオンを使い迫撃砲弾を弾き飛ばす。

「「「へぇ！？」」」

「「「はぁ！？」」」

これには流石にエクレやファシー、敵砲術師もビックリ。

「な、何～！勇者シンク迫撃砲弾は弾き飛ばした～！」

野球ボールの様に弾き飛ばされた迫撃砲弾は遠くへ飛ばされ、何もない空中で爆発した。

「どうよエクレ！」

「派手好きめ・・・」

シンクにエクレが呆れていると、

「隙あり！」

左手の崖の上から新たな砲術師が現れる。

「全員構え！親衛隊隊長を抑えろ！」

砲術師達がエクレに狙い定める。

「っ！エクレ危ない！」

「勇者を行かせるな！」

シンクがエクレを防御しようとするが、ゲートキーパーからの砲撃を受けている為防御に行くことができない。

「くそ！」

「エクレ！」

「お～っと！親衛隊隊長エクレールピンチ！万事休すか！？」

ファシーが声を上げたその時だった。

《タカ！クジャク！コンドル！タ～～ジャ～～ドル～～～！！》

「・・・へぇ？」

突然周囲に変な歌が流れた。

「「「うぎゃぁぁぁぁぁ！」」」

それとほぼ同時に、エクレを狙っていた砲術師達がいつの間にか全てけものだまに変わっていた。

「え！？え！？何！！何が起こったの！？」

ファシーが突然の事に同様する。

「今のって・・・まさか！」

シンクがその正体を悟った時。

ブォォーーーン！

爆音と共に右側の崖からライドベンダーが飛び出した。

「やっぱり！映司さんだ！」

「来てくれましたか！」

「やっとか！」

シンクとミルヒとエクレが思い思いの言葉を発する中、ライドベンダーはシンクのセルクの隣に着地する。

「お待たせしました！火野映司、今からビスコッティ2番隊に合流します！」

そこにはダジャドルコンボとなったオーズがいた。

「映司！ナイスタイミングだ！」

「無事で何よりだよエクレちゃん！早くゲートキーパーを！」

「了解した！」

オーズに言われたエクレはセルクで飛び上がった。

エクレはセルクの上に立ち、背中の鞘からダガーを抜き取る。

「旋風・・・一文字！」

エクレはセルクから飛び上がり旋風一文字を放つ。

旋風一文字はゲートキーパー達に見事にヒットし爆発を起こす。エクレは地面に見事着地し、ダガーを鞘に収めた。

その後から大量のけものだまが降ってきたのだった。

「騎手一同！残敵掃討！」

「「「おー！」」」

エクレの指示により騎手達が動き始めた。

「凄い！凄い！勇者シンクと親衛隊隊長エクレール！ゲートキーパーを瞬時撃破！砦内部に侵入を開始！」

ファシーが解説をする中。

「やったね！エクレちゃん！」

「何、映司の助太刀が合ってこそだ。感謝する。」

「まだ砦内部が残ってるし頑張ろうね！」

「あぁ！」

オーズとエクレはハイタッチを交わした。

「しかし！あの赤い仮面の戦士は何者でしょうか！ただ者ではありません！ビスコッティにこんな戦士がいたとは私もビックリです！何げに親衛隊隊長エクレールと仲が良さそうです！」

ファシーは1人興奮ぎみに解説する。

「ん？お天気変わりでしょうか？東の空から若干雲が出てまいりました。」

ファシーは東の空を見る。確かそこには黒い雲が迫ってきていた。

シンクやミルヒ、エクレや映司達ビスコッティ2番隊は砦内部へと潜入していった。

悪夢と右腕と届かぬ思い（前書き）

第４４話です。

今オールコンボでタマシーコンボを出すかどうか悩んでます。今はとりあえず出さないという感じになってます。出した方が面白くなるだろうか・・・。

悪夢と右腕と届かぬ思い

グラナ砦の屋上にある天空武闘台。

ここの屋根がある休憩所の様な所にレオはいた。

レオはここ数日、全くと言っていい程寝ていない。その為か腕組みをしうたた寝をしていた。

そしてレオはある夢を見た・・・

そこは天空武闘台だった。

しかし何時もとは違っていた。あるのは武闘台だけであり、周りには黒い雲が広がっている。

武闘台には見覚えがあるピンク色の髪の少女が甲冑姿で立っていた。

彼女は泣いていた。涙を流していた。

だが、彼女は突然血を吹き出し倒れる。武闘台に血だまりができる。彼女はそこで息を引き取った。

やがて、異様な姿の魔物が現れた。おそらくこの魔物に彼女はやられたのだろう。

魔物は天に向かって遠吠えした。

しかし魔物が遠吠えをした後、辺りは真っ白になった。
やがて真っ白な空間に赤い光が現れた。赤い光は現れたと思うと直ぐに消えた。
赤い光が消えた後、赤い光があった場所には異様な赤い右腕があった。
「・・・オーズを信じろ。」
確かに赤い右腕はそう言った。
その後、赤い右腕は消え辺りは真っ暗になった。

「・・・はっ！」
うたた寝をしていたレオは夢から覚めた。
「ハァ、ハァ・・・。」
眠りから覚めたレオは息が荒く、立ち上がっていた。
「今のは・・・。」

レオは今さっき見ていた夢を思い出した。

（今いたのは明らかにミルヒだった。それにあの赤い右腕は一体・・・。）

ミルヒが死ねのも気になったが赤い右腕も気になる。

（オーズを信じろ・・・一体どういう意味だ？）

赤い右腕が言った言葉に首を傾げるレオ。

（いや、今は考えるのは後にしよう。今は宝剣を・・・。）

レオは思考を変え、今なすべき事をするのであった。

ーーーーーーー

グラナ砦内部に侵入したビスコッティ２番隊。

エクレを先頭にし、レオがいると思われる部屋へと向かっていた。

やがてレオがいると思われる部屋へと侵入する。

だが、そこにレオはいなかった。

あるのは鏡、やがて鏡にレオの顔が映しだされる。

「よくきたな。先頭にいるのは勇者に垂れ耳だな？ここまで来れた褒美としてワシと一騎打ちじゃ。1人1人ではワシに勝ち目がないから2人まとめてかかってきて良いぞ。ワシは屋上の天空武闘台でまっておるぞ。」

そう言い残し映像は消えた。

「ハァ、ハァ・・・。」

「レオ様・・・。」

息が上がっていりレオを心配するルージュ。

「何心配ない。まず勇者からパラディオンを奪って、後々ミルヒからエクセリードを奪えば・・・。」

レオはグランヴェールを担ぎながら話す。そう、ミルヒがこんな前線に出てくる筈がない。レオは自分に言い聞かせた。

やがて昇降機が屋上にたどり着く。

そして昇降機の扉が開いた。

「なぁっ・・・。」

レオは愕然とした。何故なら・・・。

「レオ閣下、ご無礼を承知でこのミルヒ・・・レオ閣下と一騎打ちに参りました。」

そこにいたのは、騎手甲冑姿のミルヒだったからだ。

レオの中にあった微かな希望は砕け散った。

「レオ様・・・お聞かせ下さい。何故宝剣が必要なんですか？理由さえはっきりしていれば何時でもお貸しします。」

ミルヒがレオに問う。その手にはエクセリードとパラディオンが待機状態である指輪としてミルヒの右手にあった。

「・・・。」

「レオ様！　っ！」

レオが黙り込む中、追求しようとしたミルヒに突然ルージュが強襲する。

「ルージュ！今私はレオ様と！」

「ご無礼は後で謝罪します！でも今は！」

ルージュは手にした短剣でミルヒの剣を弾く。そしてルージュの目にエクセリードとパラディオンが目に入る。

（これさえ手に入れば！）

手を伸ばしエクセリードとパラディオンを奪おうとするが。

「！？」

突然ピンク色の光が発生し、ルージュを吹き飛ばす。

「ハァ、ハァ・・・。」

ミルヒの手には短剣として呼び出されたエクセリードが握られていた。

「最近のレオ閣下の態度もそうです・・・昔はあんなに仲良くして下さったのに・・・レオ様はそんなに私の事をお嫌いになったのですか！」

「・・・。」

レオの心にミルヒの言葉が深々と突き刺さる。

レオは未だに真実を伝える事が出来なかった。

一方、シンクやエクレ達は・・・。

「う～ん・・・。う～ん・・・。」

「勇者、少し落ち着いたらどうだ。」

シンクは腕組みをしながらそわそわと同じ所を行ったり来たりしていた。

エクレはそんなシンクに呆れたゆうに声をかけた。

「そう言うエクレちゃんも心配なんでしょ？尻尾に出てるよ。」

「なぁっ！／／／」

映司に指摘され、顔を赤くしながら尻尾を隠すエクレ。

ミルヒが1人で行くと言って、騎手甲冑を着て1人て天空武闘台に行ってからというもの、さっきからこんな調子である。

「映司。」

「なに？」

「どうして映司はそう平然としてるんだ？」

映司はさっきからシンクやエクレの様に目立ったことはしてない。変身は解除しているが。

「俺だって心配だよ。でもここは姫様を信じて待つしかないよ。」

「そうか・・・やはりアホ勇者とは違うな。」

「ちょっ！酷くない！？」

アホと言われて反応するシンク。

「隊長。」

「どうだった？」

「駄目ですね・・・昇降機は上からの操作しか受け付けてないみたいです。」

「そうか・・・。」

エクレは騎手からの報告を受けどうするか考えていると・・・。

「ねぇ～！エクレ～！映司さ～ん！」

「何だ勇者！」

「どうしたの！」

シンクに呼ばれたエクレと映司はシンクの元へ。

そこは室内から少し出た所にある外の通路だった。

「勇者・・・何してんるだ？」

「シンク君何してんるの？」

エクレと映司が声をかける。

「ミルｈじゃなかった。姫様が追うなって言ってたじゃん？ならこ

こから行けばいいかな～って。」

「アホか・・・。」

シンクはどうやら壁を登って天空武闘台を目指す様だ。

「行かなくても良いよ。僕だけでも行くから。」

「誰が行かないと言った！映司行くぞ！」

「お、俺も！？」

「当然だ！」

映司を半ば強引に連れ、エクレと映司も壁をよじ登り始める。

先程から雷が鳴り響いており、守護力であるフロニャ力が弱まり始めていた。

再び場所は変わり天空武闘台。

フロニャ力が弱まりつつある為、放送で戦の一時中断が発表されていた。

「・・・。」

「・・・。」

互いに黙り込むミルヒとレオ。

「・・・とりあえず、屋根がある場所へ。」

ルージュが屋根のある場所へと案内する。

レオとミルヒもそれに続こうとした時だった。

ゴゴゴゴゴゴ！

「「「！？」」」

突然地響きの様な音が響いた。

やがて地割れが発生し、天空武闘台は空中に浮き始める。

「レオ様！」

「ミルヒ！」

浮き始めた武闘台に取り残されるミルヒとレオ。

「ミルヒ様！レオ様！」

武闘台の浮遊を免れたルージュ。

やがて雲の切れ間から巨大な球体が現れた。まるでミルヒの宝剣に惹かれるように・・・球体の中で怪物の目蓋が開かれ目玉が現れた。

「く・・・やばいな。」

「エクレ～！映司さ～ん！」

「分かっている！急ぐぞ！」

エクレとシンクが壁を登るスピードを上げる。

「このままだと・・・こうなったら！」

映司はオーズドライバーを再び斜めにし、オースキャナーでメダルをスキャンする。

「変身！」

《タカ！クジャク！コンドル！タ～～ジャ～～ドル～～～！！》

「はぁ！」

映司はオーズになり壁から離れ、クジャクウイングを展開し飛翔する。

「シンク君！エクレちゃん！」

「「映司（さん）！？」」

オーズのいきなりの登場に驚く2人。

「このままだと時間がかかる！掴まって！」

「「分か（りました！）った！」」

そう言うとオーズはシンクとエクレの腰辺りを掴む。

「行くよ！」

オーズはそのまま２人を抱きかかえて天空武闘台へと飛翔した。

魔物と救出作戦と映司（オーズ）を知る者（前書き）

第４５話です。

次回辺りで魔物は終わりになります。

魔物と救出作戦と映司（オーズ）を知る者

未だに上昇を続ける武闘台。その高さはかなりの物になっていた。まるで天に吸い寄せられる様に・・・

この武闘台からレオとミルヒは浮かんでいる謎の球体を見つめていた。

やがてその球体は静かに武闘台に近づく。

「あれは・・・この辺りの土地神様？」

「いや、違う・・・昔、ダルキアンに聞いたであろう。おそらくは、あれがかつて地の底に封じられたという禍々しき魔物であろうよ。」

レオは魔物らしき球体を睨みつける。その間にも球体は刻一刻と近づいてくる。

やがて球体から凄まじい遠吠えが響き、レオとミルヒは耳を押さえる。周りの地からは火柱が上がり始める。

「きゃあ！」

「ミルヒ！」

火柱の一つが武闘台に辺り武闘台を揺らす。

球体からは手足が生えもがき始める。ミルヒはその一カ所に何か光

る物を見た。
（大きくて怖い魔物かもしれないけど・・・あの子・・・泣いてる。）
もがく魔物を見つめてミルヒはそう感じた。
未だにもがく魔物は周りにあった膜を振り払い、その正体を表す。
ミルヒは近くに落ちていたエクセリードを拾う。そのエクセリードを見た魔物は興奮気味になる。
「グルァァァァァァ！」
「「！？」」
魔物の遠吠えと共に周りからは幾つもの槍や剣の刃身がついた触手が現れる。その触手はレオとミルヒを襲い始める。
「っ！」
レオはグランヴェールを拾い上げ結界を張りミルヒを守る。
「でやぁ！」
背後から襲ってきた触手を薙ぎ払う。
「ミルヒ無事か！」
「あ、はい！　っ！」

ミルヒはレオの背後に迫る触手に気がつく。

「レオ様！危ない！」

ミルヒはエクセリードを構え防御の体制に入る。

が・・・

「駄目じゃ！ミルヒ！」

レオの叫びは届かずエクセリードは砕け、刃身はミルヒを甲冑の上から斬りつけた。

斬りつけられた場所からは血が吹き出す。

「ミル・・・。」

レオの悪夢が現実になってしまった。

横から触手がミルヒを突き飛ばす。突き飛ばされたミルヒは魔物の分身体に取り込まれた。

ミルヒを取り込んだ分身体は魔物へと向かって行った。

「ミルヒ・・・。」

レオの中に怒りがこみ上げる。

「貴様ぁぁぁぁぁぁ！」

輝力を解放し魔物の触手を次々と斬りつけて行く。

「でゃぁぁぁぁ！」

床に突き刺さった触手に乗り、魔物の頭部にグランヴェールを振り下ろす。

辺りを爆煙が覆う。

レオは後方へ下がり浮いていた小さい足場に着地する。

「ミルヒ・・・ミルヒ！まだ無事のはずじゃ・・・直ぐに助け出せばきっと・・・。」

レオが言い終わると同人に爆煙が晴れ、魔物は尻尾でレオを攻撃する。

「ぐっ！」

輝力を高め、尻尾にグランヴェールを振るう。尻尾とグランヴェールの刃身がぶつかり合い火花がおきる。

「！？」

しかし足場がそれに耐える事ができず、足場は崩れる。足場を失い落下を始める。

「うぁぁぁぁぁ！」

魔物はそれを見逃さず尻尾でレオを叩きつける。叩きつけられたレ

オはグラナ砦の天空武闘台があった場所に叩きつけられた。

「レオ様、レオ様！」

ルージュが駆け寄るがレオは力無く倒れていた。

魔物は地に降り立ちグラナ砦から遠ざかろうとしていた。

ほぼそれと同時にシンクとエクレを抱えたオーズが天空武闘台に到着した。

「よし、着いたよ！」

オーズは2人を離す。

「何だ・・・ここから立ち去ろうとしているのか？」

エクレは魔物がグラナ砦から離れて行くのを見た。

ルージュは倒れていたレオのそばにいた。

「ルージュ殿！」

突然声が聞こえ前を見た。

「親衛隊長！勇者様！」

エクレとシンク、オーズがルージュに近寄るが・・・

「えっと・・・あなたは？」

ルージュはオーズを初めて見た為、少し動揺する。

「あ、初めまして。火野映司と言います。」

オーズは変身を一旦解除し、ルージュに自己紹介する。

そして3人の目に入ったのは、

「レオ閣下！」

「まさかあの魔物に！？」

傷つき倒れたレオだった。

「はい・・・、それに・・・ミルヒ様が・・・。」

「「「！」」」

ミルヒが魔物に捕らわれた事をしる3人。

・

・・・・

しばらくしてルージュからこれまでの経緯を聞いたエクレは。

「姫様はあの魔物に取り込まれつつある。今はまだ聖剣の守護があるが・・・それも姫様の輝力次第だ。何時までもは保たん。」

「姫様の輝力が尽きたら・・・あの魔物に消化されちゃうって事？」

「・・・そうなる。」

これを聞いたシンクは、拳を握り締める。

「そんな事・・・させるかよ！」

シンクはそう言い、縁に走る。

「ちょっとまて勇者！」

「ちょっとシンク君！」

エクレと映司も後を追い縁にやってくる。

「どんどん行ってしまう・・・。」

「浮き岩が足場になる。あるならトルネイダーで滑空して行ける。」

「今守護のフロニャ力が弱まっている！落ちれば死ぬぞ！」

エクレの言葉にシンクは、

「そんなもん・・・落ちなきゃいい！トルネイダー！」

シンクは輝力を発生させトルネイダーを作り出す。

「待て！私も行く！」

「だと思った！」

「シンク君俺も行くよ！」

映司もこの作戦？に参加しようとするが、

「はい！ぜｈ「いや、映司はここに残ってくれ。」」

シンクは了承しようとしたが、エクレはこれを否定した。

「エクレちゃん！？」

映司もこれには驚く。

「映司はここに残ってレオ様を守ってくれ。もし魔物が砦を攻撃したとしても、オーズの力なら防げる筈だ。」

「でも！」

「大丈夫だ。私達だけでも行ける！勇者、出せ！」

「わ、分かった！」

シンクはそのままトルネイダーを魔物に向けて急発進させた。

「映司！レオ閣下とルージュ殿を頼んだ！」

エクレが発進間際に映司に向かって叫んだ。
トルネイダーはそのまま魔物に向かって突き進み始めた。
「シンク君・・・エクレちゃん。」
映司は魔物に向かうトルネイダーを見つめていたが、
ガシ！
「！？」
誰かにズボンの裾を掴まれた。
映司は振り返り掴まれた場所を見た。
「・・・レオ閣下！？」
それは紛れもなくレオだった。
「ハァ、ハァ・・・火野・・・。」
レオは何やら必死に映司に何かを伝えたいようだ。
「垂れ耳は今・・・火野の・・・事を・・・オーズと・・・言ったか。」
「え？」

「だとしたら・・・ワシは・・・お前を・・・信じれば・・・良いのか・・・。」

レオは必死だった。

「ワシは夢で・・・変な右腕に・・・オーズを信じろと・・・言われた・・・。」

「・・・。」

「頼む・・・ミルヒに・・・勇者と垂れ耳に・・・手を・・・伸ばしてやってくれ・・・。」

「！！」

レオの言葉に映司はハッとした。そしてかつての自分の言葉を思い出す。

“手が届くのに伸さなかったら死ぬほど後悔するから手を伸ばす”

「・・・レオ閣下。」

「ここはいい・・・お前は・・・行け！」

「・・・でも。」

「ここは私1人で大丈夫です。映司様は行って下さい！」

「ルージュさん・・・すいません！」

映司は再び砦の縁に行く。

オーズドライバーを斜めにし、オースキャナーでセットされたメダルをスキャンする。

「・・・変身！」

《タカ！クジャク！コンドル！タ～～ジャ～～ドル～～～！！》

映司は再びオーズ　タジャドルコンボになる。

「はぁ！」

クジャクウイングを展開し、先に行ったシンクとエクレを追いかける為、そして共にミルヒを助ける為にオーズは魔物に向かって飛翔した。

シンクとエクレは魔物の妨害に合いながらも順調に魔物に接近していた。

「いっけぇぇぇぇ！」

魔物まで後一息の所まで来たが・・・

「勇者！飛距離が足りん！」

「足りる！届く！届かせる！」

シンクは叫ぶが、やはり飛距離は足りず失速し始める。

「・・・私に任せろ。確実に届かせる！」

「任せろって・・・。」

エクレは息を吸い込み、トルネイダーから静かに落ちた。

「紋章砲で打ち上げる！上手く乗れ！姫様を・・・頼む！」

エクレは紋章砲を発動させ、トルネイダーに放つ。エクレの紋章砲を受け、トルネイダーはスピードを取り戻す。

「エクレ！」

「直ぐに追いかける！先に行け！」

やがてエクレは見えなくかった。

「くっ・・・了承！」

そのまま魔物に突っ込もうとしたが、尻尾が妨害に来る。

「この！」

シンクはスケーボーの用量て避けるが・・・

「うぁ！」

背後からきた分身体がトルネイダーに当たり、弾き飛ばされた。
更に追撃で分身体が体当たりをして来た。
（やられる！）
シンクは思った。
（エクレ・・・レオ閣下・・・映司さん・・・ミルヒ・・・ごめん。）
シンクが諦めかけたその時だった。
誰かがシンクの腕を掴み、分身体を火炎弾で蹴散らした。
「え？」
シンクは驚き、上を見た。
自分の仲間で火炎弾を撃て、単独飛行ができるのは1人しかいなかった。
「シンク君平気！？」
「映司さん！」
それはタジャドルコンボとなったオーズ、もとい火野映司だった。
映司はそのまま魔物の背中に着地する。

「映司さん・・・どうして・・・。」

「レオ閣下に言われてね。俺も姫様にはお世話になってるし、それに・・・大切な仲間だしね。」

「映司さん・・・。」

オーズとシンクは話しを終え、前を見る。

「俺が援護するからシンク君は姫様の所に！」

「はい！」

シンクは個人から短剣2本を取り出し走り出し、オーズはクジャクフェザーを展開する。

魔物の分身体が幾度となく現れ、シンクに襲いかかるが、

「はぁ！」

オーズはクジャクフェザーを羽手裏剣として飛ばし分身体を次々と消しさっていく。

シンクはその間に走る。目的地はただ一つ、それはミルヒが捕らわれている場所である。

ーーーーーー

ミルヒは見知らぬ場所で目が覚めた。
辺りには荒れた大地、枯れた木々、空からは赤い雷が見える。
「姫君・・・。」
「！？」
自分を呼ぶ声がした為後ろに振り返る。そこには透けてだが狐の様な動物がいた。
「聖剣の姫君・・・。」
「あ、はい！」
再び名を呼ばれ返事をするミルヒ。
「申し訳ありません・・・我が子があなた方に酷い事をしてしまって・・・。」
「え・・・？」
突然の発言に驚くミルヒ。
それからミルヒはこの魔物誕生の話しを聞いた。
妖刀が刺さり土地神が魔物なるまでの経緯を・・・

そして、ミルヒはその土地神の子場所まで来た。

「聖剣の姫君・・・あなたなら、魔物とかした我が子を殺す事ができる筈です。その聖剣で・・・この子の首を・・・落としてやって下さい。」

「！」

「そうすれば・・・魂の尾が離れ、魔物の姿を保てなくなります。」

「そんな・・・」

ミルヒの目には涙が溜まっていた。

「私は・・・この子に触れる事ができないのです・・・これ以上我が子を苦しめたくないのです・・・聖剣の姫君・・・どうか。」

土地神の母はミルヒに頼み込んだ。

「私がやれば・・・この子は・・・。」

ミルヒは腰のエクセリードを抜き、土地神の子に近づいた。

「ありがとう・・・。」

母は感謝し、ミルヒは子の首を落とそうとした。

「お前はそれで良いのか？」

「「！？」」

突然、この荒れた大地に声が響いた。母でもミルヒでも、ましてや子でもない。若い男の声だった。

「誰ですか？」

ミルヒはその人物を呼んだ。

やがて・・・

「・・・これは？」

ミルヒや母の周りに赤い羽が落ちて来た。

ミルヒは一つを手に取る。

「それは俺の羽だ。」

「「！」」

声がした方を向くミルヒと母。

そこには・・・若い男が立っていた。

全身に赤を貴重としたズボン、黒い上着、特徴的な金髪、そして何よりも異形の形をした右腕。

その男は静かにミルヒ達に近寄った。

「こいつはまだ生きている。ここで殺して魔物が消えても長い時の中で積み重なった悲しみは消えない。ビスコッティの宝剣は確かに魔を断つ剣かもしれない。だが、もとより人と命を導き大地に希望を育む為の剣の筈だ。お前達土地神もフロニャルドに生きる命だろ。妖刀ごときに負けてどうする・・・救ってやるんだ、この子も母もな。」

「・・・。」

若い男の思いを聞き、ミルヒは無言で立ち上がった。

「・・・そうですね。この子もこの子のお母さんも・・・このフロニャルドに生きる命なんですよね・・・妖刀ごときに悲しい思いをさせられて終わるなんて・・・私が許しません！」

ミルヒのエクセリードとパラディオンが輝き始める。

若い男はそれを満足そうに見ていた。

「ありがとう・・・あなたのおかげで気づけました。」

「礼はいい・・・早く行ってやれ。」

「はい！」

やがてこの世界が音を立て崩れ始める。

「おい。」

「何ですか？」

崩れ逝く世界で若い男はミルヒに話しかける。

「オーズ・・・いや火野映司に伝えろ。もう直ぐ会えるってな・・・。」

「え？」

そう伝えると若い男は赤い光を放ち消え始める。

「待って！あなたは一体・・・何で映司さんを・・・。」

「それは・・・あいつから聞け。」

そう若い男が言うと若い男は完全に消え、ミルヒの目の前は真っ白になった。

「必ず映司に伝えろよ・・・。」

最後に若い男の声が響いた。

救いと晴れる空と砕かれた安らぎ（前書き）

第４６話です。

前回に別の小説を投稿すると書きましたが、変更してこの作品完結後に投稿したいと思います。

救いと晴れる空と砕かれた安らぎ

自分の目の前が真っ白になってゆく。

音を立てながら、この世界は崩壊してゆく。

「さぁ、お前がいた場所に戻れ。今やるべき事をする為に・・・。」

ーーーーーーー

「姫様！姫様！」

シンクはひたすらミルヒが捕らわれている球体を叩き続けていた。

「ミルヒ！」

とうとう名前で呼び始めた時だった。

「・・・あれ？」

ミルヒの指に指輪の状態であったパラディオン、短剣の状態だったエクセリードが輝き始める。

パラディオンとエクセリードが輝くと同時に球体に亀裂が入る。亀裂は徐々に多くなっていく。

パリィィィン。
やがて球体は音を立てながら割れ、大量の水と共にミルヒが現れる。
「おっと！」
シンクは倒れそうになったミルヒを支える。
「姫様！」
呼ぶがミルヒから返事はない。
「ミルヒ！」
「う～ん・・・シンク？」
「はい！、っ！？」
ようやく意識を取り戻したミルヒ。
だが、ここで一つ問題が・・・
「シンク？どうしたんですか？」
「いやその・・・ミルヒ・・・服。」
「・・・あ。」
何を隠そうミルヒは素っ裸だったのだ。数秒間の沈黙。

「ひゃぁ～！」

「見てない！見てませんから！」

悲鳴を上げるミルヒと見てない宣言をするシンク。

「いやでも・・・シンクになら・・・。」

「え？」

「このままシンクに見せてある意味一つのゴールをしても・・・私の初めてを・・・。」

ミルヒは体をできる限り腕で隠し何やら凄い事をぶつぶつ呟いていた。

シンクはシンクでフリーズしていた。

「あの～・・・2人共大丈夫？」

「「は！」」

魔物の攻撃が止んだ為、こちらに着ていた映司、もといオーズはこの状況を見かね声をかけた。シンクとミルヒは正気に戻る。

「そうだ！シンク、映司さん私この子を助けたいんです！」

「「助ける？」」

「この子は妖刀のせいで魔物になっているだけで、元々は普通は土地神の子供何です！」

ミルヒはこの魔物の詳細をシンクとオーズに伝えた。

「なるほど・・・でもどうやって？」

「この子のどこかに妖刀が刺さっている筈なんです。それを抜けば・・・。」

シンクの疑問に答えるミルヒ。

「それよりも、姫様の服・・・。」

オーズが言う様にミルヒは今素っ裸である。更にシンクはここまで来るのに傷だらけである。

すると・・・、

「エクセリード？」

短剣となっていたエクセリードが輝きを増す。

やがてエクセリードの光はミルヒを包み込み、一瞬で騎士甲冑を着せる。

「パラディオン？」

シンクの元にはパラディオンが戻り、ミルヒ同様に光で包み込む。シンクの傷は一瞬で治り、服も元通りになる。

「エクセリード・・・これはあなたが？」

ミルヒの問いにエクセリードは一瞬輝く。

「私達に頑張れって言ってくれてますか？」

この問いにもエクセリードは一瞬輝いて答える。

やがてエクセリードとパラディオンはその形状を変化させ、２つ共大剣の様な形状になった。

「ミルヒ・・・行こう！」

「はい！」

シンクとミルヒは立ち上がり、妖刀がある頭部を見つめた。

魔物をそれを察知したらしく大量の分身体を作り出す。

「シンク君、姫様。俺が援護します。その間に妖刀を！」

「「はい！」」

オーズは再びクジャクフェザーを展開する。

シンクは足に輝力を集中させる。

「ミルヒ行くよ！」

「はい！」

シンクはミルヒと共に妖刀がある頭部に向かう。
それにあわせて、大量の分身体がシンクとミルヒに向かう。
「やらせない！」
オーズはクジャクフェザーを羽手裏剣として飛ばし分身体を蹴散らし、シンクとミルヒの血路を切り開く。
やがて羽手裏剣を数体が抜け、シンクとミルヒに迫る。
シンクとミルヒは大剣となったエクセリードとパラディオンを前方に向ける。
「「ホーリー・・・セイバーーー！！」」
刃身の先から巨大な砲撃が放たれ、分身体を一掃する。
その間にシンクとミルヒは妖刀が刺さっている場所に到達する。
シンクとミルヒはエクセリードとパラディオンを待機状態にし、妖刀の持ち手を握る。
「「せーの！」」
2人で力を合わせて妖刀を引き抜こうとする。
妖刀の周りにあった鎖が外れる。

「あとは僕が！」

ミルヒを離れさせ、シンクは1人で妖刀の持ち手を両手で握る。

「このぉぉぉぉぉ！」

シンクは力を込め、渾身の力で妖刀を引き抜いた。

妖刀が引き抜かれると刺さっていた場所から土地神の子が現れ宙を舞う。

「あ！」

ミルヒはその子を抱き止める。

シンクはそれを見届けホッとする。

「2人共〜！大丈夫〜！？」

「「何とか！」」

オーズが走ってシンクとミルヒに近寄ろとすると、

「「「！？」」」

突然魔物が砂になり始める。

「うぁ！」

更にシンクが持っていた妖刀が暴走を始め、シンクの右腕に絡みつ

く。

「「シンク（君）！」」

「うぁぁぁぁぁ！」

軽くパニックになるシンク。

「くっ！」

オーズはタジャスピナーを構えるが。シンクが動きまわり狙いが定まらない。

「どうすれば・・・」

オーズが呟くと、

『映司！』

（アンク！？）

『映司！レオに合わせろ！』

（レオ閣下に！？）

オーズはグラナ砦の屋上を見る。

そこには小さくではあるが、弓を構えたレオとそれを支えるルージュがいた。

『俺が声を出したら火炎弾を撃て！』

（分かった。）

オーズはタジャスピナーを構え、しばし神経を研ぎ澄ませる。

『・・・今だ！』

「せい！」

オーズは空に向かって火炎弾を放つと、ちょうどレオが放った矢とぶつかり、矢は炎を纏い妖刀の刃身と持ち手の間を貫いた。

「うわぁ！」

シンクは妖刀が貫かれた事により妖刀から解放されたが、尻餅をついてしまう。

「シンク！」

ミルヒがシンクに駆け寄った。

「痛てて・・・今のって・・・。」

「はい！レオ様です！あと映司さん！」

シンクに妖刀を貫いた人物を教えたミルヒ。

「シンク君大丈夫？」

「はい、何とか。」

無事を確かめあったオーズとシンク。貫かれた妖刀の刃身は燃えながら谷間へと落ちていった。

その間にも魔物の身体だった物は砂となり崩れ始めている。

シンクはミルヒをおぶりグラナ砦を目指そうとするが、

「駄目だ、浮き岩がない。映司さん、さっきのエクｒ「勇者様～！姫様～！」」

シンクがオーズに何か言いかけたが、それは空から聞こえてきた声にかき消された。その声の主は・・・

「「「リコ（ちゃん）！」」」

それは紛れもなくリコの物だった。

やがてリコはミルヒのセルクルであるハーランに乗り現れた。

ちなみにそれにはエクレも乗っていた。

何でもエクレ落下をリコは目撃していたらしく救助したらしい。

シンクとミルヒはハーランに乗り、グラナ砦を目指した。無論単独

飛行ができるオーズはハーランには乗らずにクジャクウイングを展開しハーランと平行飛行をしながら向かった。
魔物が倒され、雲が晴れてそこには何時もと変わらぬ青空があった。

ーーーーーーー

「どうやらやったようじゃな。」

「はいレオ様。」

ルージュに支えられていたレオは、弓状態のグランヴェールを指輪状態にする。

「・・・来たか。」

やがて目前にシンク達を乗せたハーランと単独飛行するオーズが見えた。

「ルージュ、もう良いぞ。」

「はい。」

ルージュはレオから離れ、レオは自分の力で立った。

やがてグラナ砦屋上にハーランとオーズが降り立つ。

ハーランからシンク、ミルヒ、エクレ、リコの順番で降り、オーズは変身を解消し元の映司に戻る。

「映司さん。」

「はい？」

ミルヒは映司に話しかけた。

「実は映司さんに伝言があるんです。」

「俺に伝言？」

「はい。その人はこう言っていました、『もう直ぐ会える』って。」

「そうですか・・・」

映司はこれを聞き、内緒喜んでいた。

（アンク・・・お前だよな。）

映司はもう直ぐ相棒に会えると思うと嬉しくなった。

「ルージュさん、この子をお願いします。」

「はい、分かりました。」

シンクは懐に入れていた土地神の子をルージュに預けた。ルージュは土地神の子を抱えて砦の内部へと戻って行った。

皆には笑顔があり、今この場には安らかな時間が流れていた。

・・・・・・

だが、その時間は長くは続かなかった。

ザシュ！

それは誰かの腹部が鋭い刃に貫かれた事により終わりを告げたのだった。

器とサソリと復活の錬金術師（前書き）

第４７話です。

もう直ぐ今年も終わりですね。

皆さんよいお年を。

器とサソリと復活の錬金術師

突如として響き渡った音に皆が凍りついた。

明らかに肉体を何かが貫いた音、貫かれた人物以外はその場から音がした場所に振り向いた。

「「「「！」」」」

振り向いた者が全員唖然とする。

「・・・・。」

そこには、腹部を槍の様な物で貫かれたミルヒがいた。

「ミルヒ！」

我に帰ったレオがミルヒに駆け寄るが、

「主の器に触れるな・・・・。」

「っ！？」

レオの目の前にサソリの模した怪人が一瞬で現る。

「ふん！」

「ぐふ！」

腕のはさみの様な部分でレオを切り裂く。

「レオ様！」

エクレが倒れそうになったレオを支えた。

「・・・よくもまぁこんな隙を作ってくれたものだな、感謝するぞ。」

「誰だ！」

突如声が聞こえた。シンクが声に反応する。

「久しいな・・・ビスコッティの勇者、そして現代のオーズよ。」

やがと黒い霧が辺りを包み込む。だがそれはすぐに晴れた。

霧が晴れ、そこには異形が立っていた。一部にサソリやカニ、エビの特徴をもったグリードだった。

「しかし、こうも簡単に手に入るとは・・・考えていなかったな。」

「貴様！何ものだ！」

エクレはダガーを構える。

「私か？それなら現代のオーズに聞くんだな。」

「映司に？」

エクレ達は映司を見るが、

「ごめん、甲殻類のグリード何て俺初めて見たんだ。」

当然映司は甲殻類のグリードなど知るわけがない。

「オーズ、我を忘れたか？我が作り出したおかげでコアメダルがあるというのにな。」

グリードは意味深なこの言葉を言う。

（我のおかげ？コアメダルを作り出した？）

映司はこの言葉で記憶というパズルのピースが急速に当てはまっていく。

そして、答えを導き出した。

「まさか・・・錬金術師の！？」

「そうだ、我の名はガラ！新世界のオーズだ！」

グリード　否ガラは叫んだ。

「何でガラが！？確かに俺があの時に！」

「確かに我はあの時に貴様に倒された。だが、魂は異空間をさまよい続けた！そして・・・黒いコアメダルを手に入れた。」

ガラは右手にサソリのコアメダルを取り出し見せる。

「このコアメダルには邪悪な力が宿っている。我の魂はこいつと融合した事によりグリードとしての実態を得たのだよ。」

「まて！それに姫様と何の関係がある！」

ガラの言葉にエクレが叫んだ。

「関係あるのだよ。この黒いコアメダルはそれぞれ1枚ずつしかなく、我はこれと全く同じ物を2枚ずつ作り出した。だが力が強すぎた為に暴走する危険があったのだ。この小娘は我が完全態になった際に暴走しない為の器だ。」

どうやらガラがミルヒを狙っていたのは自分の器にする為らしい。

「あとは・・・。」

ガラはサソリヤミーを見る。

「御意。」

サソリヤミーは返事をすると、目にも留まらぬ速さでシンクの目の前に現れた。

「っ！」

シンクは突然目の前にサソリヤミーが現れた為たじろぐ。

「ぜや！」

「うわぁ！」

サソリヤミーはシンクに打撃を与えると、再び高速で移動し今度は再びレオの前に立った。

「貴様！」

「獅子は引っ込んでいろ。」

「がは！」

シンク同様に打撃を与えるとサソリヤミーはガラの元に戻る。

「主よ、お目当ての物です。」

「ご苦労。」

ガラはサソリヤミーから何か指輪の様な物を受け取った。

「あれ？パラディオンがない！」

「グランヴェールがなくなっている！？」

「悪いな、パラディオンとグランヴェールは貰った。」

焦るシンクとレオにガラは奪ったパラディオンとグランヴェールを見せる。

「貴様！」

エクレは紋章砲を撃とうとするが・・・

「良いのか？貴様達の大切な姫君を盾とするが？」

「っ・・・。」

ミルヒを盾にされ、エクレは紋章を引っ込める。

「これでビスコッティとガレットの宝剣が全て揃ったか。」

ガラは右手に指輪状態のパラディオンとグランヴェールをつける。

その手には、既にガレットのもう一つの宝剣である神剣エクスマキナが指輪状態でつけられていた。

「貴様・・・いつの間にエクスマキナを・・・。」

「この砦から奪った。それまでだが・・・何か？」

ガラはあざ笑うかの様にレオを見る。

「さて、もう時間だな。」

ガラはそう言うと、ミルヒを串刺しにしたメダルの槍の刃身は巨大化し、ミルヒを飲み込む。そのままミルヒを飲み込んだ槍はガラに吸収された。

「ミルヒ！」

「「「姫様！」」」

シンク達の叫びが虚しく響いた。
ミルヒを取り込んだガラは・・・
「さぁ、いよいよだ。」
残りの黒いコアメダル６枚を取り込んだ。
「ぐっ！がぁぁぁぁぁ！」
どす黒いオーラを放ちながら完全態へと変貌する。
「「「うわぁ！」」」
あまりのエネルギーの放出により映司達は数メートル飛ばされる。
やがてガラのいた場所には、
「・・・成功だな。」
ミルヒの姿となったガラがいた。
「くっ！」
映司は今日４回目の変身をしようとしたが、
「さぁ、ゲームを始めよう。」
「っ！？」

突然映司達のいる床がメダルの形に浮き始める。
そしてそれはひっくり返り、もとあった場所に収まった。
「始めよう・・・我がこの世界の新たなオーズになる為に。」
ガラがそう言うと、サソリヤミーはどこへと向かって行った。
フロニャルドにおいて本当の最終決戦が始まろうとしていた。

攻防戦と擬態とアンク降臨（前書き）

第４８話です。

ようやくあのお方の復活です。

攻防戦と擬態とアンク降臨

ガラがミルヒを取り込んだとほぼ同時刻、ビスコッティ側スリーズ砦

「・・・。」

ガウルは1人グラナ砦のある方向を見ていた。

「ガウ様～？」

「どないしたんですか？」

「ベルとジョーとノワか、何だか胸騒ぎがしてな・・・。」

「「「？」」」

ジョーヌとベルとノワールは首を傾げた。

「おい！あれ何だ！？」

「「「？」」」

一般兵の叫びに反応した4人は反対側に振り返った。

「え？ちょ・・・。」

「嘘・・・。」

「何だこりゃ・・・。」

「大地が・・・。」
そこには、円形に浮かび上がった大地があった。
やがて大地は１８０度回転し、もとあった場所に収まった。
「何だかよく分かねぇが行くぞ！」
「「「はい！」」」
ガウルはジェノワーズを連れてスリーズ砦を飛び出した。

ーーーーーーー

「ここは・・・どこだ？」
映司は目の前にある建物を見て思った。
「あれはスリーズ砦！？一体どうなっているんだ！？」
「確かにさっきまで僕達グラナ砦にいたよね？」
「はい・・・一体何が何だかさっぱりであります。」
エクレは目の前にスリーズ砦がある事に驚き、シンクとリコは状況

を理解しきれていなかった。
「・・・。」
ただ、レオだけは黙り込んだままだった。
「確か・・・そうだ姫様！」
「こうしてはおれん！急いでグラナ砦に戻らないと！」
シンクとエクレは先ほどグラナ砦での出来事を思い出し動こうとした。
「って、シンクに姉上！？」
「親衛隊長？」
「リコに映司？」
「どないしたんや？」
そこへガウルとジェノワーズが走ってきた。
「・・・ガウルにジェノワーズか。」
レオが気づくがやはりまた黙り込んだ。
「何だよどういう事だ？」
「話せば長くなるよ・・・。」

シンクはガウルとジェノワーズにこれまでに起こった事を説明した。
・
・
・
・
・
「つまり・・・そのガラって奴が姫様が取り込まれて、宝剣も奪われたって訳か・・・。」
シンクのから話しを聞いたガウルは、
「かなりやばいな・・・でもガラって奴は何が目的でこんな事を・・・。」
「それは僕には分からないよ。僕だってさっき遭遇したばかりだし・・・。」
「だよな・・・。」
シンクもガラとは先ほど遭遇したばかりである為、お手上げ状態だった。
「映司は何か分かる？」
賭けでノワールは映司に尋ねた。
「多分、ガラの目的が前回と同じなら・・・この世界を一度終わりにしてから、自分が新世界の王になる事が目的だと思う。」

「なるほどな・・・こいつは結構厄介だな。」
「でも、姫様を助けないと。」
「当たり前だ！」
ガラの目的が分かりその場にいた者達が立ち上がる。
「んじゃあ早速ぶｔ「その必要はない。」あ？」
ガウルが振り返るとそこには、
「貴様達は主の目的に邪魔だ・・・ここで排除する。」
サソリヤミーと大量にいるガラの騎士団がいた。
「ここは既に包囲した。大人しく死んで貰おう。」
「こんな時に！」
大量の騎士団を見てエクレはダガーを構える。
それに続く様にジェノワーズやリコは自分の武器を取り出す。
「シンクと姉上！これを！」
ガウルはシンクに槍、レオに斧を投げ渡す。
「すまんガウル。」

「ありがとう！」

シンクとレオはそれを受け取り臨戦態勢に入る。

「んじゃあ俺も！」

ガウルは輝力を手足に集中させて獣の爪や足を形成する。

「変身！」

《タカ！クジャク！コンドル！タ～～ジャ～～ドル～～～！！》

映司はタジャドルコンボに変身する。

「・・・行け。」

「全員迎え撃て！」

サソリヤミーが指示すると騎士団は一斉に映画達に向かう。

映画達もそれを迎え撃つべく騎士団に向かった。

「オーズ！貴様の相手は私だ！」

「っ！」

騎士団と戦おうとしたオーズにサソリヤミーが襲いかかった。

「映司！」

「大丈夫！ヤミーは任せて！」

オーズは単独でサソリヤミーとの戦闘を開始した。

「任せたぞ！」

エクレは他のメンバーと共に騎士団との戦闘に突入した。

ーーーーーーー

一方グラナ砦では、

「どうした？もう終わりか？」

「く・・・。」

ミルヒに擬態したガラと土地神の子を抱えたルージュが戦闘を行っていた。

状況は明らかにルージュ不利であった。ガラの武器はレオから奪ったグランヴェールである。

「つまらんな・・・。」

ガラはグランヴェールを肩に担ぐ。

「こいつ・・・なんでミルヒ様の姿を。」

ルージュはあの場に居合わせてなかった為に状況が分かっていなかった。更に土地神の子を抱えている為に戦いづらい。

「てや！」

「ふっ・・・・。」

ルージュは短剣で斬りかかるがいとも簡単に交わされる。

「ネズミは寝ていろ。」

「きゃあ！」

ガラに振るわれたグランヴェールを短剣でガードするが、そのまま壁に叩きつけられた。

「う・・・・。」

ルージュはそのまま気を失った。

「・・・所詮はただのメイドか。」

ガラはグランヴェールを待機状態にし、その場を離れた。

やがて壁の一部が崩壊し、ルージュと土地神の子は瓦礫に埋まった。

ーーーーーーー

ガラの騎士団の襲撃は直ぐにスリーズ砦にいたビスコッティとガレット両者に伝わり、ビスコッティとガレット両者共に迎撃にあたっていた。

「でや！」

「ふん！」

サソリヤミーと戦闘中のオーズは互角の戦いを繰り広げていた。

互いに回し蹴りを放ち、ぶつかり合う。

「はぁ！」

「ぬぐ！」

オーズはすぐさまメダジャリバーでサソリヤミーを攻撃する。連撃を受けて辺りにセルメダルが散らばる。

「はぁ・・・。」

タジャスピナーに力を込める。

「でや！」

「ぐふ！」

そしてサソリヤミーをタジャスピナーで殴りつける。サソリヤミーからは相当なセルメダルが散らばる。

「せいや！」

オーズは更に右脚で回し蹴りを放つが、

「舐めるな！」

「！」

右脚はサソリヤミーに掴まれ不発に終わる。

「ふん！」

「うわ！」

そのまま投げ飛ばされる。

サソリヤミーは投げ飛ばしたオーズを追撃すべく高速で移動する。

「くっ。」

投げ飛ばされたがきちんと脚で着地するオーズ。

「がら空きだ！」

「があ！」

着地の隙を突かれ、サソリヤミーのハサミによる一撃を受ける。
しかも変身が解除されてしまい、ポケットからアンクのタカメダルが飛び出してしまった。
「くそ・・・。」
映司はまた変身する為にオースキャナーに手をかける。
「やらせん！」
「っ！」
サソリヤミーが接近しベルト自体を弾いた。
「ごふ！」
更に腹に蹴りを受けて後ろに飛ばされる映司。
「さて・・・そろそろ死んで貰おうかオーズ。」
「くっ・・・！」
サソリヤミー余裕からか歩いて映司に近づく。
「このぉ！」
映司はメダジャリバーを手にとってサソリヤミーに振り下ろす。

「・・・何だ？その攻撃は？」

「がぁ！」

メダジャリバーはサソリヤミーの左手で防がれ、脚払いをし映司を倒す。

「死ね・・・オーズ！」

サソリヤミーはメダジャリバーを映司に突き刺そうとした。

（こんな所で終わるのか・・・俺・・・。）

映司に今までの出来事が頭をよぎる。

色々な人達が現れたが、最後に出てきたのは・・・

（アンク・・・。）

自分の相棒の存在だった。

「死ね！」

メダジャリバーが映司に振り下ろされた・・・

「やらせるか！」

「ぬがぁ！」

サソリヤミーは突如放たれた火炎弾に弾き飛ばされた。

「・・・え？」

映司は状況がさっぱり分からなかった。

「何時まで寝てるだ・・・映司。」

「！！」

それは懐かしい声、今までずっと聞きたかった声だった。

「・・・アンク？」

「お前頭でも打ったか？」

それは紛れもなくアンクだった

「とりあえず立て。」

アンクは異形の右手を差し伸べる。

映司はその手を握りしめて立ち上がる。

「久しぶりだな・・・映司。」

「アンク・・・どうして？」

「理由は後だ。まずは・・・あのヤミーだ。」

アンクは先ほど火炎弾で弾き飛ばしたサソリヤミーを睨んだ。

「貴様・・・アンクか！」

サソリヤミーはどうやら怒っているらしい。

「映司、ベルトだ。」

「あ、うん。」

アンクは拾ったオーズドライバーを映司に渡す。

映司はオーズドライバーを腰に装着する。

「それとメダルだ。」

「分かってるって。」

更にメダルを受け取りオーズドライバーにセットする。そしてドライバーを斜めにし、オースキャナーを右手で掴みメダルをスキャンした。

「・・・変身！」

《タカ！クジャク！コンドル！タ～～ジャ～～ドル～～～！！》

映司は再びタジャドルコンボに変身する。

アンクも人間態から怪人態へと変わる。

「アンク・・・貴様！」

「ここからは2対1だ・・・覚悟しろ。」

「アンク・・・行くよ！」

タジャドルコンボ・アンク対サソリヤミー　第2ラウンドが開始された。

番外編その弐、バースチームと家族と異界のパンツ（前書き）

番外編その弐です。

今回は行間みたいな感じです。

番外編その弐、バースチームと家族と異界のパンツ

鴻上ファウンデーションにあるとある研究室。かつては真木清人という人物がいたが、彼はもうこの世には存在しない。したがって現在は誰もいない筈だった。

しかし、この研究室にあるコンピューターは誰かに操作されて動いていた。

画面上には何やら人の様な物が映っていた。

「・・・こんなものかな。」

パソコンを動かしていた青年　後藤慎太郎はキーボードから手を離した。

すると研究室のドアが開き2人の人物が入ってきた。

「後藤ちゃ～んお疲れさん！コーヒーとおでん買ってきたよ～！」

「後藤さんお疲れ様です。」

入ってきたのは奥様方の味方？伊達明と会長秘書の里中エリカであった。

「伊達さん、ありがとうございます。」

後藤は伊達からコーヒーとコンビニおでんを受け取る。

「しっかし会長も突然だね～。バースとプロトバースのメンテを頼むなんてさ。」

後藤や伊達が研究室にいる訳、それはバースとプロトバースのメンテナンスの為だった。

だが、バースのメンテナンスなら里中1人でも可能な筈なのだが今回は何故だか後藤と伊達が呼ばれたのだ。

「会長はたまに何考えてるか分かんねぇからな～。しょうがないでしょ。」

「そういえば後藤さん、バースとプロトバースのメンテは終わったんですか？」

里中が後藤にメンテナンスの状況を尋ねる。

「あぁ、両方完了している。プロトバースには容量が空いていたからドリルアームを追加してある。バースには試験的に新装備を追加しておいた。」

「さすが後藤ちゃん！お父さん嬉しい！」

「何度も言いますが俺は伊達さんの子供じゃありません。」

そんな会話をしていると、

『後藤君！伊達君！里中君！』

「「「！」」」

突然画面に鴻上の顔がドアップで映る。

「会長、脅かさないで下さい。」

里中が冷静に対処する。

『いや～すまない。実は君たちに見て欲しい物があるのだよ！』

「「見て欲しい物？」」

鴻上の発言に首を傾げる後藤と伊達。更には声がハモっていた。

『では見てくれ！』

そう言うと鴻上の顔ではなく城の様な建物に画面が変わる。

「ただのお城ですね。」

里中が何か言ったが、とりあえず見続けていると・・・

「ん？んんん？」

「どうしたんですか伊達さん？」

「いや・・・何か今獣耳と尻尾が生えた人達がいた。」

「そんなバカな・・・。」

後藤が画面をよく見ると・・・

「・・・本当だ。」

「でしょ？」

「それに・・・何かと戦っていますね。」

後藤の言うとおりその人達は何かと戦っていた。

「これ・・・どこかで・・・。」

「里中ちゃんも？俺もこいつどっかで見たことあるんだよな・・・。」

里中と伊達は画面の人達が戦っている存在に心あたりがあるらしく、頭をひねる。

「こいつらは・・・確か。」

後藤も考える。そして、答えが頭に浮かんだ。

「そうだ！確かこいつらはガラの騎士団だ！」

「「あ！」」

後藤の答えで伊達と里中も思い出した様である。

やがて画面はまた変わり、金髪の少年や緑髪の少女達が必死にガラの騎士団に抵抗している場面になる。

「ひでぇなこりゃ。」
伊達がぽっつりと呟く。
そして画面がまた変わりサソリの怪人が映し出される。
「サソリのヤミーかこれ？」
「多分・・・あの錬金術師絡みなら。」
伊達の疑問に答える里中。
「・・・！」
後藤に電撃が走った。
「オーズ！？」
それは、サソリヤミーに立ち向かうオーズが映っていたからである。
更には・・・
「おい！これアンコじゃないか！？」
伊達はオーズと共闘するアンク（怪人態）を発見する。
すると、
ブォン。

研究室の入り口にワームホールが出現する。

「まさか・・・あそこに繋がっているのか？」

確証はないが後藤は画面に映っていた世界に繋がっているのではないかと思った。

「「後藤ちゃん（さん）。」」

どうやら伊達も里中も同じ事を考えていた様だ。

「・・・行きましょう、火野を助けに！」

「よし来た！」

「行きましょう。」

後藤と伊達はバースドライバーを持ち、後藤はカバン　伊達はミルクタンク　里中はスーツケースを持ち、ワームホールの中へと向かった。

自分達の仲間を助ける為に・・・

ーーーーーーー

ここはある城下町。今城下町の中心にある城の中で1人の男が小さ

な池を見ていた。
その池には先ほど後藤や伊達などが見ていた光景が映し出されていた。
やがて男は城を飛び出して城下町に向かった。

馬に乗り、城下町を疾走していると目の前にたくさんの人達が集まっていた。
男は馬を止めて、馬から降りた。そしてその人達に近づいた。
集まっていた人達も男に気づき男の元に集まった。
「・・・皆も見たんだな。」
男は喋り始める。
「あぁ、みんなあいつを助ける為に集まったんだ！」
集まっていた人達は鍬や鎌、包丁を持っていた。
「だが、かなり危険だぞ。それでも良いのか？」
「あいつは俺達を助けてくれた・・・皆は大きな家族と言った。今度は俺達があいつを助ける番だ！」
代表者がそう言うと他の者も頷く。その瞳に嘘はなかった。

「・・・分かった、皆で助けに行こう。」

「「「おー！」」」×多数

すると、近くの橋にワームホールが現れる。

「皆・・・行くぞ！」

男が言うと集まっていた人達はワームホールへと向かう。男も馬に乗りワームホールへと向かう。

「・・・映司、今行くぞ。」

男や町民達は家族を助ける為にワームホールへと入って行った。

ーーーーーー

某X国

ある青年が歩いていた。外見上からして日本人であり、木の棒に派手なパンツを吊していた。

時刻は夜、青年は公園のベンチに座り休憩を始めた。

だが、やがて直ぐ近くにワームホールが現れる。

「？」

青年は突然ワームホールが現れた為、パンツとホルダーを置いて興味本位で近づいた。

するとワームホールはもね凄い勢いで吸い込みを始めた。

「っ！」

青年は突然の事で踏ん張りが効かずにワームホールに吸い込まれてしまう。

ベンチにおいてあったホルダーからは、赤　黄色　緑のメダルが１枚ずつホルダーから抜けてワームホールに吸い込まれた。その後から金色のメダルが３枚抜けて吸い込まれた。

それだけ吸い込むとワームホールは何事もなかったかの様に消えた。

そこに派手なパンツと数枚メダルの抜けたメダルホルダーを残して。

来訪と連携攻撃と暴竜の力（前書き）

第４９話です。

最近仮面ライダーアクアがすごくかっこよく見えるのは何故だろう・・・

来訪と連携攻撃と暴竜の力

スリーズ砦から少し離れた平原の一角、突如としてワームホールが出現し中から3人の人物が姿を表した。

2代目バース装着者である後藤慎太郎

現プロトバース装着者である伊達明

上記2名のサポートを務める里中エリカ

以上3名である。

「ここか・・・。」

「ここに火野さんとアンクさんが・・・。」

「火野！アンコ！待ってろよ！」

「「アンコじゃなくてアンクです。」」

伊達にツッコミを入れ、3人は映司とアンクがいると思われるスリーズ砦に向かった。

ーーーーーー

「・・・行くぞ映司！」

「あぁ！」

オーズとアンクはサソリヤミーめがけて走り出す。

「1人増えたところで！」

サソリヤミーは頭からサソリの尾を伸ばし先端から無数の針を飛ばす。

「「はぁ！」」

針が着弾する前にオーズはクジャクウイング、アンクは自身の翼を広げて空へと上がる。

「こいつ！」

「おりゃ！」

「ぐほ！」

アンクは空中で一回転してサソリヤミーの頭部にかかと落としを決める。

「せいや！」

「ふご！」

サソリヤミーにかかと落としを決めたアンクは後方へ離脱する。そ

して入れ替わりで入ってきたオーズに飛び蹴りをもらい、サソリヤミーは後ろへとばされる。

「「はぁぁぁぁぁ・・・。」」

大地に降りたオーズとアンクはタジャスピナーと右腕に炎を収束させていく。

「はぁ！」

「せいやぁ！」

両者はほぼ同時に火炎弾を放つ。放たれた火炎弾は一つになり大型の火炎弾に進化する。

「がぁぉ！」

サソリヤミーは腕をクロスさせて防ごうとしたが、威力が高すぎた為にガードが無効となり火炎弾を受けた。サソリヤミーは再び後ろに吹き飛ばされる。

「くそぉ・・・なんて連携だ・・・。」

サソリヤミーはオーズとアンクの連携攻撃に驚愕する。

「当然だ。俺達がどれくらい一緒に戦ってきたと思ってる。」

実際、映司とアンクは一年以上共に戦ってきている為、２人の絆は非常に強くそれがこの連携攻撃を成功させていた。

「そろそろ決める！」
オーズがオースキャナーに手をかけようとした。
「させん！」
「っ！？　うわぁ！」
「映司！」
突然側面から攻撃を受ける。
「サソリヤミーは・・・2体いたのか！」
アンクはオーズを襲った敵を見る。
そこにはもう1体のサソリヤミーがいた。違うのは外見の色である。
最初のは黒い色をしていたが、乱入してきたサソリヤミーは白い色をしていた。更に、顔につけている仮面も男性ではなく女性の物だった。
「これで状況は2対2・・・好きにはさせませんよ。」
「ちっ、サソリヤミーが2体・・・まずいな。」
アンクは舌打ちする。
「アンク。」

「なんだ映司、作戦でもあるのか？」

「あぁ、だから少し時間稼ぎしてくれないかな？」

「早くしろよ。」

「了解。」

アンクが映司の提案を了承する。

「オーズ・・・殺す！」

「アンク・・・殺す！」

サソリヤミー（♂）とサソリヤミー（♀）が尾の先端から針を飛ばす。

「ふん！」

アンクは翼を広げて羽を羽手裏剣として飛ばし弾幕を張る。

「・・・っ！　こい！」

映司は力を込めて叫ぶ。それに答える様に大地から7つの紫色の光が現れスペリオルシールドを開けていたダジャスピナーに収まる。

オーズはスペリオルシールドを閉じると、一瞬だが複眼が紫色に発光する。

「行けるか？」

オーズは地面に向けて右腕を突っ込み、そして引き抜いた。

その右手にはティラノサウルスの頭部を模した斧　メダガブリューがあった。

「できた！・・・アンク！」

「行くぞ！」

アンクはオーズから合図をもらい、

「うぉぉぉぉ！」

「な！」

低空飛行でサソリヤミー（♂）に突っ込んでサソリヤミー（♀）と引き離す。

「でりゃ！」

「ぬぐ！」

オーズもクジャクウイングを広げサソリヤミー（♀）に接近、メダガブリューの連撃でダメージを与える。

「せりゃ！」

「くぅう！」

更に飛び蹴りでサソリヤミー（♀）と距離を作る。

「決める！」

オーズはメダガブリューにセルメダルを４枚投入、そしてグリップを使い頭部を下ろしセルメダルを砕き再び上に戻す。

《ゴックン！・・・タジャドル！！》

タジャドルコンボのコンボソングが鳴り響き、メダガブリューの刃に冷気と炎が纏う。

「はぁぁぁぁ・・・。」

オーズは再びクジャクウイングを展開し、低空飛行でサソリヤミー（♀）に接近した。

「せいやぁぁぁ！」

「ぐぎゃぁぁぁぁぁ！」

オーズはメダガブリューをサソリヤミー（♀）へと振り下ろした。メダガブリューの一撃を受けてサソリヤミー（♀）は爆散する。

「映司！」

アンクは抑えていたサソリヤミー（♂）をオーズの方へと投げる。

オーズは振り向き、メダガブリューを捨てオースキャナーを手にと

り、タジャスピナーをスキャンする。

《プテラ！トリケラ！ティラノ！プテラ！トリケラ！ティラノ！・・・・ギガスキャン！！》

タジャスピナーに紫色のエネルギー弾が精製される。

「せいやぁぁぁぁぁ！」

「くたばれ！」

オーズはエネルギー弾を、アンクは巨大な火炎弾をサソリヤミー（♂）に放った。

「こんなバカな・・・ぐがぁぁぁぁぁ！」

エネルギー弾と巨大火炎弾の挟み撃ちにされ、２つをほぼ同時に受けてサソリヤミー（♂）も爆散した。

「よし！」

「安心している暇はないぞ映司！」

「分かってるって！」

オーズとアンクはガラの騎士団と戦っているシンクやエクレの元に急いで救援に向かった。

ーーーーーーー

「む、ここは・・・。」

スリーズ砦から少し離れた丘に現れたワームホールから沢山の人々が出てくる。

「きっとここに映司がいるのだな。」

馬に乗った男はスリーズ砦を見つめる。

「皆・・・行くぞ！家族を助けに！」

「「「おー！」」」

鍬や鎌、弓や刀などを持った人々は一気にスリーズ砦の戦場へと走り出す。

「はぁ！」

馬に乗った男も自分の行くべき戦場に向かった。

ーーーーーーー

「痛い！」

森の中に現れたワームホールからは1人の青年と3色のメダルが現れた。

「いてて・・・ここは？」

青年は辺りを見渡すが・・・

「何だここ・・・知らない場所だな・・・。」

メダルを拾い、辺りを散策していると、

ガキン！

「何だ・・・今のは？」

青年は音がした方向へ走った。

「ハァ、ハァ・・・お館様・・・。」

「あぁ、こいつら・・・きりがないでござる。」

ダルキアンとユキカゼは背中合わせの状態だった。

2人はガラの騎士団に囲まれてしまい、身動きがとれずにいた。実

際に先ほどから戦闘を行い、かなりの数を撃破しているが数が一向に減らない為に2人の輝力はつき始めていた。

「ここが年貢の納めどきでござるかな・・・。」

「お館様・・・。」

2人は少し諦め始めた。

だが・・・

「・・・何だ？」

ダルキアンが何かに気づいた。

ガラの騎士団はある方向を向いた。

「こいつらは・・・確かガラの騎士団！」

そこには先ほどの青年が立っていた。

「え・・・映司殿でござるか？」

「え？何で俺の名前を？」

この答えに質問したダルキアンが首を傾げた。

「でも・・・ガラの騎士団はほっとけない！」

青年　火野映司は既に装備したオーズドライバーを斜めにし、オー

スキャナーでベルトにセットされた3枚のコアメダルをスキャンした。

「変身！」

《タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！！》

火野映司は仮面ライダーオーズ　タトバコンボへと変身した。

「変身した・・・でも姿が・・・お館様。」

「あぁ、だが我々が知っているオーズの姿ではないでござるな。」

ダルキアンとユキカゼはタトバコンボを見る。

「ここからは俺が相手だ！」

タトバコンボはトラクロー展開し、ガラの騎士団との戦闘を開始した。

3色と叡智の結晶とダブルバース（前書き）

第５０話です。

今回は題名どおり、バースチームとタトバコンボがメインです。

3色と叡智の結晶とダブルバース

「行くぞ！」

タトバコンボはトラクローを展開し、ガラの騎士団に戦いを挑む。

振るわれるトラクローが次々と騎士を薙払ってゆく。

「せいや！」

並行してバッタレッグで蹴りも入れながら戦っていく。

「流石にトラクローだけじゃあ辛いな・・・なら！」

タトバコンボはメダジャリバーを取り出しだす。

「はぁ！」

両手でメダジャリバーを持ち、横や斜めにメダジャリバーを振るう。

メダジャリバーに斬り裂かれた騎士達は紫の煙りとなって消えてゆく。

「ちょっと試してみよう。」

タトバコンボはオーメダルネストからセルメダルを3枚取り出し、

メダジャリバーに挿入しレバーを前へ倒す。

「これで！」

《トリプル！スキャニングチャージ！！》

オースキャナーでセットされたセルメダルをスキャンする。

メダジャリバーの刃身に青白い光が纏う。

「せい！」

メダジャリバーを使用した必殺技　オーズバッシュを放つ。

「「「！」」」

オーズバッシュを受けた騎士達を含めた木や空間が切断される。そして攻撃対象ではない木や空間は元に戻り、ガラの騎士達だけが爆散した。

「あの技は・・・お館様との模範戦闘で使った技では。」

「これほどの威力があったとは・・・拙者も驚きでござる。」

改めてオーズの強さを実感するダルキアンとユキカゼであった。

「あの・・・大丈夫ですか？」

ここでタトバコンボがダルキアン達に話しかける。

「大丈夫でござる。心配をかけてしまった様でござるな。」

「あ、いえ・・・俺は「火野映司」え？」

自己紹介をしようとしたが、ユキカゼがタトバコンボが名前を言う前に答えてしまう。

「拙者達の仲間にも、おぬし同様に火野映司という者がいてな・・・彼もオーズでござるよ。おぬしもオーズなのだろう？」

「はい。」

「しかし拙者達が知っているオーズは、全身が赤い身体でござったが・・・・。」

「そうなんですか・・・っ！」

ダルキアンの疑問に答えようとしたが、気配を察知し臨戦態勢に入る。それはダルキアンとユキカゼも同じだった。

やがて森の奥から再びガラの騎士団が現れる。

「話しは後で、今はこいつらを！」

「「承知！」」

タトバコンボとダルキアン、ユキカゼは再び現れたガラの騎士団との戦闘を始めた。

ーーーーーー

現在スリーズ砦前では、激しい攻防戦が繰り広げられていた。
ガラの騎士団に加え、更に屑ヤミーが現れており戦況はビスコッティ及びガレット側が劣勢であった。
「何だか・・・増えてるよね？」
「あぁ、減るどころか増えてる・・・勇者は平気か？」
「まだ行けるよ！って言いたいけど・・・そろそろ輝力がやばいかな。エクレは？」
「私もだ・・・。」
シンクやエクレは先の魔物戦から連続して戦っている為に輝力の消費早かった。
これはレオやリコ、ガウルやジェノワーズなどにも現れている。
「早く片付けて姫様の所に行かなきゃいけないのに！」
シンクは槍で一心不乱に騎士達や屑ヤミーと戦う。
「こいつら・・・しつこい！」
エクレもダガーで応戦する。

「勇者様！エクレ！」

後方からリコが援護射撃で騎士達や屑ヤミーを撃つ。

「リコナイス！」

シンクはリコにサムズアップをすが、

「！　リコ後ろ！」

「へぇ？」

シンクはリコの背後に迫る騎士を発見し、リコに知らせるが・・・・

リコが気づいた時には剣を振り下ろそうとしていた。

「・・・。」

「「リコ！」」

シンクとエクレの叫びも虚しく剣は・・・・

「はぁ！」

振り下ろされなかった。

騎士は謎の女性に倒され、右脚で踏みつけられる。

「避けて下さい！」

「「は、はい！」

女性は大型の銃を取り出して、シンク達の背後にいた騎士や屑ヤミーを撃ち撃退する。

「あ、あの・・・あなたは？」

リコはとりあえず女性に話しかけると、

「あちゃ～里中ちゃんが一番のりか～。」

「伊達さん文句言わないで下さい。」

更に女性の背後から2人の男性が現れる。

「え？え？」

リコは軽く混乱する。

「誰だ！お前達は！」

「ちょっとエクレ！」

エクレがお怒り気味で2人の男性と1人の女性に近づく。

「何でそんなに怒っているかは知らないが・・・火野映司はここにいないのか？」

「「「・・・え？」」」

1人の男性の言葉に固まるシンクとエクレとリコ。

「えっと・・・映司さんの知り合いですか？」

「ん？まぁ～そんなとこかな？つまりお仲間ってわけ！俺は伊達明！」

「俺は後藤慎太郎。」

「私は里中エリカと言います。」

謎の3人組　伊達　後藤　里中は自己紹介する。

「僕はシンク・イズミと言います！」

「自分はリコッタ・エルマールと言うであります！」

「私はエクレール・マルティノッジと言う。」

それにつられてシンク達も自己紹介をした。

その間に屑ヤミーや騎士が再び現れる。

「また出てきた！」

「もう勘弁してほしいでありますよ～。」

シンクとリコはもううんざりと言わんばかりに言う。エクレも言葉には出していないが、表情は引きつっていた。

「ここからは俺達がやろう。」

「そうそう！ちょっと休んでな！」

後藤と伊達が前に出る。

既に腰にはバースドライバーが巻かれていた。

「さて・・・久しぶりに行きますか！」

「伊達さん、行きますよ！」

「「変身！」」

後藤は左手のバンドから、と伊達は右手からコイントスさせたセルメダルをバースドライバーの左にあるスロットに挿入する。そして右にあるダイアルを一気に回した。

《カポーン！》

後藤はバースに、伊達はプロトバースに一瞬で変身した。

「あれは・・・オーズなのか？」

「違いますよ。」

バースをオーズと誤認したエクレに里中が説明する。

「あれは仮面ライダーオーズではなくて、仮面ライダーバースです。」

「仮面ライダー・・・バース。」

エクレはバースをまじまじと見つめた。

「さてと、さそく使ってみようかな！後藤ちゃんが追加してくれたやつ！」

「俺も行きますよ。」

バース　プロトバース共にセルメダルを再び左にあるスロットに入れ、右のダイアルを回す。

《《ドリルアーム！！》》

バースとプロトバースの右手にドリルアームが装着される。

「「おぉ～！」」

シンクとリコは目を輝かせていた。

「はぁ！」

「おら！」

ダブルバースはドリルアームを駆使し、騎士や屑ヤミーを攻撃する。

「やっぱ使い慣れた武器は良いな！後藤ちゃんサンキュー！」

「お気に召して何よりです。」

プロトバースはドリルアームの使いやすさに感激していた。

「まだいますね・・・。」

「ちょっと奮発するかな！」

プロトバースは再びセルメダルを投入してダイアルを回す。

《クレーンアーム！》

右脚全体にクレーンアームを装着する。先端には先ほどのドリルアームが。

「後藤ちゃん！気をつけてね！」

「了解です。」

「おりゃぁぁぁぁぁ！」

プロトバースはドリルアームのついた先端を伸ばして振り回す。

クレーンアームにより伸びたドリルアームが次々と騎士や屑ヤミーを撃破していった。

「俺も負けませんよ！」

《カッターウイング！》

バースの背中にカッターウイングが装着される。

「行け！」

バースはカッターウイングを飛ばすと、カッターウイングはブーメランの様に回転して敵を斬り裂いて行った。

「分解・・・分解！」

これを見たリコはこんな時に危ない性癖が発動したのだった。

助太刀と合流と暴れん坊（前書き）

第５１話です。

ようやく最後の助っ人登場です。

助太刀と合流と暴れん坊

シンクやエクレ達の戦場にバースチームが到着した頃・・・

「ゼェ・・・ゼェ・・・んだよこいつら！きりがねぇ！」

ガウルは1人文句を言っていた。

「こいつらを倒してミルヒを助けなければならいというのに！」

レオに関してはイライラが溜まる一方だった。

「ジョーそっちは片付いた？」

「ぜんぜん減らんわ～。ノワは？」

「こっちもぜんぜん減ってない・・・むしろ増えてる。」

ジェノワーズの3人も奮戦していたが、一向に減らない否逆に増えている敵に対して次第押され始めていた。

別の場所ではゴドウィンやバナード、ビスコッティのロランが戦っているが、状況は完全に劣勢だった。

「ったくよ・・・そのガラって奴はこんな戦力をどこで手に入れたんだよ・・・。」

ガウルの言うとおり、ガラの戦力はありすぎるだ。
「おそらくは無限に生み出せるのだろうな・・・。」
「・・・まじかよ。」
レオの推測を聞いてガウルの表情が引きつる。
「そんなのにうちらは勝てるやろか・・・。」
「正直勝てる気が・・・。」
「ジョー、ベル諦めたら駄目。シンクや映司達だって頑張ってる。」
弱気になる2人をノワールが励ます。
「だってこの数・・・。」
ジョーヌが何か言いかけたその時。
ジェノワーズやガウル、レオの頭上を何かが通った。
それは無数の矢だった。矢は次々と騎士や屑ヤミーに当たり敵を撃破していく。
「な、何だ?」
「・・・ん?」

ガウルがポカンとしている中、レオは背後から気配を感じ後ろを振り向いた。

「弓班！第2射開始！」

見たことのない服装の人達がいた。

「あれは？」

「あ、姉上！」

「何だガウル？」

「前！」

「は？」

ガウルに言われ前をみるレオ。

そこには・・・

「な！？」

鍬や釜、刀を持った人々が次々と屑ヤミーや騎士に攻撃を仕掛けていた光景だった。

「大丈夫ですか？」

そこに1人の男がレオ達の元に現れる。

「ここは我々が戦います。あなた達は休んでいて下さい。」
「待ってくれよ！お前達は誰なんだ？」
ガウルはその男に詰め寄る。
「我々は、かつて火野映司に助けられた者です。」
「映司に？」
男の言葉に聞きガウルは男から離れる。
「全員！敵をこの者達に近づけさせるな！」
「「「おー！」」」
男の言葉を聞き、他の人々は天にも届きそうな返事をした。
「ん？」
「どないしたノワ？」
「いや・・・何でもない。」
ノワールは何かに気づいたが、気のせいと思い気にしなかった。
だが、実はレオ達の背後を馬に乗った1人の武士が駆け抜けていた。

ーーーーーーー

《キャタピラレッグ！》

「でや！」

バースは両脚にキャタピラレッグを装備し、屑ヤミーや騎士に対して回し蹴りを放つ。

キャタピラレッグにより屑ヤミーや騎士は爆散していく。

「後藤ちゃんそっちどう？」

「駄目ですね・・・一向に減りません。」

「こっちもだよ。」

プロトバースがうんざりした感じで言う。

「気づいたらいつの間にか囲まれていますからね。」

バースの言うとおり、今は囲まれていた。

「ブレストキャノン行っとく？」

「行きますか・・・。」

バースとプロトバースはブレストキャノンを発動させる為、セルメ

ダルを取り出した。
「ん？伊達さん！後藤さん！上！」
「「ん？（へ？）」」
シンクが何かに気づいた。
バースとプロトバースが上を見た瞬間、
無数の羽手裏剣が肩ヤミーと騎士を撃退した。
「今のは・・・。」
「主役のお出ましってやつか！」
バースとプロトバースは上空にいる２つの陰を見た。
やがて２つの陰は大地に降り立つ。
「伊達さんに後藤さん！？」
「お前ら！？」
それはまさしくタジャドルコンボとアンク怪人態だった。
「久しぶりアンコ！」
「アンクだぁ！」

早速アンクの名を間違えるプロトバース。

「あいつは・・・。」

「大丈夫ですよエクレさん。彼はアンクと言って火野さんの相棒なんです。」

「アンク!?あいつが・・・映司の・・・。」

エクレはアンクをまじまじの見つめた。

「でも何で後藤さん達が?」

「事実は後で、今は・・・。」

いつの間にか再び屑ヤミーや騎士に囲まれていた。

「こいつら・・・いつの間に。」

アンクがそう言った時、数体の屑ヤミーがこちらに吹き飛ばされてきた。

「何だ?」

タジャドルコンボが屑ヤミーが来た方向を見る。

そこには、馬に乗った男がこちらに向かって走って来ていた。

「あれは・・・。」

タジャドルコンボには見覚えがあった。
それはかつて、ガラの力で江戸時代に行っていた時に出会い、橙色のコアメダルを与えてくれた男だった。
「はぁ！」
男は馬を加速させ、タジャドルコンボ達を囲んでいた一部の騎士や屑ヤミーを蹴散らす。
やがて馬はタジャドルコンボの前で止まり、男は馬から降り立つ。
「久しぶりだな、映司。」
「やっぱり！新之助さん！」
それは徳田新之助　もとい徳川吉宗だった。
「ん～・・・。」
「勇者様？どうかしましたか？」
「いや・・・あの人どこかで・・・。」
シンクは記憶の中からその人物の正体を探す。
「・・・まさか。」
そして答えを見つけ出した。

「徳田新之助・・・徳川吉宗!?嘘!?まさかの暴れん坊将軍!?」
シンクはパニックに陥った。

「新之助さん紹介します。こっちが後藤さん。」

「どうも。後藤慎太郎と言います。」

「こっちが伊達さん。」

「伊達明だ!よろしく!」

「うむ、よろしく頼む。」

タジャドルコンボはバースとプロトバースを新之助に紹介する。

「改めて、徳田新之助だ。この時代の人々には徳川吉宗と言った方が良いかな?」

「「・・・え?」」

新之助　否吉宗の言葉にポカンとするダブルバース。

「「徳川・・・吉宗ぇぇぇぇぇ!?」」

ダブルバースは思わず天に叫んだ。

「映司、それにアンク殿。ここは我々に任せてガラの元へ。」

「え？でも・・・。」

「大丈夫だ、任せてくれ。」

「・・・分かりました。アンク！」

「先に行け！」

吉宗の提案を受け入れ、タジャドルコンボは空へ。アンクはと言うと・・・

「お前も来い！」

「え？」

先ほどまでパニックになっていたシンクの腕を掴んだ。

「行くぞ！」

「てぇ、えぇぇぇぇぇ！」

アンクはシンクの腕を掴んだまま空へと飛翔する。シンクも当然それにつられて空に上がる。

「後は頼みます！」

「了解した！」

タジャドルコンボとアンク＋シンクはその場を吉宗達に任せてガラのいるグラナ砦へと向かった。

タジャドルコンボが行った後、吉宗は静かに腰の鞘から刀を抜き取る。

「・・・・。」

吉宗は神経を集中させ、そして・・・

「成敗！」

迫り来る屑ヤミーや騎士に対して無双を開始する。

吉宗の刀は、次々と屑ヤミーや騎士を撃破してゆく。

やがてその場には大量の亡骸が生まれたのであった。

「すげぇぇぇ・・・・。」

「流石は暴れん坊将軍・・・・。」

ダブルバースはただこの吉宗劇場を呆然と見つめていた。

無論、里中やエクレやリコも。

新武装と異なる自分とダブルオーズ（前書き）

第５２話です。

ようやくガラとの戦いが始まるのとバースのオリジナル武装が１つ出ます。

オリジナル武装の解説はもう１つが出てから２つまとめて書きます。

新武装と異なる自分とダブルオーズ

「せいや！」

森の中で敵と交戦中のタトバコンボ、ダルキアン、ユキカゼ達の戦況は優勢になっていた。

タトバコンボが加勢してから一気に盛り返したのだ。

「赤いオーズも強いでござるが・・・。」

「3色のオーズも強いでございますねお館様！」

タジャドルコンボも強いが、タトバコンボの強さにも驚くダルキアンとユキカゼ。

「まとめて決める！」

《スキャニングチャージ！》

タトバコンボはオースキャナーで再度コアメダルをスキャンすし、必殺技のタトバキックを発動する。

タトバコンボはバッタレッグで跳躍すると、地面に向けて3つの輪が赤　黄色　緑の順番で現れる。

タトバコンボはその中を通って行き、輪を通るとそのコアメダルの動物のエフェクトが装備されていく。

「せいやぁぁぁぁぁ！」

タトバキックを受けた騎士や屑ヤミーは爆散し、その余波で周りにいた騎士達も爆散させた。ＯＯＯと言う文字を浮かべて。

「これで全部かな？」

どうやら今のタトバキックで大半を倒してしまったらしい。

増援も来る気配がなかった。

「助かったでござるよ。」

「いえ、無事で何よりですよ。」

タトバコンボとダルキアンが会話をしていると・・・

「うわぁぁぁぁぁ！」

どこからかシンクの声が聞こえた。

「この声は勇者殿か？」

「はい、多分そうでございます。」

ダルキアンとユキカゼ、タトバコンボは上を見た。

「あれは・・・アンク！？それにオーズ！？」

タトバコンボは金髪の少年を掴んで飛んでいるアンクとタジャドルコンボを発見した。

「方向からしてグラナ砦でございますお館様。」

「うむ・・・。」

ユキカゼに言われて考え込みダルキアン。

「すいません・・・。」

「ん？」

「その・・・グラナ砦って場所はどこに？」

「その道をまっすぐ行けば着くでござるよ。」

タトバコンボにグラナ砦への行き方を教えるユキカゼ。

「ありがとう！俺ちょっとグラナ砦に行ってきます！」

タトバコンボはそう言い残すとグラナ砦方面に走って行った。

「お館様、我々は・・・。」

「そうだな・・・我々はスリーズ砦に向かおう。」

ダルキアンとユキカゼは一路スリーズ砦に向かった。

ーーーーーーー

スリーズ砦では突如として参戦した徳川吉宗、そして江戸の町の民の加勢によって五分五分の状態に盛り返していた。

その一角では・・・

「ふん！」

吉宗の無双が続いていた。

「「・・・はっ！」」

唖然としていたダブルバースがようやく我に帰った。

「こうしちゃいられねぇ！将軍様だけに良い格好はさせないぜ！」

プロトバースはドリルアームを使い、屑ヤミーや騎士達を斬りつけていく。

「そろそろ俺も新武装を試すかな。」

バースはセルメダルを取り出して左スロットに挿入し、右のダイアルを回した。

《イクスブレード！》

バースの左肩のリセプタブルオーブから大型の実体剣であるイクスブレードが出現する。それに伴い左肩の形状もイクスブレードがマウントできる様な形状になる。更に左腕のリセプタブルオーブからは小型の盾を装備したアーマーが装備された。

バースは左肩からイクスブレードを引き抜き、両手で持つ。

「はぁ！」

バースは迫り来る屑ヤミーや騎士達をイクスブレードで斬り裂いていく。

「くっ！」

バースの左側から騎士が剣を振り下ろすが、装備された盾で防御する。

「邪魔だ！」

その騎士もイクスブレードで斬り裂いた。

「後藤ちゃ～ん！その武器今度こいつにも！」

「プロトバースは容量の問題で装備できません。」

「後藤ちゃん冷たいね・・・。」

戦闘中でもそんな会話をするダブルバースだった。

――――――

グラナ砦の天空武闘台、ここに一つの陰があった。

それは、ミルヒに擬態したガラであった。

「・・・そろそろだな。」

ガラは何かが来ること予期していた様に呟く。

その直後に、この天空武闘台に降り立った者がいた。

「来たか。オーズにアンク、そしてビスコッティの勇者。」

ガラは不気味な笑みを浮かべる。

ガラの言うとおり、この場に来たのはタジャドルコンボとアンク、そしてシンクである。

「ガラ・・・貴様今回は何が目的だ？」

「以前と変わらんよアンク。この世界に終末をもたらし、我が新世界の王になるのだ。この黒いコアメダルと器でな。」

アンクの質問に前回の変わらない目的を喋るガラ。

「残念だけど・・・今回もそれは阻止させてもらう！」

タジャドルコンボはタジャスピナーを構える。その後にアンクも続く。

「・・・やってみるがいい。」

ガラはミルヒの姿からグリード態になる。その両手には大剣の状態になったエクセリードとパラディオンがあった。

「バースや徳川吉宗の出現は計算外だったが・・・我の目的の障害はオーズとアンク・・・貴様達だけだ！」

そう言うといつの間にかガラはタジャドルコンボの目の前に現れた。

「っ！？」

「ふん！」

「がは！」

突然の事で対象できず、タジャドルコンボはエクセリードに斬りつけられる。

「映司！」

「遅い！」

「うが！」

アンクは映司を助けに行こうとしたが、その直前にガラがパラディ

オンを振るいアンクを斬り裂いた。
アンクの身体からはセルメダルが散らばる。
「は、速い・・・。」
シンクはガラの速さに愕然とする。
「このやろう！」
アンクは右腕から火炎弾をガラに向かって放つ。
「舐めるなよ。」
ガラはアンクの火炎弾をパラディオンでガードする。
「せや！」
「ほう・・・。」
その隙を見逃さず、タジャドルコンボはタジャスピナーに炎を纏わせてガラにパンチを浴びせようとするが、
「！？　うわ！」
ガラは身をかがめてタジャドルコンボの攻撃を避けた。
「はぁ！」
「がぁ！」

攻撃を避けられたタジャドルコンボはガラから蹴りをもらい、アンクのいる場所まで飛ばされる。

「はぁぁぁ・・・。」

ガラの持つエクセリードとパラディオンにエネルギーが収束してゆく。

「ホーリー・・・セイバー！」

ガラはホーリーセイバーを放った。

「「っ！」」

タジャドルコンボとアンクは翼を広げ、緊急回避したが、

「「うわぁぁぁぁぁ！」」

回避が間に合わず、ホーリーセイバーを受けてしまった。

幸いにタジャドルコンボの変身は解除されなかった。

「こんなものなのか・・・もっと骨があると思ったんだがな・・・。」

ガラはそのままタジャドルコンボとアンクに近づく。

「こいつ・・・。」

「宝剣と姫様さえ何とかできれば・・・。」
アンクとタジャドルコンボが立ち上がろうとした。

「せいや！」

「ぬぅ！」

突然ガラは側面から蹴られて床を転がった。

「・・・え？」

「・・・は？」

タジャドルコンボとアンクは思わず拍子抜けした声を出した。

「あれは・・・。」

シンクも目の前の光景に驚いた。

なぜなら、そこにはオーズがもう1人いたのだから。

「オーズが・・・。」

「2人だと？」

タジャドルコンボとアンクも事態がよく分からなかった。

「初めまして！もう1人の俺とアンク！」

もう1人のオーズ、タトバコンボはタジャドルコンボやアンクに挨拶した。

「え？何で！？何でオーズがもう1人！？」

「そんなの俺が知るか！」

タジャドルコンボとアンクはかるくパニックになる。

「何て説明しようかな・・・とりあえず、俺は君達とは違う時間枠のオーズ何だよ。」

「・・・つまり？」

タトバコンボの話しにいまいち着いて来れてないタジャドルコンボ。

「つまり・・・お前は、俺達とは違う未来を歩んだ映司・・・ってことか？」

「そう！流石アンク！」

アンクの解説によりようやくタジャドルコンボの頭が着いて来れた。

「馬鹿な・・・オーズがもう1人だと!?」

ガラも突然の事に動揺を隠せずにいた。

「もう1人のオーズ、力を貸してくれるかな?ガラを倒す為に。」

「もちろん!ライダーは助け合いだしね!」

「ありがとう!」

タジャドルコンボの提案に了承するタトバコンボ。

ダブルオーズ・アンク対ガラ、第2ラウンドが幕を開ける。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2950y/

仮面ライダーオーズ/ＯＯＯｆｅａｔ．ＤＯＧ ＤＡＹＳ 姫と勇者と赤き不死鳥

2012年1月5日01時52分発行